仮面ライダー エターナル=インフィニティ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー エターナル∞インフィニティ

【Nコード】

N7982W

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ライダー達の前に現われる異なる世界からの者達。彼等は何故ライダー達の世界に来たのか。

ライダー達とそれぞれの世界の戦士達のクロスオーバー作品です。

参戦作品

仮面ライダー
エターナル

∞インフィニティ

参戦作品

仮面ライダークウガ

仮面ライダーアギト

仮面ライダー龍騎

仮面ライダーファイズ

仮面ライダー剣

仮面ライダー響鬼

仮面ライダーカブト

仮面ライダー電王

仮面ライダーキバ

仮面ライダーディケイド

仮面ライダーダブル

仮面ライダーオーズ

仮面ライダーフォーゼ

百花繚乱サムライガール

戦国乙女

祝福のカンパネラ

魔法少女まどか マギカ

フリージング

IS - インフィニティ ∞ ストラトス

これはゾンビですか？

バカとテストと召喚獣

バカとテストと召喚獣につ！

ドラゴンクワイシス！

にゃんぱいあ

探偵オペラミルキィホームズ

DOG DAYS

緋弾のアリア

第一話 集うライダー達その一

第一話 集うライダー達

紅渡はこの時町の中にいた。名護啓介も一緒だ。

名護はその紅にだ。鋭い目で言った。

「確かにいたな」

「はい、ここにいました」

紅も鋭い目になり名護の言葉に答える。

「何かがここに」

「いた。しかしだ」

「あれは何だったんでしようか」

「何だと思う」

名護は己の隣にいる紅の顔を見ながら彼に問うた。

「あれは」

「少なくとも今出ているグリードじゃないですね」

「そうだな。そしてドーパメントでもない」

「どちらでもないですね」

「あれは。むしろ」

「悪霊だよな」

キバットがだ。二人の周りに出て来て言う。

「そうした感じの奴だったよな」

「そうだ。あれは悪霊だ」

名護は確かな声でキバットの言葉に頷いた。

「虚ろな白い姿、そして底知れない悪意」

「それってまんま悪霊の特徴だしな」

「悪霊、それを操る存在か」

「それが僕達の今度の相手でしようか」

紅は怪訝な顔になり名護に問い返した。

「グリード以外の」

「そうなのだろうか」

紅の言葉にだ。名護は顔を顰めさせてだ。

そのうえでだ。こう言ったのだった。

「違うかも知れない」

「違いますか？」

「この悪霊の様なものは今まで我々が戦ってきた相手とは全く違う」

「それは確かですね」

「そうだ。何もかもが違う」

「物理的な攻撃は効きますけれど」

しかしだ。それでもだとこののだ。

「何かが決定的に違いますね」

「この世界に元からいるのか」

名護はこつとも考えた。

「そして我々の前に来ているのか」

「といますと」

「あの悪霊は我々の世界のものとは全く違う」

名護は目を鋭くさせて紅に話す。

「他の世界から来たのではないのか」

「違うとなると一体」

紅は名護の言葉に首を捻りだ。そうしてだった。

怪訝な顔になりだ。名護に問い返した。

「他の世界、他の世界から出て来た」

「そうした存在か」

「ディケイドがそれぞれの世界を回りましたけれど」

紅はこのことからだ。推理していき名護に話していく。

「その世界の何処から来たんでしょうか」

「その可能性はあるな。だが」

「だが？」

「ライダーのいない世界もある筈だ」

名護もまた推理を働かせながら話す。

「その世界の何処から来たのだろうか」

「あの悪霊達は」

「まだ確信はできない」

決め付けはできない、そうだというのだ。

「しかしだ」

「怪しいですか」

「そう思う。あの悪霊はこちらの世界の存在には思えない」

それはだ。どうしてもだというのだ。

「ではどの世界から来たのか」

「そうした話になりますね」

「少なくとも今回のこともスサノオは関わっている」

「そうですね。それは間違いありませんね」

このことは名護だけでなく紅も確信できた。何故ならライダー達が戦う理由はスサノオと戦うことだからだ。それでこのことは確信できたのだ。

第一話 集うライダー達その二

そしてスサノオはあらゆる世界で仕掛けてきている。そのことも知っているからだ。

名護も紅もだ。スサノオの陰は確信できた。

それでだ。紅はこんなことも話した。

「じゃあ今度あの悪霊が出て来たら」

「その時はか」

「少し調べますか？」

名護に顔を向けて提案する。

「あの悪霊の何かしらの手掛かりを手に入れて」

「そうだな」

名護もだ。紅の言葉に頷く。

「そのうえで決めよう」

「そうしましょう」

「ああ、それでだけねどな」

キバツトがだ。また言ってきた。

「ひよっとすると悪霊だけじゃないかも知れないぜ」

「悪霊だけじゃないって？」

「何か他の妙な気配も感じるんだよ」

「そうだといいのだ。」

「何かな。こつちに来てるな」

「こつちに？」

「とりあえず花鳥に行こうぜ」

その喫茶店に行こうというのだ。

「あそこにな」

「花鳥に？」

「ああ、そこに他のライダー達の誰かが来てる筈だからな」
それでだ。そこだというのだ。

「そこで話を聞こうぜ」

「確か今あそこには」

今度はだ。タツロツトも出て来た。そのうえで紅と名護に話すのだった。

「城戸さんと秋山さんがいますよ」

「あの人達がいるんだね」

「そうか。彼等が」

「はい。ですからそこに行きましょう」

また話すタツロツトだった。

「それで情報収集といきましょう」

「それがいいな」

「そうですね」

名護が最初に言い紅が頷く。

「じゃあ兄さんにも連絡します」

「彼も悪霊達と戦っているのか？」

「ちよつと待って下さい」

紅は自分の携帯を取り出してそのうえで兄である登太牙に連絡を入れる。そのうえで耳元に当てる。そしてわかったことは。

彼はだ。電話の向こうの兄に問い返した。

「えっ、そつちには？」

「そうだ。悪霊ではなかった」

「それで出て来たのは」

「妖しい女だった」

それだったというのだ。女だとだ。

「奇妙な術を使う女だった」

「女！？グリッドでも悪霊でもなく」

「女だ。何かに変身することもなかった」

電話の向こうの登は弟にさらに話す。

「だが力はかなりのものだった」

「そうだったんだ」

「あれは間違いなく只者ではない」

登はこうも言う。

「言うなら魔人が。実際に俺一人では危うかった」

「兄さん一人では」

「五代さんが来てくれた」

そのだ。五代の力も借りてだというのだ。

「それで何とか退けたが」

「けれどその女の正体は」

「わからない」

登の返答は紅が予想したものだった。

「全く。何者かも」

「じゃあ兄さん、とりあえずは」

どうしたいか。紅は兄に話した。

「花鳥に来てくれるかな」

「あの店か」

「うん、あの店でね」

集まりだ。そうしてだというのだ。

第一話 集うライダー達その三

「話をしよう」

「そうだな。それがいいな」

「じゃあ。僕達も今から行くから」

こう話をしてだ。そのうえでだった。

紅は登との電話のやり取りを終えた。そうしてだ。

携帯を切ってポケットの中に入れてからだ。名護に顔を向けて言った。

「じゃあ今から」

「花鳥に行こう」

「けれど。女ですか」

「それだよな」

ここでまた言ってきたキバットだった。

「俺さつき妙な感じがするって言ったよな」

「それがそうなのかな」

「そうかもな。とりあえず今はな」

「グリード以外にも」

「ああ、ひよつとしたら今回かなり大掛かりに話になるかもな」

キバットはふとこんなことを言った。言いながら紅の傍をホバリングしている。

「派手な戦いにな」

「その可能性はあるな」

名護も言う。

「これまで以上にだ」

「折角グリードとの戦いが一段落してきそうなのにはですか」

「タツロットはこのことを残念に思いながら話す。」

「今度はもっと派手にですか」

「それが僕達の戦いだけだね」

紅は自身のライダーとしての運命を受け入れながら話す。

「だから。仕方ないよ」

「そうだよな。スサノオが諦めるか完全に滅ばない限りな」
「どうかとだ。キバツトも言う。」

「永遠に続くよな」

「それは受け入れるしかない」

名護もそのことは受け入れていた。既にだ。

そうしてだった。そのうえでだった。

彼等は花鳥に向かうのだった。そうしてだった。

花鳥に着く。その内装よりは広い喫茶店の中を見回すとだ。

そこにもう登がいた。彼以外にも。

城戸真司に秋山蓮もいる。二人は紅達が店に入るとすぐに彼等が立っているカウンターの中からだ。こう言ってきたのだった。

「おい、話は聞いてるよな」

「また出て来た」

「はい、今度は女らしいですね」

「それもかなり妖しい」

「俺達も悪霊と戦ってきたところだよ」

「しかしだ。ここでだ」

城戸と秋山は二人に応えながら話していく。

「そんな訳のわからない女まで出て来てな」

「話はさらにややこしくなってきた」

「そうだ」

その通りだとだ。ここでカウンターの席に座る登も話す。

「とにかくおかしな女だった」

「それでどうした女だったのだ」

名護はカウンターに向かいながら登に尋ねる。

そうして彼の隣の席に座りだ。それからだった。

まずは城戸と秋山にコーヒーを尋ねてだ。再びだった。

「妖しいことはわかるが」

「ちょっと聞かせてくれるかな」

紅も登の隣に来た。彼が右で名護が左でだ。登を挟んだ形になる。そのうえで彼は紅茶を頼んでだ。兄に尋ねたのだった。

「どんな女だったの？」

「右目に眼帯をしていた」

登はまずはそこから話した。

「そして白髪を後ろに長く伸ばし」

「白髪を」

「そうして伸ばしていたのか」

「丈の短い高校生の制服に唐草模様を思わせるストッキングに手袋をしていた」

「ここまで聞いてだ。コーヒーと紅茶を淹れていた城戸と秋山が言った。」

「何かそれってよ」

「一度見たら忘れられない姿だな」

「俺もそう思った」

その女と戦った。登自身もそうだというのだ。

第一話 集うライダー達その四

「そしてその力はだ」

「力も」

「かなりの強さなのか」

「そうだった。刀を使っていてかなりの腕だった」

「それこそだ。ライダーとなった登を以てしてもだったのだ。」

「ダークキバになっても俺の方が押されていた」

「ダークキバになった兄さんでも」

「そこまで強かったのか」

「五代さんがいなければ」

「そのだ。共に戦った彼がいてくれたからだとも話すのだった。」

「退かせることすらままならなかった」

「おい、それって洒落にならないだろ」

「そこまでの強さなのか」

「城戸と秋山もだ。そこまで聞いてだ。」

「唸る様に言っただ。そうしてだった。」

「何か悪霊が増えただけでも厄介なものにな」

「また出て来たか」

「それで何者なんだよ、その妖しい女は」

「城戸は腕を組みながら首を捻る。」

「まあスサノオが関係してるのは察しがつくけれどな」

「それは間違いないな」

「秋山もそのことについては同意だった。」

「俺達の前に出て来たのならな」

「だろうな。ドーパメントの次はグリードでな」

「悪霊も出て来たと思ったが」

「今度は女かよ」

「敵が増える一方だ」

「何かよ。このまま増えるとな」
「どうなるか。城戸はまた話す。」
「そのうちどうにもならないことになるんじゃないか？」
「少なくともそうはさせない為にだ」
「どうかとだ。秋山はコーヒ―を淹れながら話す。」
「俺達がいるからな」
「だよな。じゃあとりあえずはな」
「どうかとだ。城戸は紅茶を淹れ終わってだ。紅に出してからだ。」
「そしてだ。また言うのだった。」
「その女とも戦うか」
「それでだが」
名護はだ。ここまで聞いてだ。
「そのうえでだ。こう登に尋ねた。」
「その女は何処に去ったのだ」
「去った場所か」
「そこに案内しなさい」
「いささか命令口調でだ。登に言う。」
「そうして実際にまた戦えば色々わかる筈だ」
「だよな。これまでスサノオが関わって外見が人間の奴ってな」
「いなかったからな」
城戸と秋山もだ。このことについて指摘する。そうしてだった。
「ここまで話してだ。彼等もだった。」
「とりあえず登、いいか？」
「女が去った方に案内してくれ」
「わかった。そこはだ」
何処なのか。彼が言おうとするとだ。
不意にだ。城戸の携帯が鳴った。それで出るとだ。
「おい、今どうしている」
「何だ、乾かよ」
「そうだ、俺だ」

こうだ。乾が彼に携帯で言ってきたのだ。
それでだ。彼が言うことは。

「今草加や三原と一緒に埼玉アリーナの方にいる」

「そこで悪霊が出たのかよ。それともグリードか？」

「いや、女だ」

その言葉を聞いてだ。そこにいた全員がだった。

眉を顰めさせた。乾の話に注目した。

「女!？」

「まさか」

「片目の白い髪の女だ」

また言う乾だった。

「その女が出て来て今から戦うところだ」

「御前等二人だよな」

「ああ、とりあえずいけると思うがな」

「今からそつち行つていいか？」

女の外見まで聞いてだ。城戸は乾にすぐに言った。

第一話 集うライダー達その五

「埼玉アリーナの方にな」

「何かあるのか？」

「ああ、あるんだよ」

あるから行くというのだ。

「だからな。今からな」

「そうだな。女だけじゃない」

ここでだ。さらにだった。

「悪霊まで出て来た」

「悪霊までかよ」

「俺達三人だけじゃ辛いかもな」

乾は冷静に分析して述べた。

「悪霊達も出るとな」

「数はどれだけいるんだ？」

その悪霊の数をだ。城戸は尋ねた。

「一体」

「百、いや二百はいる」

乾はその数についても答えた。

「かなりの数だな」

「わかった。じゃあ今すぐ行く」

城戸は乾に対して即答した。

「ちょっと待っていてくれ」

「女は俺達が相手をする」

乾達でというのだ。

「悪いが悪霊達はな」

「任せろ。それじゃあな」

こう話してだった。城戸は携帯を切り自分のズボンのポケットに収めた。それからだ。

紅達に顔を戻してだ。こう言ったのだった。

「おい、それじゃあな」

「そつだな、すぐに埼玉アリーナに行くぞ」

「そこですな」

秋山と紅が応える。そうしてだった。

彼等はすぐに店を出てだ。それぞれのバイクで埼玉アリーナに向かった。バイクを飛ばしその前に来るとだ。既にだった。

登が言ったそのままの姿の女がだ。三人のライダーと戦っていた。彼等は埼玉アリーナの入り口のところでだ。女と戦っていた。

仮面ライダーファイズと仮面ライダーカイザがだ。仮面ライダー

デルタのフォローを受けながら片目の女と戦っていた。しかしだ。

ファイズとカイザが正面から攻撃するが。それでもだった。

「甘いわね」

「くそつ、これでも駄目か！」

「今の攻撃も効かないのか」

ブレイドの攻撃を弾き返されてだ。ファイズとカイザはそれぞれ悔しさに満ちた声を出した。

そしてだ。デルタもだ。

その両手に持つ銃で撃とうとする。しかしだった。

ビームをあえなくかわれた。それを見てだ。

「くつ、またか！」

「無駄だ三原」

カイザがデルタに対して言う。

「こいつに銃は通じない」

「見切ってるっていうのか!？」

「そつだ。間違いない」

カイザは女と間合いを取りながら話す。

「こいつは既に見切っているんだ」

「じゃあどうすればいいんだ」

「このまま攻めるか？」

ファイズが二人のライダーに問うた。

「そうするしかないか？」

「いや、それは駄目だ」

カイザがすぐにそれは駄目だとした。

「さっきやっても何の効果もなかったな」

「ああ」

「俺達のブレイドではこの女の剣には勝てない」

「そうだな。忌々しいがな」

「こいつは剣の達人だ」

カイザはそのことをもう把握していた。戦いの中で。

第一話 集うライダー達その六

「かといつても下手な距離じゃ銃も見切る」

「じゃあどうすればいいんだよ」

デルタが二人のすぐ傍まで来て問う。

「このままじゃラチが明かないぞ」

「こっちは三人だ」

しかしだ。ここであった。カイザはこう言ったのだった。

「三人いる。相手は一人だ」

「オルフェノクの王と戦った時と同じだな」

その状況を聞いてだ。ファイズは言った。

「そうだな」

「そうなる」

「じゃあどうするんだ。今は」

「いいか、乾君はだ」

ファイズを見てだ。カイザは告げた。

「正面からブラスターモードで向かえ」

「あれでか」

「俺は奴の右に回る」

カイザはそうするというのだ。そしてさらにだった。

「三原、君は奴の左だ」

「三人で囲んでそれでか」

「一斉に攻撃を浴びせる」

そうするというのだ。

「それでどうだ」

「少なくとも今までよりはいいな」

ファイズは女を見据えて言葉を返した。

「目くら滅法に仕掛けるよりはな」

「そうだ。この女が何者かは知らない」

それはカイザにもわからないことだった。

「だがそれでもだ」

「こいつもやつぱり」

「スサノオの縁者だ。間違いなく」

「あら、知っているのね」

スサノオという名前を聞いてだった。女は。

悠然とした笑みになってだ。こう三人に言ってきたのだった。

「あの方のことを」

「あの方だと!？」

「ではやつぱり貴様は」

「スサノオの」

「あの方に導かれてここに来たから」

それでだ。知っているというのだ。

「素晴らしい方ね。あの方は」

「糞野郎だ」

ファイズは女がスサノオを褒め称える言葉を言うのを聞いてだ。

吐き捨てる様にしてだ。そのうえで言い返したのだった。

「あいつだけはな」

「話は聞いているわ」

女は三人にこうも言ってきた。彼等の周りには無数の悪霊達が蠢いている。彼等の間合いは間も無くファイズ達を掴めるところにまで達していた。

その中でだ。女は悠然として言うのだった。

「あの方からこちらの世界のことをい」

「こちらの世界!？」

「今確かに言ったな」

まずはファイズとカイザがだ。その言葉の意味に気付いた。

「ということば」

「こいつはやはり」

「そうよ。元々はこの世界の人間ではないわ」

その通りだとだ。女は言い切った。

「私達の世界では侍がまだいるのよ」

「侍!？」

デルタがそれを聞いて言う。

「侍がまだいる世界」

「そうよ。その世界から来たのよ」

「言っている意味がわからないな」

ファイズは女の言葉を聞いてまずはこう言った。

「侍がいる世界。シンケンジャーとかいう連中じゃないな」

「シンケンジャー?」

その戦士達については女は。

怪訝な声になってだ。こう言うのだった。

「彼等のことは知らないわね」

「そうか」

「私達の言う侍は生身で刀やそういったものを手にして戦う存在」

「昔ながらの侍だな」

カイザは女の話の話を聞いてこう察した。

第一話 集うライダー達その七

「そういう存在がか」

「私達の世界の侍よ」

「相変わらず話はわからないが」

「ファイズは女の話を最後まで聞いてまずはこう返した。

「少なくとも御前がこの世界の奴じゃないことはわかった」

「そしてスサノオと関わりがある」

「カイザが指摘したのはこのことだった。

「その二つは確かだな」

「その通りよ」

「じゃあ御前は何者なんだ？」

「私は何者か、というのね」

「そうだ。何者だ？」

「柳生」

「女は名乗った。

「柳生というのよ」

「柳生！？というと」

「柳生と聞いてだ。カイザは。

「いぶかしむ声になってだ。こう女に問い返した。

「あれか。かつて江戸幕府に仕えた柳生家の」

「あの家が」

「確か剣豪も生み出した」

「ファイズもデルタもだ。柳生家のことは知っていた。

「あの家の人間か？」

「まさか」

「しかしこの世界の人間ではない」

「カイザはこのこともだ。話したのだった。

「違う世界の柳生家の女だな」

「そうなるわ。それにね」

「それに？」

「今度は何だ？」

ファイズとデルタが今の女の言葉に問うた。

「一体」

「何だっというんだ」

「貴女達が戦っているこの者達は」

今彼等の前にいるだ。その悪霊そのものの連中のことだ。

「何と呼んでるのかしら」

「悪霊じゃないのか？」

「そうじゃないのかな」

ファイズとカイザが答える。

「そうとしか思えないんだが」

「違うというのかな」

「悪霊ね。言い得て妙ね」

その呼び方はだ。女も悪くはないとした。

しかしだ。女はだ。こう言ったのだった。

「けれど違うわ」

「この連中は悪霊じゃなかったのか」

「近いわ」

近いことは近いとだ。女はデルタに答えた。

「けれど。彼等は悪霊じゃないのよ」

「じゃあ何だ」

ファイズは女を見据えて問う。その周りには今もだ。その者達が

迫ろうとしている。

「この連中は」

「魔獣」

女はこう言った。

「彼等は魔獣というのよ」

「魔獣!？」

「この連中は魔獣」

「そう呼ぶのか」

「彼等の世界ではそう呼ばれているわ」

「そうだとだ。女は三人のライダー達に答えた。」

「彼等はね」

「彼等の世界、か」

「カイザはこのことに反応を見せた。」

「そのうえでだ。また女に問うたのだった。」

「では御前とこの連中はそれぞれ違う世界にいるんだな」

「その通りよ」

「複数の世界からこの世界に介入してきている」

「カイザはこうも言った。」

第一話 集うライダー達その八

「そういうことだな」

「頭の回転が速いわね。全てはそのままよ」

「ということとはだ」

「スサノオは複数の世界から送り込んできている」

「ファイズとデルタにもだ。このことがわかった」

「そういうことか」

「つまりは」

「そうよ。貴女達も結構頭がいいわね」

「頭が悪ければな」

「とつくの昔に死んでいるからな」

「そうね。それに」

しかもだとだ。女はまた言った。

その言葉と共にだ。今だった。

紅達だ。この声をあげてだ。

「変身！」

「変身！」

それぞれその言葉と共にだ。ライダーに変身してだ。

魔獣達に突き進みだ。薙ぎ倒していくのだった。

その中でだ。仮面ライダー龍騎になっている城戸がファイズに問うた。

「おい、乾無事か！」

「城戸さんか」

「ああ、無事か？」

「何とかな」

無事だとだ。乾も彼に伝える。

「生きているさ」

「そうか、それは何よりだ」

「詳しい話は後になるな」

「ここだ。乾は。」

右手をスナツプさせてだ。それからだった。再び剣を手にしてだ。女と対峙して告げた。

「御前が何者かはわからないがな」

「それでもだというのね」

「御前は敵だな」

「結果としてそうなるわね」

「それにスサノオがいるのなら」

女の後ろにだ。それならばだというのだ。

「倒す。詳しい話も聞いてやる」

「あの方と戦う為に」

「御前がそれを望むのならそうしてやる！」

こう叫んでだ。ファイズは。

順手に持ったその剣、赤い光を出すその剣を振るいだ。

女に突き進もうとする。その前にだ。

入力してだ。そのうえでだ。

その姿を赤く変えた。その姿になりだ。

女に進む。そのうえで言うのだった。

「これならだ」

「私に勝てるというのかしら」

「少なくとも負けるつもりはない」

それはないとだ。ファイズは女に返す。

「だから今この姿になったからな」

「ブラスターモードね」

女はファイズの今の姿を見てだ。こう言ったのだった。

「今の姿は」

「何っ、知っている!？」

「ファイズのブラスターモードを!？」

他のライダー達もだ。女の今の言葉にだ。

このことを察してだ。そうして言ったのだ。

「やっぱりスサノオからか」

「聞いていたんだな」

「そうよ。貴方達のは全てね」

女は魔獣達と戦う龍騎とナイトにも話してきた。

「わかってるわ」

「仮面ライダーのこともか」

「全て」

「知っているわ。そしてね」

女はファイズと戦いながらだ。そのライダー達に話してきた。

「私とこれ以上戦いたければ」

「どうしろというんですか？」

仮面ライダーキバが女に尋ねた。

第一話 集うライダー達その九

「そうしたければ」

「私達の世界に来ることね」

悠然と笑ってだ。女はライダー達にこう告げてみせた。

「そちらにね」

「御前達の世界にか」

仮面ライダーイクサが女の言葉に対して返した。彼はライジングモードになりそのうえで魔獣達と戦っている。

「来いというのか」

「そうよ。来ることね」

悠然と笑ったままだ。女はライダー達にまた言う。

「そうすることね」

「それは誘いだな」

仮面ライダーサガ、登が言った。

「そう思っでいいな」

「ええ、そうよ」

その通りだとだ。女も悪びれずに返す。

そのうえでだ。ファイズ達を見て言うのだった。

「さて、今から来るわね」

「その通りだ」

「ここで決めさせてもらう」

彼女の左右にそれぞれついたカイザとデルタが答える。

「この状況ならだ」

「倒せない筈がない」

「確かにね。このままだとね」

女も彼等を目だけで見回しながら返す。

「危ういわね」

「だから言ってるだろ」

ファイズがさらに攻撃を仕掛けながら女に言う。

「御前はここで倒す」

「敵は少しでも少ない方がいい」

「どうせ御前以外にもいるんだからな」

「話を聞きたいとは思わないのね」

女はファイズのその攻撃を己の剣で受け止めながら三人に返した。既に「カイザとデルタも攻撃に入っている。今まさに三人の同時攻撃がはじまるうとしていた。

その中でだ。女は言うのだった。

「私達の世界のことを」

「生憎な。そんなつもりはないからな」

ファイズが女に対して返す。

「どうせこれ以上話すつもりはないんだらう」

「確かに。それはその通りよ」

「それに御前がこっちの世界に来られるんならな」

そこからだ。ファイズも察したのだ。

「俺達も御前の世界に来られるな」

「この魔獣達だったな」

「この連中のいる世界にも」

「その通りよ。貴方達仮面ライダーは」

女は平然としてだ。彼等に話してみせる。

「私達の世界にも来られるから」

「そういうことだな。それならな」

「ここでだ」

「倒させてもらう」

三人同時に言っただ。そのうえでだ。

カイザがだ。二人に言った。

「あれで決めるぞ」

「あれでか」

「一気になんだな」

「この女にはあれしかないだろうからな」

それでだ。ファイズとデルタに話してだ。そうしてだった。

三人のライダー達は同時にだった。

それぞれのポインターでだ。ロックオンした。

赤、黄、そして青の三つの光の円錐が女に突き刺さる。それでだ
った。

三人同時に跳びだ。蹴りを浴びせにかかってきた。

「面白い攻撃ね」

「うおおおおおおおおおおおー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！
叫び声を挙げながらだ。攻撃を浴びせる。しかしだ。

女はそれを受けはしなかった。微笑んでからだ。

姿を消してしまった。後に残ったのは。

声だけだった。女の声が攻撃を空振りさせ空しく着地した三人に
届いた。

「流石ね。それを受けたら私も危うかったわ」

「くっ、逃げたか」

「ええ、そうさせてもらったわ」

女の声が何とか体勢を立て直しながら歯噛みするカイザに伝えて
きた。

第一話 集うライダー達その十

「仮面ライダー、噂通りね」

「出て来い！」

デルタが顔をあげて女に叫ぶ。

「俺だつてやられっぱなしじゃいられるか！」

「だから。今倒される訳にはいかないのよ」

女は姿を出さない。しかしだ。

それでも声だけがしてだ。ライダー達に対して言うのだった。

「どうしても私を倒したければ」

「そっちの世界に来い」

「そういう解釈でいいのかな」

「その通りよ。待っているわ」

楽しむ声でだ。女は告げてだ。

やがて気配も全て消えた。後に残っていたのは。

ライダー達だけだった。既にだ。

魔獣達も倒されるか消えていた。それを見てだ。

ファイズが最初に変身を解いた。そうして乾巧本来の姿になりだ。

そのうえでだ。同じく変身から戻っていた草加雅人、三原修二に

だ。こつ声をかけたのだった。

「あいつの世界に行くか？」

「そうだな。そうするか」

「向こうから言ってるんだしな」

草加と三原もだ。乾のその言葉に応える。

「今は行き方がわからないにしても」

「そうしてあいつを倒さないとな」

こつだ。二人が話しているとだ。

彼等の目の前にだ。白い小さな生き物が出て来た。

猫と兎を合わせた様な姿をしている。目が赤く耳は尻尾の様にな

っている。その謎の生きものが出て来てだ。彼等に言ってきたのだ
った。

「君達はある世界よりこっちの世界に来て欲しいんだけどね」
「何だ御前は」

「僕はキュウベえっていうんだ」

「こうだ。この生きものは名乗ってきた。」

「あの魔獣がいる世界の者なんだよ」

「魔獣達の？」

既にライダーから戻っている紅がその言葉に問い返してきた。

「あの連中のことを知ってるんだ」

「うん、知ってるよ」

この生きものキュウベえは己の身体を猫の様に舐めながら紅の問
いに答える。

「けれどあの女のことはあまり知らないよ」

「それでも魔獣達のこととは知ってるんだよね」

「僕達の世界のことだからね」

だからだとだ。キュウベえはまた答えた。

「ずっと戦ってきてるしね」

「色々と聞きたいことがあるんだけどね」

城戸もキュウベえに尋ねる。

「いいか？話を聞かせてもらってな」

「うん、その為にここに来たんだしね」

キュウベえは城戸の問いにまた答える。

「何でも聞いてよ。魔獣のことなら」

「それでは」

ここまで話を聞いてだ。秋山も言った。

そのうえでだ。ライダー達は。

それぞれの仲間達に連絡をする。そうしてだった。

レストランアギトに集めるのだった。それからだった。

白い店の中でだ。キュウベえの話を聞くのだった。

キユウベえはそれぞれの席に座る戦士達にだ。こつ話すのだった。

「まずは僕達のことを話そうか」

「僕達？」

「僕達というのか？」

「うん、そうだよ」

まずはこつライダー達に話すのだった。

「僕達だよ」

「おかしい表現だな」

葦原涼がアギトの面々が座るテーブルにいるキユウベえに言い返した。

「あんたは見たところ一匹だが」

「それでも僕達なんだよ」

「あんた達は何匹もいるのか？」

「そうなんだ。僕達は固体はそれぞれだけれど一つの目的の為に動いてるから」

だからだというのだ。

「僕達なんだ」

「何かそうした話を聞くと」

葦原と同じ席にいる氷川誠も言う。

第一話 集うライダー達その十一

「君達つて群生生物みたいなんだけれど」

「そう考えてもらつていいよ」

無表情そのものにだ。キュウベえは氷川の言葉にも応える。

「その通りだしね」

「何だよ、それ」

その話を聞いてだ。こう言ったのは。

剣崎一真だった。彼は仲間達と共に別の席にいる。

だがその席でこう言つてだ。首を傾げるのだった。

「頭の中身は同じなのか？」

「身体は違うけれどね」

その剣崎にも話すキュウベえだった。

「そうなつてるんだよ」

「そうなのか」

「話わかつてくれたんだね」

「大体だけれどな」

わかつたと。剣崎も返す。

それを見てからだ。キュウベえはライダー達に話を再開した。

「それでだけれど」

「ああ、それでだよ」

「まずはあんたがどうやつてここに來てるか」

「それを聞きたいんだけどな」

「僕は門を通つて來てるんだ」

そうして行き來しているとだ。キュウベえは話す。

「それぞれの世界の門をね」

「あれか」

今度言つたのは門矢士だった。

「それぞれのライダーに行き來していたあの様なものか」

「あれっ、僕達の世界だけじゃないんだ」

「あの女の世界も含めてだ」

門矢はキュウベえにこう話す。

「俺達はそれぞれの世界を行き来して戦ってきた」

「それなら話は早いよ。この門のことを知っているのはあちらの世界じゃ僕とあの魔獣達だけなんだ」

「それとスサノオだね」

野上良太郎がこう言う。

「スサノオが世界を通しているかどうかはわからないけれど」

「それは僕も知らないけれど」

キュウベえも知らないことがあるというのだ。

「とにかく門はね」

「それ何処にあるんだよ」

城戸が門の場所を尋ねる。

「それがわからないとどうしようもないだろ」

「門の場所はね」

それは何処にあるかというところ。

「いつも急に出て来るから」

「門が出て来てか」

「その都度移動する？」

「それぞれの世界に」

「そうした理屈か」

「つまりあれだな」

ここまで話を聞いてた。左翔太郎は自分の席で腕と脚を組んだ状態で話した。

「スサノオがその都度俺達をその世界に行かせるんだな」

「ふうん、スサノオってそういうことをするんだね」

キュウベえはこのことははじめて知ったという感じだった。

「それは知らなかったよ」

「あいつはそうした奴だ」

今言ったのは天道総司だった。

「俺達と戦い。色々と仕掛けてだ」

「そうして？」

「俺達がそれをどう防ぐのかを見て楽しみにしている」

「楽しみねえ」

キユウベえはそのことについてはだ。

首を傾げさせだ。無表情のまま話す。

「僕にはわからないね」

「楽しみがわからないのか」

「僕達には感情がないんだ」

そうだとだ。キユウベえは天道だけでなく他のライダー達にも話す。

第一話 集うライダー達その十二

「だから。そうしたことはわからないんだ」

「そうなのか」

「そうなんだ。それはわかっておいてね」

「あらためて話すキュウベえだった。」

「けれど少なくとも君達の敵じゃないし」

「隠していることはあるのかな」

「今言ったのは草加だった。」

「君はどうも何かを隠すタイプの様だが」

「隠せたら隠すけれど」

その場合はそうすると。このことは否定しないキュウベえだった。

だがそれでもだ。今はだというのだ。

「君達には隠せないみたいだね」

「隠してもすぐに見破ってみせるさ」

北岡秀一はこのことを堂々と告げた。

「伊達に敏腕弁護士をやってる訳じゃないからな」

「だよ。隠しても何にもならないし」

キュウベえは既にライダー達を見抜いていた。彼等は戦闘力だけ

でなく頭脳においてもかなりのものだということだ。

「隠さないよ。僕の知ってる限りのことを話すよ」

「それでどうなっているんだ？」

響鬼もまたキュウベえに尋ねた。

「スサノオは色々な世界に介入しているみたいだけれどな」

「少なくとも僕の世界の魔獣はスサノオが後ろにいるんだ」

「キュウベえはまずはこのことから響鬼に話す。」

「それとあの女にもそうみたいだね」

「魔獣を操ってその世界のか」

「仮面ライダーに挑んでいる」

「そうなのか？」

「僕達の世界には仮面ライダーはいないよ」

それは否定するキュウベえだった。

「魔法少女はいるけれどね」

「魔法少女？」

「何だ、そりゃ」

「女の子が戦ってるのか？」

「僕達の世界ではそうだよ」

彼等の世界ではだ。そうだというのだ。

「仮面ライダーはいないけれど魔法少女が戦ってるんだ」

「あの魔獣達とか」

「そうしてるのか」

「そうだよ。それで君達が僕達の世界に来る時になったら」

その時こそはと。キュウベえは話す。

「門が開くから。それまでは待つていることだね」

「待つまでもないだろうな」

今言ったのは橘朔也だった。

「スサノオはいつもあちらから仕掛けて来る」

「そうですね。あちらから来るからこそ」

「門もすぐにやって来る」

橘は剣崎にも話す。

「すぐにだ」

「じゃあその時にその世界に入って」

「あちらの世界のスサノオの企みを潰す」

橘は己の考えを淡々と話していく。

「そうするべきだ」

「ええ、それじゃあ」

「ううん、やっぱり仮面ライダーは頭がいいみたいだね」

キュウベえにもこのことはよくわかった。

「僕があれこれ言う必要はないみたいだね」

「あいつと戦いはじめてかなりになるからな」

秋山がそれが何故かを話す。

「そのやり方は知っている」

「だからなんだ」

「それに俺達が全員城戸みたいならだ」

何気に向かい側の席に座る城戸のことも話す。

「とつくに死んでいた」

「おい、俺が馬鹿だつていうのかよ」

「違うのか？」

「くそつ、こんな時でもそう言うのかよ」

「まあ。そつちの赤いライダーの人はね」

キユウベえは秋山に言われて少し怒った城戸を見て言った。

第一話 集うライダー達その十三

「直情的な性格みたいだけれど頭はそこまで悪くないと思うよ」

「あれっ、わかるのか？」

「うん。だって頭が悪いとそれこそすぐに死ぬからね」

「だからわかるというのだ。」

「ある程度の頭はあるよ」

「だよな。俺これでも大学だって出てるしな」

「とりあえず。僕の説明は不要な位皆頭はいいね」

「そうだよ。頭が悪いと今頃死んでたよ」

「じゃあ。まあ僕は暫くここの世界にいるから」

「キユウベえは断る様にして話す。」

「僕のわかる限りのことなら話すからね」

「わかった。ではまずはだ」

天道が言う。

「その開いた門に入るとしよう」

「それにしても何か大変なことになってきたな」

城戸は腕を組んでこう言った。

「スサノオが他の世界にもちよっかいかけてることはわかってたけれどな」

「それが仮面ライダーのいる世界にもだからな」

今言ったのは相川始だ。

「他の戦士達にもそうしていたとはな」

「全く。暇な奴だ」

秋山は表情を変えずにこう言った。

「何かとな」

「全くですよ」

良太郎は少しぼやいてる感じになっている。

「あちこちの世界に関わってるんですね。本当に」

「問題はどれだけの世界に関わっているかだね」
「フィリップが考えるのはこのことだった。」
「果たして幾つの世界に関わっているのか」
「多分関わっているのはあの二つの世界だけじゃない」
「天道はこう見立てた。」
「おそらく。俺達の今度の戦いはだ」
「それだけに長く激しいものになる」
「そういうことか」
「戦いははじまったばかりだな」
「響鬼は少し気さくな感じで話した。」
「じゃあ。気長にいくか」
「何か余裕だな」
「あれこれ深刻に考えても仕方ないさ」
「その気さくな笑みでだ。響鬼は乾にも返した。」
「戦うことは変わらないんだからな」
「それはその通りだな」
「だからな。油断は禁物だが気楽にいこう」
「また言う響鬼だった。」
「鍛えていってな」
「何か違うね」
「キユウベえは響鬼の言葉を聞いてだ。」
「右の後ろ足で頭の後ろをかきながら言った。」
「魔法少女達と」
「何が違うんだ？」
「今問い返したのは小野寺ユウスケだった。」
「俺達とその魔法少女の何処が」
「強いつていうかね。割り切ってるよね」
「そこが違うというのだ。」
「魔法少女達は諦めつて言うかね。そういうのがあるんだけれどね」
「魔法少女がどういった存在かはまだよく知らない」

門矢はまずはこう言った。

「しかしだ。俺達はだ」

「仮面ライダーは？」

「ライダーになった理由は様々だ」

それこそ人それぞれだ。血の問題だったり運命的なものだったり自分で選んだりだ。だが共通しているものはあるのだった。

それは何か。門矢は話すのだった。

「だがライダーは何があるうと。例え死のうと」

「ああ、それは聞いてるよ」

キュウベえは門矢の今の言葉にすぐに言葉を入れた。

「君達は例え死んでも何度でも蘇るんだったね」

「そしてスサノオと戦う」

「それが君達の運命だったよね」

「俺達はその運命を受け入れている」

そうだとこのうた。

「人間としてスサノオと戦う運命をだ」

「人間としてなんだね」

「そして人間だからだ」

「人間だから？」

「だからこそ仮面ライダーだ」

そうした意味もあるというのうた。

「だからだ。どの世界でも俺達はライダーとして人間としてだ」

「戦うんだね」

「そうさせてもらう」

こうした話をしてだ。彼等はだ。

戦いに向かうことをだ。キュウベえに告げたのだった。

仮面ライダー達の戦いがまたはじまった。それは彼等にとってこれまで長い戦いに匹敵する激しい戦いになる。彼等もこのことを予感していた。

第一話

完

2
0
1
1
・
8
・
1
3

第二話 じゃんぱいあその一

第二話 じゃんぱいあ

ライダー達はあらゆる世界に赴きスサノオと戦う決意を固めた。
しかしだ。

そのそれぞれの世界への門はまだ開かれていなかった。そしてだ。
あの女も魔獣達も出て来なかった。この事態には。
彼等はだ。少し拍子抜けしたものを感じていた。

それは五代雄介も同じでだ。パートナーであり親友でもある一条
薫にだ。こんなことを話していた。

「今のところは何よりですね」

「その魔獣達が出て来なくてか」

「ええ。平和が一番ですから」

屈託のない顔でだ。一条に話すのだった。

「何よりですよ」

「しかしだ」

それでもだとだ。一条はその屈託のない笑顔の五代に話す。

「安心はしてられない」

「はい、スサノオは絶対に仕掛けて来るからですね」

「話は聞いた」

その五代からだ。キュウベエの話を聞いたというのだ。

「そのキュウベエだな」

「本当の名前はインキュベイダーというらしいですね」

「仮面ライダーのいない世界でもスサノオは仕掛けてきている」

「そうです。人間に戦いを挑んでいるんです」

「あいつが他の世界にも仕掛けていることは知っていた」

「ディケイドの頃にだ。それは判明していた。」

しかしだ。この現実についてだ。一条は話すのだった。

「だが。仮面ライダーのいない世界にもか」

「スサノオは介入してきていたんですね」

「そうしていたとはな」

一条が言うのはこのことだった。真剣な面持ちで話す。

「それは考えていなかったな」

「そうですね。仮面ライダー以外にもですか」

「人間ならばか」

一条はここでこう言った。

「仮面ライダーでなくとも挑んでいるのか」

「若しかしてスサノオは」

五代は笑顔から考える顔になってだ。一条にこう述べた。

「あれですかね」

「いえ、門矢君が人間ならって言うてまして」

そこからだ。考えての言葉だった。

「そこから思っただんですけれど」

「どうだというのだ？」

「人間であれば仕掛けてくるんじゃないでしょうか」

そうしているのではないかとだ。五代は言うのだった。

「それでなんじゃ」

「人間だからか」

「はい。仮面ライダーは人間ですよ」

「そうだ。人間だ」

このことはだ。一条も五代と長い間共に戦い生きてきて五代という人間を見てきてだ。このことがよくわかっていた。

「御前は姿が変わるがそれでも人間だ」

「そうですね。ですから」

「仮面ライダーは人間だ」

このことはだ。一条は断言した。

「紛れもなく人間だ」

「その人間ならどんな戦士も仕掛けてくるんじゃないでしょうか」

「退屈を紛らわせる為」

これが大きかった。スサノオにとっては。
「そして人間という存在を見る為にだな」
「だから仕掛けているんじゃないでしょうか」
「そうだろうな」
五代の言葉にだ。一条も頷いた。
「言われてみればだ」
「そういう考えるのが妥当ですよね」
「スサノオはそうした存在だ」
一条もだ。スサノオについては熟知していた。長い戦いの中で。
「人を見たいのだ」
「あえて仕掛けてですか」
「最初は違っていたのだろう」
「そしてこうも言うのだった。」
「まだ。シヨツカーの初期はな」
「あの頃はですか」
「おそらく真剣に世界征服を考えていた」
「その頃はですね」
「そうだ。しかしだ」
「それがどうして変わったんでしょうか」
「仮面ライダーと戦い」
そのシヨツカーはだ。ライダーと戦い続けていた。

第二話 にゃんぱいあその二

「そしてだ。そこでだった。」

「おそらく。時期的には仮面ライダー二号が出て来てから」

「確かかなり最初ですよね」

「そうだったな。仮面ライダー一号が欧州に経ち」

「ショツカーとの激戦の中で、である。」

「仮面ライダー二号が日本に残ってから」

「あの頃にですか」

「スサノオの考えが変わった様だ」

「その辺りからだというのだ。」

「二人の仮面ライダーと戦い」

「そうして」

「仮面ライダー、ひいては人間を見ていた」

「世界征服の考えを変えたんですか」

「表向きは違っていた」

「ショツカー、ひいてはバダンまでだ。その考えは同じだった。」

「世界征服のままだった」

「けれどそれは」

「あくまで表向きだ」

「それだけのことだったというのだ。」

「それだけだった」

「では実は」

「仮面ライダーとの戦いを楽しむようになっていた」

「そうなっていたとうのだ。スサノオは。」

「その証拠に作戦もだ」

「戦いのそれがですか」

「世界征服の為の作戦ではなくなってきた」

「ですね。言われてみれば」

五代もだ。一条のその話を聞いてだ。
考える顔になりだ。こう述べた。

「最初は世界征服の作戦ばかり立てていたのに」
「変わってきたな」

「ライダー打倒の。つまりは」

ライダー打倒は題目に過ぎない。では真の目的は。

「ライダーに罾や強敵をぶつけてですね」

「それをライダーがどう潜り抜けるか」

「それを見て楽しむ様になっていったんですね」

「それは御前もわかるな」

「はい」

一条の今の問いにだ。五代はそのライダーとしてだ。こくりと答えた。

そすいてだ。こつも言ったのだった。

「俺も。もうすぐで究極の闇になりましたし」

「一歩間違えればな」

「グロンギ達との戦い自体が罾でしたから」

既にだ。五代も一条もこのことを把握していた。

それでだ。五代も今言うのである。

「クウガとして彼等と戦い」

「人間として戦い」

一条はクウガ、ひいては仮面ライダーを定義付けて話す。

「そしてだ」

「その戦いの中でグロンギになるのか」

「人間であり続けるのか」

「それを見ていたんですね」

「ン、ダグバ、ゼバはスサノオの分身の一つだった」

一条はまた指摘した。

「そのこともだ」

「はい、アークオルフェノクやワイルドジョーカー、キュリオスや

カイも」

彼等は全てだ。スサノオの分身だというのだ。

「全てスサノオだからだ」

「あいつはその都度俺達に仕掛けていたんですね」

「人間が自分の仕掛けた罠にどうするのか」

一条はまた話す。

「どう切り抜けるのかをだ」

「見る為に」

「仕掛けてきている」

「そしてそれは仮面ライダーに対してだけじゃなかったんですね」

「他の世界の戦士達」

まだ姿も名前も知らない。彼等もまた。

「彼等に対してもだ」

「あのキュウベエの話だと」

五代はここでキュウベエの話を思い出してだ。一条に話した。

第二話 にゃんぱいあその三

「あれですよ。魔法少女達が戦っているって」

「女の子もその対象の様だな」

「確かに女の子も戦いますけれど」

「女の仮面ライダーもいる。ならば否定できないことだった。

「それでなんですね」

「そうだな。スサノオにとって性別は意味のないものか」

「彼はあくまで人間を見ている。だからだというのだ。」

「結局は」

「あくまで人間を見てですか」

「仕掛けてきているのだ」

「それで他の世界にも」

「仕掛け。そして見ている」

「一条の言葉はシビアなものになってきていた。」

「俺達をだ」

「人間そのものを」

「世界征服もおそらくは退屈を紛らわせる為だった」

「あの牢獄に囚われたままだから」

「あの牢獄はだ」

「一条はスサノオが囚われている牢獄の話もした。」

「そう出られるものではない」

「ツキヨミがその全てを賭けて築いたあれは」

「そうだ。出られはしない」

「神であるスサノオを以てしても。それは非常に困難であるのだ。」

「だからこそ今あの場所にいる」

「その中で何もすることができなくて」

「ああして仕掛けているのだ」

「人間に対して。そうしているというのだ。」

「それがスサノオだ。奴は飽きるまでそうするだろう」

「厄介な話ですね」

「厄介だ。だが」

「だが？」

「人間自体がそうなのだろう」

一条はさらに考える顔になり右手に手を当ててた。

そうしてだ。こう五代に話したのだった。

「人間は常に試練が前にありだ」

「それを乗り越えるものなんですね」

「そうだ」

まさにだ。その通りだというのだ。

「だからだ。我々はだ」

「スサノオを憎んだら目が曇りますよね」

「スサノオの出して来る罫を乗り越えていく」

そうするというのだ。憎しみを抱かずだ。

「永遠にだ」

「仮面ライダーは死ぬことができませんし」

もっと具体的に言えば死のうが何度でも蘇る。黒衣の青年なりスマートレディがそうするのだ。そしてスサノオもライダー達が永遠に死ぬことは望んでいないのだ。

それがわかっていているからだ。五代もだった。

前を向いてだ。一条に話した。

「俺、戦うことは嫌いです」

「それでもだな」

「はい、罫には打ち勝ちます」

そうするというのである。

「絶対に」

「そうだな。それではな」

「一条さんもですね」

「そうする」

これが一条の言葉だった。

「あの時と同じ様にな」

「すみません」

「何、いい」

戦うことはだ。いいと答える一条だった。

「あの時に全ては決まっていたからな」

「グロンギとの戦いの時にですか」

「そうだ。決まっていた」

彼にしてもだ。そうだというのだ。

「共に戦うのはな」

「けれど一条さんは」

「俺は人間だ」

仮面ライダーでなくともだ。それだというのだ。

「俺は人間だからな」

「それで、ですね」

「そうだ。戦う」

また答える一条だった。

第二話 にゃんぱいあその四

「仮面ライダーと共にな」

「そうしてくれるんですか」

「死ぬな」

今度はこう五代に告げた。

「いいな。絶対にな」

「わかってます。例え何度も生き返らなければならぬにしても」

「死ぬな。俺も死なない」

「はい、俺は死にません」

「そうしてこの戦いも最後まで生きよう」

「そうしましょう」

こう二人で話してだ。戦いのことを誓い合うのだった。その二人のところにだ。

二本足で歩く黒猫が来た。それだけでも異様だが。

背中には蝙蝠の翼がある。その猫を見てだ。

五代がだ。最初にこう言った。

「ファンガイアですかね」

「そうかもな。若しくはあの一族か」

「そうした感じですよね」

最初彼等はこう考えたのだった。

「彼等との戦いは終わりましたけれど」

「では安心していいか」

「ですよ。特にね」

「警戒する必要はないか」

こう考えたのだった。しかしだ。

ここでだ。その一風変わった猫は。

五代の足下に来てだ。こう言ってきたのだ。

「血イくれにゃ」

「血!？」

「そうだにや。血イくれにや」

「こう五代に言うのである。」

「喉が渴いたにや。血が欲しいにや」

「血が欲しいってまさか」

「この猫は」

猫の言葉にだ。五代だけでなく一条もだ。

目を瞠ってだ。そして言うのだった。

「吸血鬼!？」

「バンパイアの猫か!？」

「んっ? 僕を知ってるのかにや?」

その猫も猫でだ。こう彼等に返す。

そしてだ。こう名乗るのだった。

「僕はにやんぱいあにや」

「にやんぱいあ」

「それが君の名前か」

「そうだにや。とにかくにや」

「ここでだ。その猫にやんぱいあはさらに言うのだった。」

「早く血を寄越すにや」

「血を」

「それを」

「どうします、それで」

「そうだな。血と言われても」

二人も咄嗟にはどうしていいかわからない。しかしかった。

たまたまだ。二人の目の前にだ。

漢方薬の店があった。その店を見てだ。

「一条がだ。五代に対して言った。」

「あの店がいい」

「あの店に入ってますね」

「血を貰おう」

店でだ。買うというのだ。

「漢方薬なら血もある筈だからな」

「それでなんですかね」

「そうだ。血は」

「血なら何でもいいにや」

にゃんぱいあがまた五代の足下から言う。

「とりあえず喉が渴いたから欲しいんだにや」

「そうか、わかった」

一条もだ。にゃんぱいあの言葉を聞いてだ。

そのうえでだ。店に入りだ。

そうしてすつぽんの、ドリンク扱いになっている生き血を買って

にゃんぱいあに渡す。それを飲んでだ。

にゃんぱいあは満足した顔でだ。二人に言った。

「有り難うだにや。お陰で落ち着いたにや」

「それはよかったね」

「そうだな」

二人もまずそれはよしとした。

第二話 じゃんぱいあその五

「ただだ。ここぞだ。」

二人はあらためてだ。じゃんぱいあに尋ねたのだった。

「君は一体何なのかな」

「何故猫なのに吸血鬼なのだ？」

「それで飼い主は」

「そうした人はいるのか」

「飼い主はいるにゃ」

それはいるとだ。じゃんぱいあは素直に答える。

「とても可愛い女の子にゃ。そこに弟と一緒にいるにゃ」

「成程。飼い猫か」

「それは間違いないか」

「あと血が好きなのは」

それはどうしてかとだ。じゃんぱいあはさらに話す。

「僕は最初普通の猫だったにゃ」

「普通のか」

「猫だったのか」

「子猫の頃は捨て猫で」

このことから話すのだった。

「それで死にそうな時に親切な人に助けてもらったにゃ」

「まさかその親切な人が」

「まさか」

「血を飲ませて助けてくれたにゃ」

話を聞くうちにいぶかしむ顔になる二人にだった。

「じゃんぱいあはだ。さらに話してきた。」

「それで今の僕がいるにゃ」

「吸血鬼の血を飲めば吸血鬼になる」

「それは猫もだったのか」

「とりあえず僕はそれで助かったにや
にゃんぱいあはにこりと笑って話す。」

「あの親切な人のお陰だにや」

「その吸血鬼が誰かはわからないけれど」

「それは」

「んっ、何かあるにや？」

「あるよ」

「おそらくはだが」

一条と五代はすぐににゃんぱいあに話した。そうしてだ。

二人は顔を見合わせだ。こっ話し合うのだった。

「それじゃあまずは」

「皆に話を聞いてもらうか」

「はい、そうしてですね」

「このことについての話を聞こう」

こっしてなのだった。彼等は。

すぐに連絡がつく仲間達に連絡を取ってだ。集ってもらった。そ

の場所は。

城南大学だった。その研究室にだ。

皆が集ってだ。そうしてだった。

「この猫が？」

「吸血鬼ですか」

「まさかと思えますけれど」

「確かに翼もありますし」

「普通の猫じゃないのは」

「すぐにわかりますね」

こっ話していくのだった。そうしてだ。

椿秀一がだ。こんなことを一条に話した。

「この猫はな」

「何かわかったか？」

「確かに吸血鬼だ」

こつ話すのである。

「それは間違いない」

「それはわかったのか」

「ただし生物学的にはだ」

その観点からはどうかというのだ。

「翼がある以外は他の猫と変わりが無い」

「それは同じか」

「ああ、同じだ」

そうだというのだ。

「何処もおかしなところはない」

「じゃあ食べものは」

「何でも食べるにゃ」

机の上に二本足で立つにゃんぱいあが自ら言う。

「特に苺とか赤いものが大好きだにゃ」

「苺!？」

その言葉に目を顰めさせたのは沢渡桜子だった。

第二話 じゃんぱいあその六

それでだ。こうじゃんぱいあに尋ねたのだった。

「苺が好きなの」

「あとトマトも好きじゃ」

「じゃんぱいあは実に楽しそうに桜子に話す。

「トマトをたつぷりと使ったナポリタンなんか最高だじゃ」

「ナポリタンって」

榎田ひかりもこれにはだった。

いぶかしむ顔になりだ。こんなことを言った。

「猫が食べるものかしら」

「そこがかなり変わっていますよね」

「本当に猫なのかどうか」

椿はこのことを指摘した。しかしだった。

それでもだ。こう言ったのだった。

「しかし調べた結果は」

「生物学的にはですか」

「そうだ。猫だ」

そうだとだ。彼は五代にも話した。

「間違いなく猫だ」

「血を吸わなくても生きていくことはできるじゃ」

「またじゃんぱいあが自分のことを説明する。」

「ただ。血を吸うと喉が渴かなくなるじゃ」

「お水は飲むの」

「勿論飲むじゃ」

またひかりの言葉にそうだと話す。

「けれど血は好きじゃ。身体が自然と求めるじゃ」

「この辺りは確かに吸血鬼ですね」

「そうよね」

桜子とひかりもこのことは間違いないと言う。しかしだった。それでもだ。彼女達から見てもなのだ。

「それでも生物学的には」

「猫だから」

「それなら猫だな」

一条はここでは生物学的な見解から判断して述べた。

「間違いないな」

「そうですね。確かに食べものの好みは独特ですけど」

五代もこのことには引つ掛かるものがあつた。しかしだった。

それでもだ。生物学的にはだと聞いてだった。彼もこう判断するのだった。

「猫ですね」

「そうだな。猫だな」

「翼はありますけれど」

「しかし。この翼を使って」

一条は今度はにゃんぱいあの翼を見た。黒い蝙蝠の翼をだ。

その大きさを見てだ。彼は言うのだった。

「あまり飛ぶことはできそうにもないが」

「飛ぶことは好きでないにゃ」

にゃんぱいあ自身もそうだという。

「歩く方が好きだにゃ」

「やっぱり猫だな」

「確かにそうですね」

椿と五代がそんなにゃんぱいあの話を聞いてこのことを再確認した。

「間違いないな」

「よく見たら仕草や行動も猫そのものですし」

「だとすると問題は」

「この子を吸血鬼にしたその吸血鬼が何者か」

「それが問題だな」

「そうなりますね」

こう話してだ。話の重点が移っていった。

そのだ。彼に血を与えた吸血鬼が誰か。五代が彼に尋ねた。

「あの、ちよつと教えてもらえるかな」

「何だにや？」

「君を吸血鬼にしたのは誰かな」

「あの時僕を助けてくれた人にや？」

「そう。それは誰かな」

「通りすがりの人だったにや」

これだけを聞くと門矢の様だ。しかしだった。

第二話 じゃんぱいあその七

そこからさらにだ。五代はじゃんぱいあに尋ねたのだった。

「外見は？」

「黒いタキシードにマントだったにゃ」

「それだけを聞くと」

「そうですね」

「標準的な吸血鬼に聞こえるわね」

椿に桜子、ひかりはだ。こう思った。

そしてだ。じゃんぱいあはさらに話すのだった。

「金髪に青白い肌に赤い目だったにゃ」

「完璧だな」

「ドラキユラ伯爵そのままですし」

「それならよね」

三人はここで確信したにゃんぱいあに血を与えたのは間違いなく吸血鬼だとだ。わかつてはいたがこのことを再認識したのである。

しかしだ。それ以上にだった。彼等はだ。

その外見を全て聞いてだ。こつも話した。

「だが。そうした外見の吸血鬼は」

「そうですね。この世界には今はもつ」

「いないか。休息に入っているか」

ファンガイアはいるがだ。そうした吸血鬼はというのだ。

いない。それならばだった。

「では別の世界の住人か」

「この子も含めて」

「あの謎の女や魔獣達と同じ様に」

それではないかというのだ。そう話してだった。

あらためてだ。彼等は。一つの結論を出したのだった。

「間違いなくだな」

「はい、この子もまたです」

「別の世界から来たわね」

「そうだな」

一条もだ。三人のその言葉に頷いた。

そのうえでだ。あらためてだった。彼は五代に話した。

「おそろく。このにゃんぱいあもだ」

「門を潜り抜けてこちらの世界に来ていて」

「あちらの世界にもスサノオがいる」

二つの事実がだ。確信されたのだ。

「間違いなくだ」

「そうなっていますね」

「ではだ」

「はい」

二人は頷き合い。そうしてだった。

そのうえでだ。あらためてにゃんぱいあに話した。

「一つ聞きたいのだが」

「ここにはどうして来たのかな」

「穴を通って来たにゃ」

そうしてこの世界に来たとだ。にゃんぱいあは二人の問いにこう

答えた。

「そうしてここに来たにゃ」

「そうか。やはりな」

「そういうことでしたね」

「何か光っている不思議な穴だったにゃ」

「にゃんぱいあはその穴についても話す。」

「そこを通ったら何かここにいたにゃ」

「では間違いなくですね」

「そうだな」

また五代と一条が話す。

「にゃんぱいあも」

「スサノオが関係している」

「スサノオって何だにゃ」

だがにゃんぱいあはスサノオのことは知らないようだった。それが言葉に出ている。

「僕が知っているのは吸血鬼のお兄さんだけにゃ」

「ねえ、よかつたら」

「君が通ってきたその光る穴に案内してくれるか」

五代と一条はにゃんぱいあに同時に頼み込んだ。

「そうしてくれるかな」

「よければ」

「わかつたにゃ」

にゃんぱいあは快く笑って快諾した。

「じゃあ案内するにゃ」

「わかつたよ。それじゃあ」

「同行させてもらおう」

こうしてだった。二人がだ。にゃんぱいあに同行してだ。

彼の後についていく。そうして来た場所は。

第二話 じゃんぱいあその八

ごく普通の公園だった。そこに来てだ。

一条が公園の中を見回しながら言う。

「ここは」

「普通の公園ですよね」

「そうだな。どう見てもな」

こう五代にも返す。ジャングルジムにすべり台にブランコがある子供用の公園だ。本当に何のおかしなところもない普通の公園だ。

その公園の中を見回してだ。一条は言うのだった。

「ここに何かあるとは」

「思えませんね」

「グリードが出るなら不思議ではないが」

「そんな気配はないですし」

「グリード？何だにやそれは」

じゃんぱいあは二人の前にいる。その彼がだ。

二人の方を振り向いてだ。こう尋ねてきた。

「お菓子だにや？それなら母があると最高だにや」

「まあお菓子じゃないから」

「そういうものではない」

「じゃあどうでもいいにや」

お菓子でなければだ。どうでもいいと言ってだ。

じゃんぱいあは土管を寝かせて土を持ったそこに向かう。それを見ただ。

一条がだ。また五代に話した。

「あそこだな」

「あそこに入ってますね」

「彼等の世界に入るか」

「そこに」

「では行こう」

一条は決意と共に言った。

「そしてあちらの世界でもだ」

「スサノオと」

「ついて来るにや」

土管の入り口でだ。にゃんぱいあは二人にまた声をかけた。

「あの穴を潜ったら僕の世界だにや」

「うん、じゃあ」

「行くか」

こうしてだった。二人は身体を屈め膝を折ってだ。

そのうえで土管の中に入る。すると光に包まれ。

土管を潜り終わると。そこは。

何もおかしなところのない世界だった。ただ出て来たのは川辺だ。

川辺に転がっている土管を潜り抜けてだ。出て来たのである。

右手に青い静かな川が。左手には緑の土手がある。草の中に赤や

白の小さな花が見える。

「さあ、ここにや」

「ここか」

「そうだにや。ここにだにや」

にゃんぱいあの言葉に応えてからだ。一条はその周りの川や土手を見回したのだった。無論ささやかに咲いている花達もである。

そうしたものを見てだ。一条がまず言った。

「何の代わりもないな」

「ですよね。平和そうです」

「んっ？ここは平和だにや」

また二人に顔を向けて話すにゃんぱいあだった。

「そっちでは違うにや？」

「そうだね。色々といえるからね」

「御世辞にも平和とは言い難いな」

仮面ライダー、その協力者としてだ。二人は答えた。

「さつき言った様なグリードもいるし」
「騒がしい世界だ」
「とりあえず平和ではないんだにゃ」
二人の話を聞いてだ。にゃんぱいあは。
困った顔になってだ。それで言うのだった。
「そうした世界には困ったものだにゃ」
「つまりこの世界は平和で」
「グリードやそうした存在はいないか」
「だからグリードはお菓子でないなら何にゃ？」
「にゃんぱいあの関心はそちらにあった。」
「よくわからないが美味しそうだな名前だにゃ」
「ううん、美味しそうかな」
「特にそうは思わないが」
「とにかくだにゃ。僕は今から家に帰るにゃ」
「そうするとうのだ。」
「一緒に来るにゃ？」
「どうする？」
「にゃんぱいあの言葉を受けてだ。一条は。
五代に顔を向けて。それで尋ねたのだった。
「行ってみるか」
「ええと。猫の家ですよね」
「飼い主がいるらしい」
「一条はこう考えて話す。」

第二話 にゃんぱいあその九

「どうやらな」

「飼い主がいるんですか」

「そんな感じがする」

これは一条の勘から言うことだ。彼の戦いで培い、そして刑事という職業、その二つから身に着けた勘からの言葉である。それを言っただ。彼はあらためて五代に話した。

「だからだ。言ってみよう」

「その飼い主の人から手掛かりをですね」

「この世界の手掛かりも手に入るだろう」

「ですね。それじゃあ」

「まずは言ってみることだ」

「わかりました」

五代も一条の言葉に頷き。そうしてだった。

二人でにゃんぱいあに案内され彼の家に向かった。そこは。

白い家だった。人間のごく有り触れた家だ。その家の前に来てだ。今度は五代がだ。一条に問い返した。

「あの、何ていいいますか」

「同じだな」

「ですよ。この家は」

「普通の家だ」

一条もだ。その家を見ながら言う。

「どう見てもな」

「けれどまさか」

「中は違うか」

「その可能性もやはり」

あるのではと。五代は本来は一条が言うことを話した。

「あるのでは」

「では気をつけてか」

「行きましよう」

「帰ったにや」

にゃんぱいあは家の玄関の前でにこりと笑って言った。

「誰かいるにや？いたら出て欲しいにや」

「あつ、にゃんぱいあ？」

その言葉に応えてだった。家の扉が開いてだ。

そこからごく普通の女の子が出て来た。そうしてだ。

そのうえでだ。にゃんぱいあと五代達を見て言うのだった。

「お客さんなの？」

「そうだにや。僕の友達にや」

何時の間にかそうなっていた。

「だからお家の中に一緒にに入れて欲しいにや」

「大人のよね」

「仕事は刑事だ」

まずは一条がだ。警察手帳を出して話した。

「これでわかってくれたか」

「刑事さんがですか」

「僕の友達だにや」

にゃんぱいあがまた言うのだった。女の子は。

首を捻ってだ。にゃんぱいあに問い返した。

「何か悪いことしたの？」

「えっ、何でそう言うにや！？」

「だって。刑事さんよ」

女の子はこのことを根拠にして言うのだった。

「悪いことしないとお家に来ないじゃない」

「僕何もしてないにや」

「けれど実際に来てるし」

「だからしてないにや」

「そうなの？」

「大体猫が人間のお巡さんに捕まる筈がないにや」

にゃんぱいあはここで根本的な真理を言ってみせた。

「僕は猫にや」

「そういえばそうね」

女の子もだ。ここでようやくだった。

にゃんぱいあの言葉に納得してだ。それからだ。

五代と一条にだ。こう尋ねるのだった。

「じゃあにゃんぱいあのお友達なんですかね」

「はい、そうです」

「確かに刑事だが事件に来た訳ではない」

一条はその事情を説明した。

第二話 にゃんぱいあその十

「それは保障する」

「そうですね。ではどうぞ」

あらためてだ。二人に家に入るように話したのだった。

そしてだ。そのうえでだった。二人に自分の名を名乗った。

「美咲です」

「美咲ちゃんですか」

「それが君の名前か」

「はい。宜しく御願います」

「僕の飼い主だにゃ」

にゃんぱいあはここでこのことも二人にまた話した。

「とても綺麗な娘だにゃ」

「綺麗なはいいけれど」

それでもだ。美咲はにゃんぱいあを抱き抱えてから。

そのうえでだ。二人を家の中に案内したのだった。

二人は家の応接間に案内された。そうしてだ。

「はい、どうぞ」

「あつ、どうも」

「済まない」

二人にだ。母が出される。にゃんぱいあにもだ。

その母をだ。出した後でだ。美咲はにゃんぱいあに話した。

「じゃあ後はどうするの？」

「僕がお話するにゃ」

「にゃんぱいあが？」

「そうだにゃ。だからもう美咲ちゃんはゆっくりとしていいにゃ」

「わかったわ。それじゃあね」

美咲はにゃんぱいあの言葉に頷いてだ。そのうえでだ。

二人とにゃんぱいあを残して部屋を出た。こうしてだ。

二人はにゃんぱいあと対した。まずはだ。

五代がだ。苺を食べながら自分の向かいの席で自分と同じく苺にかぶりつき幸せな顔をしているにゃんぱいあに尋ねたのだった。

「いいかな」

「何だにゃ？」

「その吸血鬼の居場所はわかるかな」

尋ねたのはこのことだった。

「それはどうかな」

「ううん、実はにゃ」

「実は？」

「どう何処に行ったのか」

困った顔になって前足を組んで。にゃんぱいあは五代の今の問いに答えた。

「僕も知らないにゃ」

「えっ、知らないの」

「そうなのか」

「神出鬼没の人だにゃ」

だからだというのだ。

「そう簡単に見つかりはしないにゃ」

「ではだ」

にゃんぱいあが吸血鬼の居場所を知らないと言われてだ。今度は。一条が出て来てだ。そうして彼に尋ねたのだった。

「手懸かりだが」

「手懸かり？」

「それはあるだろうか。または証拠は」

「そう言われてもにゃ」

にゃんぱいあは困った顔になり一条の言葉に応える。

「思い出せないにゃ」

「そうなのか」

「悪いけれどそうだにゃ」

こう二人に話すのである。

「さっき言った通りにや」

「手懸かりもなしか」

一条は腕を組みだ。困惑した顔を見せた。

そしてだ。五代にこう言うのだった。

「こうなれだ」

「俺達だけで、ですね」

「そうだ。手懸かりを探そう」

「そうしましょう」

こうした話をしてだった。二人は。

この世界の町を見回り手懸かりを探そうと決意した。その二人に
だ。

第二話 にゃんぱいあその十一

にゃんぱいあがだ。こう言ってきたのだった。

「それならにゃ」

「君も？」

「ついて来てくれるのか」

「この町のことはよく知ってるにゃ」
「だからだというのだ。」

「それでにゃ。ついて来るにゃ」

「うん、それじゃあ」

「共に行こう」

こうしてだ。二人はにゃんぱいあも連れてだった。

そのうえで家を出てだ。それからだった。

町に出て手懸かりを探しはじめた。その彼等の前にだ。

頭に茶色い部分のない、頭が真っ白のシヤム猫の子猫が来た。背中にはリボンがある。

その子猫がだ。にゃんぱいあを見てだ。自分の方から声をかけてきた。

「あつ、兄上」

「んっ、茶々丸だにゃ」

「何処に行かれるのですか？」

「ここにゃんぱいあに対して尋ねてきた。」

「今から一体」

「少しだにゃ」

「少しですか」

「スサノオという奴、もしくは吸血鬼の手懸かりを探すにゃ」

「スサノオはわからないですが」

茶々丸と呼ばれたにゃんぱいあを兄と呼ぶ猫はここで言うのだった。

「吸血鬼さんですね」

「そうだにや。あの人だにや」

「兄上から外見は前に御聞きしていますが」

「こつ前置きしれから話す茶々丸だった。」

「何日か前に見ましたが」

「えっ、見たつて」

「その吸血鬼をか」

「はい」

その通りだとだ。茶々丸は二人に返した。

「何か猫を一杯連れていましたよ」

「その人だにや」

ここでまた言うにゃんぱいあだった。

「その人が吸血鬼だにや」

「猫を一杯連れている」

「わかりやすいな」

五代と一条も言う。

「それなら今から」

「探すか」

「そうしましょう」

こつした話をしてだった。二人はにゃんぱいあと茶々丸の協力を得てだ。

この世界を調べて回ることにした。しかしだ。

ふとだ。一条がにゃんぱいあと茶々丸に尋ねたのだった。

「今思つたのだが」

「何にや？」

「どうかしたのですか？」

「あの娘だが」

こつだ。美咲のことに言及したのである。

「君達、特ににゃんぱいあのことだが」

「僕がどうかしたかにや」

「君を見ても何とも思っていないかったか」

「このことにだ。今気付いたのである。」

「吸血鬼である君を見てもだ」

「それがどうかしたにゃ？」

「だからだ。吸血鬼というものはだ」

「彼が話すのはこのことだった。」

「そう簡単に受け入れられる存在ではないのだ」

「そうなのにな？」

「血を吸うのだぞ」

「一条が話すのは吸血鬼のその性質のことだ。」

「それでどうして簡単に受け入れられるのだ」

「僕そんなにまずかにゃ？」

「僕にもわからないです」

茶々丸は首を捻るにゃんぱいあにこう返した。

「けれどそうみたいです」

「どういうことかわからないにゃ」

「若しかしてあの美咲という娘は」

「かなりの娘かも知れませんか」

五代もだ。腕を組んで言った。

「この子を普通に受け入れているんですから」

「例え吸血鬼であってもその本質を見る」

「そうした娘かも知れませんか」

「だとすれば」

「どうなのかとだ。一条はさらに言った。」

「この世界にはあの娘以外にもこの子達を受け入れている人間がいるのか」

「問題はそこにあるかも知れませんか」

「何となくだ。二人もこのことがわかってきたのだった。そうして
だった。」

彼等はあらためてこの世界を回りだ。手懸りを探していくのだっ

た。

第二話

完

2
0
1
1
・
8
・
2
0

第三話 受け入れる器その一

第三話 受け入れる器

五代と一条はにゃんぱいあ、茶々丸の案内を受けてだ。彼等の世界を回った。そうしてだ。

まただ。変わった猫に会ったのだった。

右目に眼帯をし三日月の兜を被った白猫に会ったのだ。その猫を見てだ。

五代と一条はだ。それぞれ言うのだった。

「まさかこれは」

「そうだな。どう見てもな」

「戦国大名のあの」

「伊達政宗か」

「んっ、俺のことを知ってるのか？」

実際にだ。この猫、この猫もまた二本足で立っている。この猫が二人を見上げてだ。自分からこんなことを彼等に対して言うて来たのだった。

「俺は独眼竜まさむにゃだ」

「やっぱりそうか」

「あの大名にちなんでいるのか」

「あの人は人間だが尊敬しているぜ」

「自分でこう言うまさむにゃだった。

「凄い人だったよな」

「うん、確かに」

「そして君はか」

「あの人にちなんでこの格好をしているんだよ」

「まさむにゃはいい奴にゃ」

にゃんぱいあがにこりと笑って二人に話してきた。

「僕の友達にゃ」

「あ、ああ」

にゃんぱいあにそう言われてだ。まさむにゃは。

何処か恥ずかしそうな顔になってだ。こつ言うのだった。

「そうだな。俺達は友達だにゃ」

「そうだにゃ。いつも仲良しだにゃ」

「成程。君達は友達なんだ」

「ではこの猫も」

「ああ、俺は吸血鬼じゃないからな」

二人が何を言うのか察してだ。まさむにゃから言ってきた。

「普通の猫だぜ」

「うっん、あまりそうは見えないけれど」

「そうなのか」

「そうだよ。何処がおかしいんだよ」

自分では自覚がないといった口調である。

「俺は別に血を吸わないしちゃんと飼い主もいるしな」

「君もそこはにゃんぱいあと同じなんだね」

「飼い猫だったのか」

「そうだよ」

こつ答えるまさむにゃだった。

「立派な飼い主だぜ」

「そうですね。あの子もいい子ですね」

茶々丸もここで言う。

「僕達の飼い主の美咲ちゃんと同じで」

「美咲ちゃんは時々血を吸わせてくれるにゃ」

「にゃんぱいあはここでもにこにことして話す。

「とても優しくいい御主人様だにゃ」

「やっぱりあの娘は」

「かなりの娘だな」

五代と一条は今の話からもだ。美咲の器をあらためて認識した。

そのうえでだ。彼等は。

まさむにゃにだ。さらに尋ねるのだった。

「君の他にもそうした猫はいるのかな」

「この辺りにいるか」

「いるっていつたらいるな」

まさむにゃは急にだ。顔を曇らせてだ。

そのうえでだ。二人にこう話したのだった。

「けれど俺は好きにはなれないな」

「好きになれない」

「どういった猫なのだ」

「性格がな。悪いんだよ」

それでだ。好きになれないとだ。まさむにゃは二人にまた話した。

「だからな。ちよつとな」

「そうなんだ。だからなんだ」

「その猫には会いたくないか」

「けれどまあいいぜ」

まさむにゃは二人にだ。今度はこう告げた。

「案内してやるよ、そいつの場所に」

「うん、御願いするにゃ」

にゃんぱいあがまたまさむにゃに話す。

第三話 受け入れる器その二

「にやてんしのところに行くにや」

「さて、あの人は何をしているのでしょうか」

茶々丸もここで言う。

「また悪戯をしているのでしょうか」

「だよな。この前なんてな」

「そうそう、毛虫をです」

茶々丸はまさむにやと話をしていく。

「女の子に見せて怖がるのを見て喜んでましたから」

「性格悪いよな」

「はつきり言って悪いですね」

茶々丸の言葉には何の容赦も見られない。

「意地悪です」

「だから好きになれないんだよ」

「何か今度の猫は」

「悪戯者か」

一条と五代も彼等の話からこう考えた。

「だとすると少し」

「厄介なことになるか」

だが、だ。それでもだった。五代はこの心配はしていなかった。

「しかしそれでもですね」

「そうだな。クウガに変身する必要はなさそうだな」

その懸念はなかった。この世界は平和な中にあるからだ。

それでだ。今はだった。

「このまま戦いとは別の」

「調査が続くな」

「そうですね。それにしても」

五代はだ。ここであった。

まさむにやをあらためて見てだ。こんなことを言った。

「それにしても君は」

「何だ？まだ何かあるのか？」

「甲冑というか鎧まで着てるんだね」

五代が今言うのはこのことだった。

「また本格的だね」

「ああ、鎧か」

「兜だけでも凄いのに」

「俺は徹底的に凝る主義なんだよ」

それでだ。この格好だというまさむにやだった。

彼は胸を張ってだ。五代にさらに話す。

「だから鎧だつてな」

「そういうことだな」

「格好いいだろ」

「確かに。けれど猫がここまで人間的な世界なんて」

「あるとは思わなかったな」

「そしてそのことをこの世界の人は受け入れて」

そのことにだ。五代だけでなく一条もだ。

考えるものがあるだ。実際に言葉に出していくのだ。

「彼等と共存しているんですね」

「スサノオはこの世界で何を仕掛けている？」

「一条はこのことについても考えを及ばせた。」

「一体だ」

「スサノオはいつも人間を見えていますけれど」

「この世界では何を見ている？」

「そこに何かがありますね」

「間違いなくな」

そうした話をしていった。彼等は。

にゃんぱいあだけでなくまさむにや、そして茶々丸も加えてだ。

そのうえでだ。

そのにやてんしのところに来た。見れば。

黒い翼、鳥のそれを背中に生やしている白猫がいた。その猫がだ。耳が灰色の白猫にだ。棒に糸で括っている毛虫を見せてだ。

そうしてだ。こんなことを言っていた。

「どうですか？」

「ちよ、ちよっと」

「毛虫は嫌いですか？」

「僕そういう虫は苦手なんだよ」

その白猫は泣きそうな顔になり彼に言う。

「だから近寄らせないでよ」

「駄目ですよ。こんなものを怖がってではですね」

「けれどどうしても」

「ほらほら、怖がらない怖がらない」

こうしてだ。意地悪をしていた。その黒い翼の白猫をだ。

第三話 受け入れる器その三

まさむにゃがだ。右の前足で指し示しながら五代と一条に話した。

「そのにゃてんし?」

「あの黒い翼の猫がか」

「そうだよ。やっぱり悪いことしてるな」

「ううん、何か意地悪をしているな」

「その様だな」

このことは二人もすぐにわかった。そうしてだ。

あらためてだ。まさむにゃに尋ねるのだった。

「見れば頭に天使の輪があるね」

「黄金に輝いているが」

「あれかよ」

「あれを見る限りあの猫は天使かな」

「だが翼が黒いな」

二人はこのことにもすぐに気付いてだ。まさむにゃに話す。

「墮天使なのかな」

「本来の天使なら翼が白い筈だな」

「そういえばそんなことを言っていたにゃ」

ここでにゃんぱいあが二人に話した。

「にゃてんしは悪いことをし過ぎて天界を追い出されたにゃ」

「それで天界に何かしようと思んでいるらしいな」

まさむにゃも言う。

「だからあいつはなあ」

「困った方ですね」

茶々丸もここで言う。

「ああしてすぐに悪戯をされますし」

「嘘も吐くしな」

まさむにゃは顔をやや顰めさせて話す。

「だから俺はあいつは好きになれないんだよ」

「そうかにゃ。そこまで徹底的に悪くはないにゃ」

「そうか？結構意地悪いぜ」

「うっん、あの猫は」

五代は彼等の話を聞きながらこう述べた。

「確かに性格はよくないね」

「そうだな。しかし根は極端に悪くはないようだ」

一条はこのことも見抜いた。五代もそうであるが。

「少なくとも人や猫を徹底的に害したり殺したりはしないな」

「そういうことは絶対にしませんね」

「少しあの猫ともな」

「話しますか」

二人が言っているのだ。そこにだ。

そのにゃてんしがひよっこりと来てだ。こんなことを言ってきたのだった。

「僕に何か御用ですか？」

「あつ、今声をかけようと思っていたけれど」

「気付いたのか」

「はい」

その通りだとだ。にゃてんしも答える。

そしてだ。二人を見てだ。こんなことを言った。

「この町の方ではないですね」

「そうだにゃ。この人達はにゃ」

二人に代わってにゃんぱいあがにゃてんしに説明する。

「僕が遊びに行った世界にいる人達だにゃ」

「ほう、別の世界から来られた方々ですか」

「そうだにゃ」

こうにゃてんしに説明するのである。

「とてもいい人達にだ」

「そうですね。ただ」

「ただ。何にや？」

「どうも僕の遊びには乗ってくれそうもないですね」とりわけ一条を見てだ。にやてんしはすぐにこのことを見抜いたのだ。

「残念ですが」

「少なくともだ」

一条が真面目な顔でそのにやてんしに答える。

「我々は君の悪戯にどうこうされることはない」

「そういうことは子供の頃にやったりやられたりだからね」

五代もその人生経験から話す。

「だからそういうことにはね」

「どうこうされることはない」

「それは残念です」

こづは言つがだった。にやてんしは。

第三話 受け入れる器その四

特に表情に出すこともなくだ。こう言ったただけだった。

「では貴方達には何もしません」

「しても何もないから」

「それでなのか」

「その通りです。それではですが」

「それでは？」

「我々への質問だな」

「そうです。見たところ貴方は」

にやてんしはここで五代をまじまじと見た。それからだ。

こうだ。彼に尋ねたのだった。

「只の人ではありませんね」

「それはわかるんだね」

「はい。伊達に天使だった訳ではないですから」

その力からだ。五代のことがわかるというのだ。

「一体どういう方なのでしょうか」

「仮面ライダーと言おうか」

五代は真面目な顔になってだ。にやてんしに答えた。

「このことはにやんぱいあ君は知っていると思うけれど」

「そういえば聞いたにや」

あちらの世界に来た時のことを思い出してだ。にやんぱいあも応える。

「何か色々な連中と戦っている人達らしいにや」

「そうなるね」

五代もそのことを認めた。

それでだ。彼等にこう話したのだった。

「俺達は」

「俺は変身はしないが」

「一条も言つ。それでも同じだというのだ。」
「それでもだ」
「色々な奴等と戦つてきているんだ」
「だがそれでもだ」
「戦つている相手は同じだよ」
「こつも言つたのだった。」
「それはね」
「あれ？何かおかしいにや」
「にゃんぱいあもその言葉に対して言つ。」
「色々な奴と戦つていると言つたにや」
「そうですね。それで同じというのは」
「茶々丸もこのことを指摘する。」
「妙な感じがしますけれど」
「そのことだが」
「一条が彼等のその疑問に答える。」
「つまりだ。色々な敵を出している黒幕がいる」
「ああ、そういうことですか」
「その話を聞いて最初に理解したのはにやてんしだった。それでだ。一条に対してこつ尋ねた。」
「犬やら猫の後ろに人間がいたりするというのがと同じですね」
「そうだな。簡単に言えばそうなる」
「一条もにやてんしのその話で大体いいとした。」
「そしてその黒幕だが」
「何ていうんだよ」
「スサノオという」
「一条は今度はまさむにやに話した。」
「神と言えば聞こえがいいがかなり癖の悪い神だ」
「神は大体そついうものですよ」
「にやてんしは一条の今の言葉にすぐこつ言ってきた。」
「傲慢で身勝手なものです」

「そうかも知れない。しかしだ」

一条はにやてんしの言葉に頷きながらさらに話す。

「スサノオは少し違っている」

「俺達と戦い。畏を仕掛けて」

五代がだ。仮面ライダークウガである彼が詳しく説明する。

第三話 受け入れる器その五

「そうしたこと人間を試して見ているんだ」

「どうしてそんなことをするにや？」

「退屈を紛らわさせる為だね」

「それでそこまで回りくどいことをするにや」

「そうなんだ。どうやらこの世界にも」

一条はここでだ。遂にだった。

スサノオの存在をだ。彼等に話すのだった。

「スサノオは関わっているから」

「我々はそのスサノオを探しているのだ」

一条もそうだというのだ。

「何処にいるのかをだ」

「何処かっかっていてもな」

「そのスサノオがどういう姿をしているのか」

「それもわからないのですけれど」

まさむにやに茶々丸、にやてんしがそれぞれそのスサノオについ

てだ。五代と一条に対して突っ込みを入れた。そうしてきたのだ。

それに対してだ。二人はこう話した。

「姿は色々あるんだ」

「その都度変えてくる」

つまりだ。姿ははつきりしないというのだ。

「俺達の前に現われる度に姿を変えているから」

「それははつきりと言えない」

「それじゃ絶対にはわからないにや」

にやんぱいあは二人の話を聞くとだ。

すぐに困った顔になって返した。

「姿がわからないのなら」

「はい、お話になりません」

茶々丸は兄よりも手厳しかった、可愛い顔をしてぴしゃりと返す。

「それでどう調べるといいうのでしょうか」

「手懸りはあるよ」

「すぐにだ。五代がこう告げる。」

「それが吸血鬼なんだよ」

「僕を助けてくれたあの人にや」

「その人が何処にいるのか知りたいんだ」

「そこにあるとだ。五代は話す。」

「教えてくれたら有り難いけれど」

「知っているのなら」

「ああ、それでしたら」

「すぐにだ。にやてんしが答えてきた。」

「面白い方々がおられますよ」

「吸血鬼の行方を知っている？」

「そうした相手なのか」

「はい、おそらくは」

「にやてんしは二人に話していく。」

「ですから。その方々に御会いしてはどうでしょうか」

「それ本当か？」

まさむにやは幾分疑う顔でにやてんしに対して問い返した。

「本当に知ってるんだな」

「本当ですよ。この人達には見破られますから」

見破られるとわかってだ。にやてんしも何かをすることはしない

というのだ。

「それでだ。二人には嘘を吐かないというのだ。」

「ですから本当ですから」

「それじゃあ一体」

「どどういう相手なのだ？」

「やっぱり猫ですかね」

「そっだろっな」

五代と一条は最初はこう考えた。しかしだ。

「ここだ。にやてんしは二人に言ったのだった。」

「いえ、蝙蝠ですよ」

「蝙蝠!？」

「今度は蝙蝠なのか」

「はい、蝙蝠です」

「そのだ。蝙蝠だというのだ。」

「蝙蝠の方々です」

「蝙蝠、吸血鬼には相応しいですね」

「まさに象徴だな」

五代と一条はにやてんしからの話を聞いて話し合う。

「じゃあその蝙蝠達なら」

「吸血鬼の行方を知っているな」

「ならすぐにですね」

「その蝙蝠達の行方を探そう」

「こう言うただった。すぐにだった。」

二匹の蝙蝠達が来た。どちらも頭と翼だけの姿だ。一匹の耳と足がピンク色でもう一匹のそれは黄色だ。その蝙蝠達が来てだ。

第三話 受け入れる器その六

五代の両肩にそれぞれ止まりだ。服の上から吸いはじめた。そしてだ。こう言うのだった。

「何か違うね」

「そうだね」

「普通の人間の血じゃないような」

「ちよつと味が違うね」

「しかもこの人あまり痛がらないし」

「おかしいね」

その彼等を見てだ。すぐにだ。

五代は血を吸われたままだ。にゃんぱいあに尋ねた。

「若しかしてこの蝙蝠達が？」

「はい、そうです」

まさにそうだとだ。にゃてんしも答える。

「その方々です」

「そうか、やっぱりね」

「あの、痛くないんですか？」

カツオを少しオドオドとした感じで五代に尋ねる。

「血を吸われて」

「まあこれ位だとね」

何でもないのだ。五代は返す。

「俺は別に何ともないから」

「そうなんですか」

「これまでの戦いで何度も死に掛けているしね」

「それと比べればですか」

「そう。何ともないよ」

こうカツオに答える五代だった。

「特にね。けれどだよ」

「けれど？」

「この蝙蝠達は知ってるんだよね」

まだ自分の血を吸っている蝙蝠達を横目で見ながらだ。五代は力ツオに尋ねた。

「吸血鬼の居場所よ」

「そうみたいですわね」

「なら話は早いよ」

それならというのだ。

「彼等に聞くから」

「ちよつと待つてね」

「吸い終わってからね」

蝙蝠達も応えてきた。

「お話していいかな」

「吸血鬼さんのことは」

「うん、いいよ」

五代もだ。気軽に返す。

「それじゃあそういうことでね」

「何かこうして気軽に血を吸わせてくれるし」

「お兄さんいい人だから気に入ったよ」

こうしただ。のどかな会話をしつつだ。蝙蝠達は五代の血を楽しんだ。にゃんぱいあも彼の足にかぶりついてだ。血を吸った。

それからだ。血を満腹になるまで吸った蝙蝠達はだ。五代と一条に言ってきた。

宙をばたばたと舞いながらだ。そのうえで話すのだった。

「まずは僕達の名前ね」

「それ言うね」

「そうだね。まずはお互いに名乗って」

「それからだな」

こう言葉を交えさせてだった。それぞれだった。

まずはピンクの蝙蝠と五代が名乗った。

「毛利っていうんだ」

「五代祐介。宜しくね」

続いてだ。黄色の蝙蝠と一条だった。

「小森だよ」

「一条薫。覚えていてもらおう」

「二人共別の世界から来た人じゃ」

にゃんぱいあは蝙蝠達にこのことを付け足した。

「宜しくじゃ」

「へえ、他の世界からなんだ」

「こつちの世界に来たんだ」

「うん、そうなんだ」

「縁があつて行き来することになる」

二人は二匹の蝙蝠達にも自分達のことを話した。

「もつと言えば俺はさ」

「五代さんだったっけ」

「何なの？」

「仮面ライダーなんだ」

このこともだ。五代は話した。

第三話 受け入れる器その七

「バイクに乗って戦う仮面の戦士なんだ」

「そうにや。何かとても強いらしいにや」

「またにやんぱいあが蝙蝠達に話す。」

「そうでなくても五代さんは凄くいい人だにや」

「うん、それはわかるよ」

「よくね」

蝙蝠達もだ。そのことはわかるというのだ。

「僕達にたつぷりと御馳走してくれまし」

「こうしてお話していてもわかるしね」

「それにしても仮面ライダーなんだ」

「話は聞いてるよ」

「えっ!？」

毛利君と小森君の今の言葉にだ。五代は思わず問い返した。

「君達仮面ライダーのことを知ってるんだ」

「うん、吸血鬼さんから聞いてるから」

「バンパイアさんからね」

「何か。向こうもですね」

「知っているのだな」

五代と一条はここでもだった。顔を見合わせてだ。

そのうえでだ。話をするのだった。

「まさかとは思いましたけれど」

「最初から知っているのか」

「これはまさか」

「覚悟しておくか」

こちらを既に知っている、そのことから吸血鬼はスサノオの分身かその統率下にあり仮面ライダーと敵対しているのではないか、こう考えてだ。

そうしてだ。彼等はだった。

「若しそうなっても」

「勝たなくてはな」

「そうですね。絶対にですね」

「勝とう」

「それでどうしたの？」

「何かあったの？」

「まただ。毛利君と小森君が二人に尋ねてきた。

「何か吸血鬼さんに用があるの？」

「それで僕達に用があるみたいだけれど」

「うん、そうだよ」

「それはその通りだ」

「こうだ。二人も二匹にはつきりと答える。

「それでだけれどいいかな」

「吸血鬼は今何処にいる？」

「まさかと思うけれどまた向こうから出て来るとか」

「そういうのはないな」

「今お城にいるよ」

「吸血鬼さんのお家にね」

「流石に今回はそれはなかった。そしてだ。

「二匹の話によるとだ。吸血鬼は。

「城を持っていてそうしてそこに住んでいるというのだ。それでだ。

「彼等は今度だ。こう言うのだった。

「じゃあ今から？」

「その吸血鬼の城に行くか」

「そして万が一の時は」

「腹を括るか」

「こうしてだ。覚悟も決めてだ。あらためてだ。

「毛利君と小森君にだ。頼みをした。

「それならその吸血鬼さんのお城に今から」

「案内してくれるだろうか」

「うん、いいよ」

「それじゃあね」

彼等も応えてだ。そうしてだった。

吸血鬼への城に案内するのだった。その二人にだ。

にゃんぱいあ達もだ。こう言ってきた。

「じゃあ僕達もにゃ」

「ああ、行くか」

「そうですね。面白そうですし」

「行きましょう」

あっさりとついでに行くことにした。とりわけ。

にゃんぱいあはだ。とても楽しそうにだ。こう言っのだった。

「命の恩人に会えるなんて楽しみだな」

「そういえば兄上はずっと」

「そうだにゃ。会いたいと思っていたにゃ」

こうだ。満面の笑顔で茶々丸に言っのである。

「だから凄く楽しみだにゃ」

「それなら余計にですね」

「行きたいにゃ」

こうした話をしてだ。にゃんぱいあはとりわけ楽しそうに吸血鬼の城に向かうのだった。

第三話 受け入れる器その八

だが、だ。ふとだ。五代がそのにゃんぱいあ達に尋ねた。

「長い旅になるかも知れないからね」

「何だにゃ？」

「どうしたんだ？」

にゃんぱいあとまさむにゃが彼の言葉に応える。

「何かあるのかにゃ」

「別に何でもないだろ」

「君達の御主人達に連絡しておかなくていいのかな」

彼が言うのはこのことだった。

「それはどうなの？」

「ああ、その心配はないよ」

「すぐそこだから」

また毛利君と小森君が話してきた。二匹は五代の頭の上を飛んでいる。

「もうすぐ見えてくるから」

「安心していいよ」

「あれっ、近いんだ」

「それはまたな」

二人はそう言われてだった。

いささか拍子抜けした。そしてそれは。

にゃんぱいあも同じでだ。こうまさむにゃに言うのだった。

「あれっ、こんな近くにいたのにゃ？」

「歩いていける距離だよな」

「そうだにゃ。それだけの距離だにゃ」

実際にそうだとだ。まさむにゃに話すのである。

「本当に意外だにゃ」

「身近な人だったんだな」

「これならもつとお家の外をしつかり散歩しておくんだつたにゃ」
「まあそれは仕方ないぜ」

まさむにゃは前足を組みとことこと歩きつつ述べた。

「俺達の移動範囲って限られてるからな」

「縄張りの中でしか動けない筈だな」

一条は猫の習性から話す。

「もつとも猫の縄張りは広い場合もあるが」

「この辺りは一応縄張りにゃ」

「俺もだ」

「僕もです」

にゃんぱいあだけでなくまさむにゃと茶々丸も答えてきた。

「これでも結構広いんだぜ」

「他の方と重なってる場所もありますが」

「僕も一応」

カツオもおどおどしながらだが話す。

「この辺りは」

「僕に縄張りは関係ありません」

にゃてんしはそうだというのだ。

「何しろ元天使ですからね」

「それでこの辺りに気付かなかったのはどうしてかな」

「縄張りでもあまり行かない場所もあるにゃ」

だからだとだ。にゃんぱいあは二人に話した。

「それでにゃ」

「成程、そういうことなんだ」

「だから誰もその城には気付かなかったのか」

五代も一条もこのことがわかった。

「猫といつても色々あるんだね」

「はじめて知った」

二人もだ。知らないことは多い。所詮人間の知っていることなぞまさに大海の中一杯のスプーン程度のものしかないのである。

そのことをだ。二人は今再認識したのだ。
そうした話をしながらだった。彼等はその城の前に来たのだ。その城は。

如何にもだった。実に不気味な城だった。

西洋風であり石造りだ。苔や蔦が壁を飾りやたらと古い。

塔もあり窓はやけに頑丈そうだ。そしてやけに細く曲がった木々に囲まれている。何かの動物の咆哮まで聞こえてきそうだ。

その城の門のところに来てだ。二人は話した。

「ここはまさに」

「吸血鬼がいる場所だな」

「この如何にもって場所に吸血鬼がいる」

「俺達の手懸りになる」

こう話してだ。そのうえでだ。

彼等は門からどうして城の中に入ろうと考えはじめた。その中でだ。

ふとだ。カツオが二人に言ってきた。

「あの」

「うん、この城に入るには」

「どうすればいいかだが」

「チャームがありますけれど」

カツオはいつもの少しおどおどとした調子で二人に話してくる。
見ればだ。

第三話 受け入れる器その九

門の左の柱、ダークグレーの石の柱にだ。チャイムがあった。音符のマークまでついている。それを見てだった。

二人はだ。やや拍子抜けしてだ。顔を見合わせてからだ。

そうしてからだ。こう話すのだった。

「何か。今度も」

「拍子抜けするものがあるな」

「そうですね。吸血鬼っていうからさぞかし危険な相手かっと思いましたが」

「これでは一般市民と変わらないな」

「じゃあチャイムを押しますか？」

五代が提案した。

「そうしますか」

「そうだな。とりあえずはな」

一条も五代のその提案に頷く。そしてだった。

五代がそのチャイムのボタンを押した。するとだ。

暫くしてだ。チャイムの向こうからこう返事が返って来た。

「はい、どちら様でしょうか」

「普通の声ですね」

「そうだな」

「新聞なら間に合ってますよ」

まずは新聞のことから話してきた。

「東スポ取ってますから」

「あれっ、朝日じゃないんですね」

「読んでもないな」

「とりあえず新聞はいいですから」

「まただ。返事が返って来た。」

「それなら帰って下さいね」

「新聞屋さんじゃないにゃ」

にゃんぱいあが下からその声に言った。

「僕達は吸血鬼さんに会う為に来たにゃ」

「僕に？」

吸血鬼と言われるとだ。すぐにだった。

声はだ。今度はこう返してきた。

「僕に何か用かな」

「はい、実はですね」

「貴方に会いたくて来た」

「セールスマンもお断りですよ」

今度はこう言ってきたのだった。

「それなら別に」

「だからそういうのじゃないです」

「猫について聞きたい」

五代と一条は今度はこう声の主、吸血鬼と思われる彼に述べた。

「貴方が助けた猫と一緒にいるんです」

「それで聞きたいことがあるのだ」

「ああ、そのころですか」

吸血鬼の声は実に素っ気無いものになった。

その素っ気無い声でだ。彼はまた言ってきた。

「ならいいですよ。お城の中に入って来て下さい」

「いいんですね、そうして」

「今から」

「はい、どうぞ」

ここでも素っ気無くだ。彼は言ってきたのだった。

「御待ちしています」

「よし、それじゃあ」

「今からな」

二人は話があまりにも簡単についていることに首を捻りながらもだ。それでもだ。

にゃんぱいあ達を連れてだ。そのうえでだ。
門を開け城に向かう。城の左右の木々は今にも動かんばかりの姿
だった。

第三話 完

2011・8・24

第四話 吸血鬼の話その一

第四話 吸血鬼の話

五代と一条はにゃんぱいあ達と共に門を潜り城に向かう。その途中の道は。

左右に木々が生い茂りその中から何かが出そうな気配がある。その気配についてだ。

五代はだ。こう言ったのだった。

「猫に蝙蝠かな」

「そうだな。そうした気配だな」

「特に危険な動物の気配はしませんね」

「吸血鬼の使い魔達か」

「はい、そうですよ」

「ここには僕達のお友達が一杯いるんです」

毛利君と小森君がそうだとだ。二人に話してきた。相変わらず二人の上をばたばたと羽ばたいている。そうして話してきているのだ。

「血を少し貰う以外は全然危なくないですよ」

「皆大人しくていい子ばかりですから」

「吸血鬼といつても人に危害を及ぼす奴だけじゃない」

「そういうことか」

二人はまたこのことを確認させられた。

「俺達も吸血鬼に対する偏見があつたみたいですね」

「吸血鬼も人の心があれば」

どうなるのか。一条は自然にこのことについても話した。

「人間なのだからな」

「ですね。姿形がどうであれ」

「心がそれならば」

「その人は人間ですね」

「仮面ライダーと同じく」

だからこそだ。わかるというのだ。

そのことを話してだった。彼等は。

その古い城の前に来た。その入り口は。

今にも朽ち落ちてしまいそうだ。その入り口を開いた。すると。

鈍い、きしむ音がした。木の扉が開き。そしてその中は。

暗い。そこからは何も見えなかった。

「まるで洞窟だ」

「ですね」

五代は一条のその言葉に頷いた。

「そしてこの奥に」

「吸血鬼がいるのか」

「いえ、もう来られてますよ」

「あちらから」

しかしだった。またしても毛利君と小森君がだ。二人に言ってきた。

するとだ。その暗闇の中からだ。

黒いマントにタキシードを着てだ。金髪を後ろに撫でつけた男が

出て来た。

肌は青白く顔は幾分やつれた感じだが整っている。目は紅い。その彼が出て来てだ。五代と一条に舞踏会式の挨拶をしてきた。

それからだ。彼はこう二人に言ってきた。

「はじめまして、吸血鬼です」

「五代祐介です」

「一条薫だ」

「猫のことですね」

吸血鬼は頭を上げて二人にまた言ってきた。

「そのことですね」

「はい、宜しければ」

「そのことについて話してもらえるだろうか」

「わかりました」

にこやかに笑ってだ。吸血鬼も応えてきた。

そのうえでだ。二人とにゃんぱいあ達に述べてきた。

「いいでしょうか」

「はい、それでは」

「何処に」

「城の応接間に来て下さい」

それでだ。話をしたいというのだ。

「飲み物も用意していますので」

「血かによ」

「いえ、コーヒーです」

吸血鬼はにゃんぱいあにはこう返した。

「人間の方々には。僕はトマトジュースです」

「じゃあ僕達は何によ？」

「君はトマトジュースですね」

吸血鬼はにゃんぱいあを見てにこりと笑ってだ。こう述べたのだ
つた。

「若しくは莓ジュースでしょうか」

「どっちも大好きによ」

「では僕と同じトマトジュースで」

同じものをだというのだ。

「それを用意しましょう」

「有り難うによ。流石は僕の命の恩人によ」

「毛利君と小森君もそれで」

彼等にもトマトジュースを分けるといふのだ。

「そうしましょう」

「はい、有り難うございます」

「ではお言葉に甘えまして」

「二匹も応える。かくしてだった。」

第四話 吸血鬼の話その二

二匹の飲み物も決まった。まさむにゃ達にはミルクを用意するのだ。吸血鬼も話した。

全て決めてからだ。一行はあらためて城の中に入った。城の廊下は暗い一歩先すらわからない様な状況だ。しかしかった。

吸血鬼はその暗闇の中を何でもないといいた風に進んでいく。その彼の動きを見てだ。五代と一条は彼の背を見ながら話をした。

「流石ですね」

「闇夜には何もなにか」

「ですね、見えてるんですね」

「そうだな」

二人でだ。言うのだった。

「ちゃんと」

「道が」

「はい、見えています」

実際にそうだとだ。吸血鬼も答える。前を向いて進みながら。

「私の目はそういう目ですから」

「吸血鬼は夜でも見える」

「だからか」

「そうです。私は吸血鬼です」

そのことを話し。さらにだった。

「仕事は手品師です」

「手品師!?!」

「仕事もあるのか」

「人の世で生きるのなら」

それならばだとだ。吸血鬼も話してくる。

「仕事は必要ですから」

「だからですか」

「仕事も持っているのか」

「はい、猫達の餌代もそれで得ています」

そのだ。仕事からだというのだ。

「そうしています」

「成程、つまり貴方は」

「自分を人間だと考えているのか」

「はい、そうです」

まさにそうだとだ。二人に答える吸血鬼だった。

そうした話をしながらだ。彼等は応接間に着いた。そこはごく有り触れた品のいい部屋だった。二人はそのソファアに座った。

向かい側のソファアには吸血鬼が座る。にゃんぱいあ達はソファアの周りにそれぞれたむろしてだ。話し合いがはじまるのだった。

二人にコーヒーを出しトマトジュースを飲みながらだ。吸血鬼が話す。

「それで御二人は」

「はい、別の世界から来ました」

「そこで戦っている」

「ああ。じゃあ噂は本当だったんですね」

ふとだ。こんなことを言う吸血鬼だった。

「それぞれの世界が入り組んでいるんですね」

「えっ、まさか」

「知っていたのか」

「はい、聞いています」

そうだとだ。吸血鬼は少し驚く二人に話す。

トマトジュースを飲みながらだ。述べていくのだった。

「吸血鬼の集まりの中で」

「その中で聞いたのですか」

「我々のことを」

「仮面ライダーですね」

吸血鬼の言葉だった。

「貴方達は」

「ええ、俺がです」

五代がだ。内心驚きながらも吸血鬼の問いに答えた。

「仮面ライダー、仮面ライダークウガです」

「やっぱり仮面ライダーの方でしたか」

「それでこちらにお邪魔したのは」

「何故僕が困っている猫達を助けるかですね」

「吸血鬼としてにしても」

「好きだからですよ」

吸血鬼はあっさりとした笑みでだ。それが為だと答えた。

第四話 吸血鬼の話その三

そのうえでだ。こつも話したのだった。

「昔から動物は好きなんですよ」

「何かそれは」

「人間の会話ですよね」

「はい、そう聞こえます」

「僕は元々人間です」

今度は屈託のない笑み、気品のある顔にそれを浮かべてだ。そうしてだ。さらに話すのだった。

「死んで。何かの力で吸血鬼になったのです」

「あれっ、僕と同じだよ」

ここまで聞いてだ。にゃんぱいあが述べた。

「僕は吸血鬼さんにそうしてもらったけれど」

「そうそう、実は同じなんだよ」

吸血鬼は今度はにゃんぱいあに顔を向けて話す。

「僕の場合は死んでからだけれどね」

「そうだよ。同じだよ」

「ということはまさか」

「貴方を吸血鬼にしたのは」

五代も一条もだ。そこまで聞いてだ。

「スサノオでしょうか」

「スサノオ？」

「あっ、この世界では名前も姿も変えているかも知れません」

「つまりだ。神だ」

一条はスサノオをこつ表現して吸血鬼に話した、

「人を見て楽しむ神だ」

「人をつていうと」

「君は死んだと今言っ たな」

「若くして。病気で」

そう言ったとだ。吸血鬼自身が話す。

「けれど。そこを助けてもらって」

「その君を助けた者がだ」

「そのスサノオですか」

「僕達吸血鬼を生み出したんですか」

「そう考えていいだろう」

一条は真剣な面持ちでその吸血鬼に話していく。

「実際にこれまで多くの種族をそうして生み出してきた」

「種族つていいいますと」

「つまりです」

ここでだ。さらにだった。五代がだ。吸血鬼に話してきた。

「俺達の世界ではそうして多くの勢力を生み出してきました」

「我々はその様々な種族と戦ってきた」

一条もこのことについて話す。

「そうしてきた」

「そうだったんですか」

「俺が戦った最初の種族はグロンギでした？」

「グロンギといますと」

「戦うこと、いや人間をすることを文化とする種族で」

忘れられなかった。五代にとってグロンギとの戦いはまさに運命

だったからこそ。

だからこそ忘れられずにだ。彼は今そのグロンギのことを話すの

だった。

「そうして最後に生き残った者が彼等の主と戦う文化だったんです」

「またそれは変わった文化ですね」

「それがグロンギという種族でした」

そうだったとだ。一条は話す。

「そしてその主が」

「そのスサノオですか」

「はい、そうです」

まさにそうだというのだ。

「その時はン㉿ダグバ㉿ゼバでした」

「それで五代さんはそのン㉿ダグバ㉿ゼバと」

「闘いました」

究極の戦士になって闘った。このこともまた五代にとっては忘れられないことだった。

「そうして戦いを終わらせました」

「そのスサノオがですか」

「貴方を吸血鬼にしたのです」

「いや、僕も含めて」

吸血鬼はそのグロンギの話を聞いてだった。そのうえでだ。戸惑う顔になりこう話した。

第四話 吸血鬼の話その四

「吸血鬼は人を特に襲ったりしませんよ」

「血を吸うだけですよね」

「なかつたら苺やトマトとかで充分ですし」

「この辺りはやんぱいあと同じだった。」

「ですから人に対して危害を加える様なことは」

「スサノオは人間と戦っているだけではないのだ」

「ああ、見ているんですけどっけ」

「そうだ、見ているのだ」

「一条が吸血鬼に今度話したのはこのことだった。」

「その様々な種族との戦いを見てだ」

「それで？」

「人間を見て、そしてその退屈を紛らわせているのだ」

「じゃあ僕達吸血鬼も」

「にやんぱいあも含めてだ」

「一条は彼も含めてきた。」

「君達は見られているのだ」

「人間としてですか」

「スサノオはいつも見ているんですよ」

「一条と交代する形でまた五代が話す。」

「人間が。姿形を変えられてです」

「僕みたいに」

「果たしてその種族のものとされている性格になるか」

「それと共にだった。」

「変わらない姿の人間が彼等とどうしていくのか」

「そうしたことを見ているんですね」

「そうです。ですから」

「君達は」

こちらの世界の吸血鬼達のことだ、今一条が言ったのは。

「人間としてこの世界に生きているな」

「ええ、楽しく」

「そして猫達を助けているな」

「困っている動物を助けることは当然ですから」

「それだ。君達は全て見られていたのだ」

一条は真剣な面持ち指摘していく。

「何もかもだ」

「そうだったんですか。それで」

「それでだな」

「僕達は合格したんでしょうか」

今度は吸血鬼が尋ねた。五代と一条に。

「その人間に」

「はい、スサノオから見ればですけど」

「合格しているだろう」

二人も吸血鬼にこう答えた。

「この世界の人間も含めて」

「そうになっていると思う」

「そうですね。じゃあ僕達は人間なんですね」

「はい、紛れもなく」

「その心が人間だからだ」

それも心優しい。それが吸血鬼の心だった。

「ですから合格したと思います」

「あくまでスサノオから見ればだが」

「そうですね。じゃあ僕としてはですね」

二人に言われてだ。吸血鬼は安堵した顔になった。

そしてそのうえでだ。こうも言ったのだった。

「このまま人間として生きさせてもらいます」

「はい、そうされて下さい」

「是非な」

「わかりました」

吸血鬼は満足した面持ちで頷いた。そしてだ。その彼にだ。五代と一条は。あらためてだ。彼に対してだ。こう尋ねたのだった。

「それで、なんですかけれどスサノオの」

「君を吸血鬼にした彼のことだが」

「はい、あの人のことですね」

「一体どちらにいますか？」

「この世界の何処に」

「月に一回吸血鬼同士で集っているんです」

吸血鬼は二人にこのことを話した。

「そこにマスター。僕達を吸血鬼にしてくれた」

「スサノオも来る」

「そうなのか」

「そうです」

まさにだ。その通りだというのだ。

第四話 吸血鬼の話その五

「ではその会合に」

「御願います」

「連れて行ってくれ」

「わかりました」

吸血鬼の返答もすぐだった。

「それなら。早速今夜ありますので」

「よし、それじゃあ」

「その会合に行こう」

「そうしてスサノオと会って」

「その目的を問い詰めるでしょう」

「ここでも。スサノオと戦うつもりだった。

そうしてだ。早速その夜だった。

今度はだ。吸血鬼が彼等を案内した。

その道中でだ。五代と一条はだ。

先に進む吸血鬼にだ。こう尋ねたのだった。

「それでなのですが」

「君達のマスターはどういった姿をしているのか」

「それです。一体」

「どういった格好なのか」

「それですね」

吸血鬼もだ。彼等のその言葉にだ。

すぐにだ。こう答えたのだった。

「服装は僕と同じです」

「タキシードにマント」

「それが」

「はい、これは吸血鬼の正装です」

そうだというのだ。彼が今実際にしている格好はだ。

「二十世紀初頭から決まっているんです」
「あれっ、昔は違ったの」
カツオは吸血鬼その話を聞いて述べた。
「そうだったの」
「そうだよ。昔は正装も違ったんだよ」
「というところんな服を着てらしたんですか？」
「昔の貴族の礼装だったんだ」
かつて着ていたのはそれだというのだ。
「僕達は闇の貴族とも言われているからね」
「だから貴族の礼装なんですか」
「その時代ごとのね」
「それでタキシードなんですか」
「マントは翼みたいなものだよ」
マントについても語られた。
「これはね」
「マントはそれなんですか」
「そう、僕達は空も飛ぶから」
ただしこの姿で飛びはしない。宙に浮かぶことはあってもだ。
それでも吸血鬼本来の姿で飛ばない。それならばだった。
「蝙蝠に姿を変えてね」
「ああ、だから僕の背中に蝙蝠の翼があるにや」
「にゃんぱいあはここで自分のその背中のことがわかった。」
「それでだったにや」
「そうだよ。吸血鬼は蝙蝠にもなれば」
それに加えてだった。
「狼にもなれるし霧にもなれるし」
「何だ？結構変わるだな」
「吸血鬼の能力は多彩なんだ」
まさむにゃにもこう話す。
「だから蝙蝠にもなれて」

「それでマントもあってか」

「そういうことだよ。ついでに言えば」

今度は吸血鬼の方から話した。

「僕達はこうして日の下にいても大丈夫だよ」

「そうそう。それ位では何でもないんですね」

にやてんしはだ。どうやらそのことを知っていたらしい。

それで実際にだ。こんなことも言った。

「カーミラさんや伯爵さん普通にいましたからね」

「あの人は吸血鬼の中でも名士だよ」

この吸血鬼も彼等のことを知っていた。しかも名士だというのが。

「素晴らしい人達だよ」

「そうですね。あと大蒜も」

「あれが通じるのはスラブの吸血鬼だから」

吸血鬼のルーツの一つはそこにある。東欧にだ。

第四話 吸血鬼の話その六

「僕は大蒜とトマトを使ったパスタも好きだから」

「そうそう、トマトに大蒜を入れると余計に美味しいんだにゃ」

またにゃんぱいあがこのうえない笑顔で話す。

「僕も大好きだにゃ」

「そう、パスタもいいね」

吸血鬼はさらに上機嫌で話す。

「イタリア料理もいいよね」

「吸血鬼にイタリアというのは」

茶々丸にとつては。それは。

「あまり合わないと思います」

「あれっ、そうかな」

「ルーマニアとかならともかく」

「ルーマニアもラテン系だよ」

イタリアと同じくである。実はそうなのだ。

「だから別に構わないじゃないかな」

「では好きなものは何ですか？」

「パスタの他には赤ワインで」

吸血鬼は茶々丸のその話に応えて言う。

「あとは鮪のお刺身も」

「和食も好きにゃ？」

「だから日本にいるんだよ」

「そうだともいるのだ。」

「和食が好きだからね」

「うっん、やっぱり何ていうか」

「人間的だな」

五代も一条もだ。あらためてだ。

吸血鬼自身の話からだ。彼が人間であることを知ったのだった。

そのことを知って話をしながらだった。

一行が辿り着いた場所は。そこはというと。

「あれっ、ここって」

「そうだな。ホテルだな」

「はい、ホテルです」

豪華なホテルだった。帝国ホテルの様な。

そのホテルの前に来てだ。また話す五代と一条だった。

ホテルは白い巨大な姿を彼等の前に現わしていた。まさに聳え立っていた。そのホテルを見上げながらだ。吸血鬼が話した。

「このパーティー会場で、ですね」

「会合ですか」

「その吸血鬼の」

「はい、それが行われます」

こう話した。しかしだ。

ここでだ。黒と金色の制服を着たホテルマンが来てだ。彼等に言ってきた。

「お客様ですね」

「あっ、はい」

吸血鬼がそのホテルマンに伝える。

「今日パーティーに招待されていた」

「確か」

ホテルマンはここで日本人そのものの名前を言った。するとだ。

吸血鬼は大きく頷きだ。こう返したのだった。

「それが私です」

「わかりました。では案内させて頂きます」

「それとです」

ホテルマンは手慣れた動作でだ。今度はだ。

五代と一条に目を向けてだ。こう言うのだった。

「こちらの方々は」

「連れです」

「お連れの方々ですか」

「はい、ですから」

「わたりました」

ここでまた和風な名前を出し。そうして吸血鬼から五代と一条に顔を向けて。

そのうえでだ。こつ彼等に話した。

「ではです」

「いいんでしょうか」

「我々も参加して」

「はい、どうぞ」

すぐに応えたホテルマンだった。

そしてだ。今度はだ。

にゃんぱいあ達も見る。彼等を見てからだ。

第四話 吸血鬼の話その七

吸血鬼にだ。こんなことを話してきた。

「当ホテルはペット持ち込みも可ですが」

「それでもですか」

「はい、それでもです」

こう言っただ。そのうえでだ。

吸血鬼にだ。こつも言っただ。

「ですがサインを御願いできますか」

「持ち込み許可のですね」

「はい、ペットの」

ホテルマンは気軽に彼等に話す。

「その許可証にサインを」

「それでは」

「今から」

五代と吸血鬼が応えた。そうしてだ。

その中でだ。吸血鬼が出て来てだ。五代に話した。

「ではここは僕が」

「サインされますか」

「はい、僕が主に呼ばれますから」

言うならホストだからだ。それでだというのだ。

彼はだ。五代に自分がサインすると言っただった。

実際に彼がサインをしてだ。にゃんぱいあはよしとなった。そうしてからだ。彼等はだ。

吸血鬼に案内されてホテルの中を進む。ホテルの廊下は綺麗な赤絨毯でだ。その絨毯は隅から隅まで丁寧に掃除されている。

全体的に気品のある造りだ。そのホテルの中を進んでだ。

にゃてんしはこんなことを言っただ。

「いや、ここは中々」

「いいにゃ？」

「はい、天界もよかったですか」

彼が元いただ。そこを話に出してだ。

そのうえでだ。彼は今話すのだった。

「ここもいいですね。というよりは」

「というよりは？」

「やっぱり人間の世界の方が楽しいでしょうか」

こう話したのだった。

「とても」

「そうなのにゃ」

「天界は杓子定規な方と何から何まで善で統一されて面白くないのです」

そうだというのだ。にやてんしの言葉では。

「むしろ。多くの悪がある方が」

「おい御前」

にやてんしの顔に黒いものがさした時にだ。まさむにゃがだ。

すぐにだ。彼を右の前足で指し示し言った。

「それが天使の言葉か？」

「はい、そうですよ」

「何処がそうなんだよ」

「どうせ私は天界を追い出されましたから」

表情は変わらないが黒さは増していた。

「それでもいいではないですか」

「そんなのだから天界を追い出されたんじゃないのか？」

「何分融通の利かない世界でしたから」

「だから御前が悪かったんじゃないのか？」

「さて、どうでしょうか」

「しかしだ」

「ここだ。一条がだ。」

にやてんしのその話を聞いたうえで述べた。

「それも一理ある」
「僕の言葉にですな」
「そうだ。実際に人間というものはな」
「奇麗ごとが好きにしても」
「善ばかりではないからな」
「これまでの戦いからの言葉だった。これも。」
「悪もある。そうしたものも含めて全てが人間だ」
「全てがですか」
「人間と言っても完全に純粹でもない」
「一条はやや首を捻りながら話す。
「悪の部分もある。だがそれに絶望したり諦めることがだ」
「スサノオの思う壺なんだよ」
「五代もこのことについて話す。」
「スサノオはそうしたところも見ているからね」
「非常に複雑なのですね」
茶々丸はそうしたことを聞いて述べた。
「スサノオという人のやることや考えていることは」
「うん、何重にも罫を仕掛けているから」
「五代はにゃんぱいあ達にこうも話す。」
「それを乗り越えていくことが大事なんだ」
「では僕は乗り越えられたのでしょうか」
その五代の考えを聞きながら。吸血鬼もだ。

第四話 吸血鬼の話その八

考える顔になりだ。彼に問うた。

「スサノオのその罫を」

「それは彼に会ってからはつきりする」

一条はここでは即答しなかった。それをあえて避けたのだ。

そしてだ。そうした話をしているうちにだ。

その会場が行われている大広間の扉の前に来た。そこを開けると立食のパーティーが開かれていた。誰もがだ。

吸血鬼と同じ格好をしていた。男も女もだ。ズボンをはいていた。それを見てだ。にゃんぱいあが首を捻って言った。

「あれっ、女の人もズボンにゃ」

「吸血鬼の正装だからね」

それでだ。その吸血鬼がにゃんぱいあに答えた。誰もがテーブルを囲んでその上にある馳走や酒を飲んでいる。赤い食べものが多い。

その中でもだ。とりわけだ。

酒はだ。紅いものばかりだった。ワインが多い。

そのワインをもの欲しそうに見ながらだ。吸血鬼は五代達に話す。

「ここです」

「ここが会場ですね」

「吸血鬼達のパーティーの」

「はい、そうです」

まさにそうだとだ。吸血鬼も答える。

「ここがです」

「さて、それではですね」

「このパーティーの主賓を探すか」

二人はこう言い合ってた。そうしてだ。中を見回す。だがここだ。

その吸血鬼達だ。彼等のところに来てだ。笑顔で声をかけてきた。

「やあ、よく来たね」

「久し振りだね」

「それでそちらの人達は？」

「お客さんかな」

「ひよつとして」

「うん、そうだよ」

その同胞達にだ。吸血鬼は笑顔でこう答えた。

「僕の友達なんだ」

「ふうん、見たところ悪い人達じゃないね」

「かなり真っ直ぐだね」

「しかもかなり強い」

「そういう人だね」

「わかるんだ」

吸血鬼が彼等に応える。

「そうしたこと」

「伊達に何百年も生きているからね」

「それもわかるよ」

「一目見ただけでいい人が悪い人かはね」

「そうしたことは」

わかるのだ。彼等も言う。そしてだ。

今度はにゃんぱいあ達を見てだ。こんなことも言ったのだった。

「で、その猫ちゃん達はペット？」

「蝙蝠もいるし」

「じゃあ使い魔？」

「それかな」

「あつ、ペットでもないし使い魔でもないし」

そうしたものではないと言った。そしてだ。

そのうえでだ。吸血鬼はだ。彼等にこう話した。

「友達なんだ」

「ああ、友達か」

「そういえば君猫とか蝙蝠とか好きで」

「すぐに助けてたし」

「そういう子達なんだ」

「その通りだにゃ」

にゃんぱいあも彼等に話す。右の前足をあげて応えてだ。

「僕はこの人に助けてもらったにゃ」

「ああ、やっぱりね」

「そうだったんだね」

「彼はいつも優しいからね」

「困っている相手がいたら見捨てていられない人だから」

猫や蝙蝠だけではないというのだ。助ける相手はだ。

そしてだ。彼等は再びだ。五代達を見た。特に五代を見てだ。

第四話 吸血鬼の話その九

「こうだ。彼等に言った。」

「君達、相当色々な戦いを経てきたね」

「特にそっちの優しい感じの人」

「五代のことである。」

「貴方は特にですね」

「とても優しい人ですが多くの戦いを経てきた」

「戦いたくはなくても」

「そうしてきてですね」

「生きてきましたね、ずっと」

「その姿になれるようになって」

「はい」

その通りだとだ。五代もだ。

真剣な顔になってだ。そうしてだった。

頷いてだ。彼等に答えたのだった。

「俺は。仮面ライダーです」

「仮面ライダー？」

「それが貴方のその戦う時の姿」

「それなのですか」

「その仮面ライダーというのが」

「はい、仮面ライダークウガといいます」

それだとだ。吸血鬼達にもだ。五代は話した。

「その姿で戦ってきています」

「では今ここにきておられる理由は」

「それは何故でしょうか」

「それは」

「貴方達のマスターのことだ」

五代と共にだ。一条が話してきた。

「その彼のことだ」
「そうですね。あの方とですか」
「御会いしたいのですか」
「そう仰るのですか」
吸血鬼達はそれを聞いてだ。納得した様にそれぞれ言った。
それでだ。すぐに二人に言ってきた。
「では今は」
「マスターに会われますか」
「今ここで」
「来られてるよね」
吸血鬼が同胞達に尋ねた。
「あの方も」
「あれっ、さっきまでおられたけれど」
「何処かな」
「何処に行かれたのかな」
吸血鬼達は周囲を見回した。会場の中をだ。
そうして彼を探すがだ。それでもだった。
何故が見当たらずだ。彼等もだった。
困った顔になる。それでもだ。
その彼が見つからずだ。困ってしまった。
「おかしいなあ。すぐにおられるってわかる方なのに」
「どうして今に限っておられないんだ？」
「また急に姿を消されて」
「よくこういうことがあるにしても」
「そうだよな。ちょっとな」
「今は特に」
「まあここにはおられるんだよね」
「ここで言ったのは吸血鬼だった。同胞達に言ったのである。」
「それはそうだよな」
「うん、それは間違いないよ」

「私達実際に御会いしたし」

「だからね」

「おられるのは間違いないから」

それは確かだというのだ。だがそれでもだった。

その彼は見つからずだ。彼等は途方に暮れることになった。

しかしここだ。にゃんぱいあが言うのだった。

「まあ言っても仕方ないにゃ」

「仕方ない？」

「仕方ないっていうと」

「待つのが一番だにゃ」

あっけらかんとしてだ。こう言ったのである。

「その人を」

「いや、何時出て来られるかという」と

「それがわからないからね」

「急に消えられて急に出てこられる方だから」

「どうも」

吸血鬼達がこう言うた。ふとだ。

五代があることを思い出してだ。こう一条に囁いた。

第四話 吸血鬼の話その十

「そうしたところは同じですね」

「そうだな。変わらないな」

「スサノオですね。やはり」

五代も一条もだ。彼のことはよくわかっているからこそだ。それでだ。頷き合って話すのだった。

「そうして様子を見ているんですね」

「俺達のな」

「ということは」

それならばとだ。五代は言っていていってだった。

そうしてだ。一つの答えが出たのだった。

「スサノオは出て来るな」

「間も無く」

「何かわかっておられる感じですね」

吸血鬼がその二人に対して述べた。彼等を見てだ。

「マスターのことも」

「まあ。そのマスターが俺達が思っている相手ならね」

「その行動はわかっているから」

二人はこのことを仮定して話していた。

しかしだ。それでもだった。

あらためて考えながらだ。述べたのだった。

「じゃあ。今はやんぱいあ君の言う通り」

「じっくり待つとするか」

「そうにや。とりあえず何か食べるにや」

「やんぱいあ君の考えはもうそこに至っていた。」

「とりあえず赤いものを食べたいにや」

「ああ、毒があるよ」

吸血鬼がだ。その彼に話す。

「それでいいかな」

「苺大好きにや」

満面の笑顔でだ。にゃんぱいあは吸血鬼の言葉に応えた。両方の前足も万歳の形になっている。身体全体で喜びを表わしている。

そうしてだった。早速だ。

テーブルの上に登ってそうしてだった。苺を食べはじめた。

まさむにやや茶々丸もそれに続く。五代達もだ。

パーティーの料理、バイキングのメニューをだ。それぞれ楽しみはじめた。その味は。

「美味しいですね」

「そうだな」

また五代の言葉に頷く一条だった。ただし今度は頷く話の中身が違っていた。

「味はいいな」

「このホテルはかなりのホテルみたいですね」

「はい、かなりのホテルです」

実際にそうだとだ。吸血鬼も答える。

彼は赤ワインを飲んでいる。そうしながら話していた。

「もうこっちの世界ではかなりランクが上の」

「ですよ。この味は」

「かなりのものだな」

「じゃあこの御馳走を食べながら」

「待つか」

スサノオが来るのをだ。待とうというのだ。

そうした話をしてだった。彼等は。

御馳走に美酒を食べながらだ。相手を待っていた。そうしてだ。やがてだ。彼等の周囲が騒がしくなってきた。

「おお、マスター」

「戻られたのですか」

「そうなのですね」

「いや、ずっとこの場所にいた」
「そうだ。誰かが言った。」

「この会場にな」

「あれっ、そうだったんですか」

「最初からですか」

「おられたんですか」

「いた」

あの声だった。二人、とりわけ五代はだ。

その声を聞いてだ。瞬時に身構えた。その彼と共にだ。

一条もだ。声の方を見たのだった。そこはだ。

人だかりができて見えない。しかしだった。

そこにいるのはわかった。彼がだ。それだった。

二人はだ。それぞれ身構えたまま言うのだった。

「あそこですね」

「そうだな。あの中にな」

「奴がいます」

「スサノオが」

「ああ、あの方がですか」

吸血鬼も彼等のそのやり取りを聞いて述べる。

第四話 吸血鬼の話その十一

「やっぱりそうなんですか」

「うん、間違いない」

「声でわかる。それにこの気配」

「圧倒的なプレッシャー」

そうしたものまで感じてだ。二人はわかったのだ。

そうしてだった。その人だかりを見る。やがてだ。

その人だかりの中からだ。彼が出て来たのだった。

吸血鬼の礼装のそのタキシードにマントでだ。髪の毛は一本もない。

肌はやはり白く目は血走りだ。口からは普通の吸血鬼よりも大きく鋭い牙がある。その姿を見るまでもなくだ。二人は既に確信していた。

そしてだ。本人に対してだ。直接にだった。

その名前をだ。呼んだのだった。

「スサノオ」

「やはりいたか」

「ふむ」

それを聞いてだ。その声でだ。

その吸血鬼のマスター、スサノオが言ってきた。

「来ているのはわかっていた」

「そちらもか」

「わかっていたというのか」

「如何にも」

その通りだと答えてだった。そうしてだ。

スサノオはだ。二人の頭に直接語り掛けてきたのだった。

「さて、それではだ」

『頭の中にか』

『直接語り掛けて来るか』
『如何にも』

その通りだとだ。答えきたスサノオだった。

『君達の聞きたいことはわかっている』

『この世界で何をしている』

『何を考えてだ』

『既にわかっていると思うが』

スサノオは頭の中で笑ってみせて述べた。

『最早な』

『この世界でも見ているんだな』

『人間を』

『そう、私は永遠の退屈の牢獄の中にいる』

そこから逃れることはまだできていない。それでだというのだ。

スサノオはだ。二人にだ。さらに語り掛けてきた。

『その退屈を紛らわせる為にだ』

『人を吸血鬼として助け』

『そうしてか』

『そうだ。人間を見ている』

このことはだ。やはり同じだった。

スサノオは自らの口で言いだ。そしてだ。

二人にだ。さらに話してみせた。

『ただし。この世界ではだ』

『この世界では!?!』

『一体何をしているというのだ』

『戦うことはしていない』

それはしていないというのだ。これも五代達の見た通りだった。

『見ているだけだ』

『人間を』

『それだけだというのか』

『そして君達に伝える為に今いる』

今度はこんなことを言ってきたスサノオだった。

『私はあらゆる世界にいてそうして人を見ている』

『そしてか』

『それぞれの世界で人間を見ているというのか』

『他の世界では戦うこともある』

『その世界にいる戦士達と』

『やはりそうしているのか』

『そしてだ』

ここまで話してだった。スサノオは。

その声を笑わせてだ。そのうえでだった。

第四話 吸血鬼の話その十二

二人の脳にだ。告げたのだった。

『君達が来るのを待っている』

『貴様がその考えでいる限りはだ』

『俺達は戦う』

二人の、より言えばライダー達の答えは決まっていた。そのスサノオ、目の前にいるバンパイアマスターを見据えての言葉だった。

『そして全ての戦いでだ』

『貴様を退ける』

『それを楽しみにしている』

まさにだ。それをだというのだ。

ここまで話してだ。スサノオは。

不敵な笑みを浮かべてだ。踵を返してだ。

吸血鬼達の中に姿を消した。そうしてだった。

目的を果たした五代達は帰ろうとした。だがここでだ。

茶々丸がだ。二人に言ってきたのだった。

「あつ、待つて下さい」

「えっ、待つて欲しいって」

「何かあるのか」

「折角来たんですから楽しみましょう」

こう二人にだ。二人の足下から話したのだった。

「御馳走にお酒を」

「うっん、戦わないっていうし」

「それならいいか」

「ああ、戦わないんですか」

茶々丸も二人の話聞いて述べる。

「それはよかったですね」

「スサノオは戦いばかりを求めてはいない」

「この発想はなかった」

二人もだ。それはなかった。

何故ならスサノオとは常に戦ってきたからだ。だからこそだ。

スサノオは戦うものを思っていた。しかしそれは違っていた。

彼は。

「戦いを抜きにしてもまず人間に仕掛け」

「そうして人間を見ているのだ」

「それがスサノオの目的」

「そういうことか」

「マスターは難しい方だったのですね」

吸血鬼もあらためて知ることだった。自身のマスターとはいつても。

「まあとにかく戦いが行われなくて何よりです」

「とりあえずはですけれどね」

「この世界では」

「では今は楽しみましょう」

吸血鬼も彼等に話した。そうしてだった。

一行は御馳走に美酒を楽しんでからだ。そうしてだった。

帰路についた。その中でだ。

まさむにゃがだ。二人に尋ねた。

「それでだけれどよ」

「それで？」

「それでというと」

「あんた達もうこの世界でやることはやったんだよな」

「うん、スサノオとの話は終わったから」

「後は帰るだけだ」

こう話してだった。二人は実際にだ。

今は彼等がこの世界に来る時に通ったその公園の土管に向かっていた。だが、だ。

ここぞだ。にやてんしが彼等に言ってきた。

「僕達もそちらの世界に行っていていいですよね」
「うん、何時でも来て」
「そして楽しんでいってくれ」
「彼等の世界をだ。そうしてくれというのだ。」
「何なら今からね」
「来るか？」
二人はここで彼等を誘った。
「俺達の世界に」
「俺達もこの世界が気に入った」
「だからお互いにね」
「行き来しないか」
「いいですね」
吸血鬼がだ。二人の提案にだ。
笑顔になつてだ。それで述べたのだった。
「それではお互いに」
「あつちの世界に自由に行つていいにや」
「それはいいな」
「にゃんぱいあとまさむにやも言う。」
「ならあつちでも血を吸うにや」
「つてそれはまずいだろ」
そこはすぐに突つ込みを入れるまさむにやだった。
「幾ら何でもな」
「じゃあどうすればいいにや？」
「俺の血を吸えよ」
「これがまさむにやの言葉だった。」
「他の世界の奴等の血を吸つたら問題だからな」
「そうかにや。血を吸つて駄目かにや」
「よくないね」
五代もそこは突つ込みを入れる。
「どうしてもなら俺の血を吸えばいいから」

「何か面白くないにゃ」

まさむにゃと五代に言われてだ。にゃんぱいあは。

少し面白くないといった顔になった。しかしだ。

すぐに気持ちを直してだ。こう言いだした。

「なら五代さん、あっちの世界に行ったらにゃ」

「俺の血を吸うんだね」

「それと毒にゃ」

それもだとだ。笑顔で言うのである。

「毒たつぷりと欲しいにゃ」

「本当に好きだね」

「赤いものは何でも大好きにゃ」

こう言ってであった。彼等は元の世界に戻り別の世界に行くのだ。つた。

にゃんぱいあの世界でだ。一つのことかわかった。そしてそれがライダー達の戦いのだ。はじまりとなり合図となるものだった。

第四話 完

2011・8・31

第五話 忠の世界その一

第五話

忠の世界

にゃんぱいあ達の世界でのことは五代が終わらせた。しかしだ。響鬼は川の土手にだ。明日夢と横に並んで座りだ。そうしてだつた。

彼はだ。こつ明日夢に話した。

「この戦いはかなり激しく長いものになるだろうな」

「にゃんぱいあちゃんの世界だけじゃないですか」

「うん、それに終わらないな」

こつだ。川の銀色のせせらぎを見ながら話す。

「あの女のこともあるし」

「あと野獣ですね」

「多分それだけじゃない」

他の世界の存在についてもだ。響鬼は言及した。

「にゃんぱいあの世界も出たんだ」

「なら他の世界も」

「関わってくるだろうな。だから」

「戦うんですね」

「今回の相手は魔化魅だけじゃない」

他の存在もだ。今回の彼等の相手だとも言つのだつた。

「その中で俺が一番気になるのは」

「野獣ですか？」

「いや、女だ」

そちらだというのである。響鬼が一番気になっているのはだ。

「あの女だ」

「つていいいますと」

「乾達と戦っていたあいつだよ」

「ああ、あの人ですか」

「明らかに何か知ってるしな」
「考える顔で言う響鬼だった。」

「あいつと会いたいな」

「それで確めたいんですね」

「あいつが何処から来たか」

響鬼は太陽の光を反射し銀色に輝いている川を見る。川は波打つ度に銀色に光る。その合間に青も見えている。その川を見ながらだ。彼はだ。明日夢に話すのだった。

「そしてその力も」

「スサノオが関わってるのは間違いないですよ」

「それは確かだな」

「このことはだ。もう言うまでもなかった。」

「だから是非あの女と会いたいな」

「会えますかね」

「会えるさ」

「このことにはだ。響鬼は微笑みだ。」

「そのうえでだ。こんなことを言うのだった。」

「あの女の方から俺達の相手をしに」

「来るんですね」

「だから待ってればいいんだ」

「じゃあその間は」

「たちはなに行こう」

「まずはそこにだというのだ。」

「それでお茶でも飲もう」

「何か落ち着いてますね」

「焦っても仕方ないからな」

「このことにはだ。響鬼は気さくに笑って話した。」

「ここは明るくいこうか」

「そうですね。焦らず明るくですね」

「リラックスしていこうな」

実に響鬼らしい言葉だった。

「それじゃあ何を食べる？少年は」

「少年じゃなくて明日夢ですよね」

「ははは、そうだったそうだった」

かつての呼び名はだ。何となく出してしまった響鬼だった。そうしたらリラックスした雰囲気だ。二人はたちばなに行った。

そしてそこで、であった。二人は店に入るとすぐに立花香須美と立花日菜佳にだ。こう言われたのだった。

「あれっ、響鬼さんですか？」

「明日夢君まで」

何故かだ。二人は思わぬ客といった顔で二人を出迎えたのだ。

それでだ。こう言ってきたのである。

「さっき何か連絡があつて」

「来て欲しいって言われてましたけれど」

「えっ、誰にだい？」

響鬼もだ。二人の話を聞いてだ。

第五話 忠の世界その二

すぐに怪訝な顔になってだ。二人に問い返した。

「そんなことを」

「威吹鬼さんと轟鬼さんからです」

「御二人に連絡はいつてなかったですか？」

「あの二人に」

それを聞いてだ。余計にだ。

響鬼は首を捻りだ。そしてだった。

「というたまさか」

「魔化魅でしょうか」

ここで明日夢も言った。

「それが出て来たんでしょうか」

「いや、まさか」

「あの人ですか」

「あの女かな」

考える顔で述べる響鬼だった。

「やっぱり」

「噂をすればでしょうか」

こう話すとだ。ここであつた。

明日夢の携帯が為った。彼はすぐにそれに出た。すると出て来たのは。

天美あきらだつた。彼女が言ってきたのだ。

『明日夢君、今何処ですか？』

「うん、たちばなだけけれど」

『響鬼さんはおられますか？』

「いるよ」

すぐに答える明日夢だつた。

「ならすぐに」

『来て下さい』

話は急いでいる感じた。

『あの女の人が出て来ました』

「場所は何処なの？」

『はい、あの橋の下です』

そこだというのだ。

『そこで今』

「わかったよ。それじゃあ」

ここまで聞いてだ。明日夢はあきらまに「こつも言った。

「京介にも伝えるから」

『御願います』

「それじゃあね」

こつ話してだ。携帯を切りだ。

響鬼にだ。話したのだった。

「あのいつもの橋のところで戦っておられるそうです」

「ああ、あそこか」

橋の下と聞いただけでだ。響鬼もわかった。

「あのいつも戦っている石と川のか」

「ですね。じゃあ」

「行くぞ、明日夢」

響鬼もすぐにだった。

明日夢に声をかけてだ。そうしてだった。

たちはなを後にする。その際だ。

立花姉妹がだ。こつ二人に尋ねた。

「私達のどちらかが行かなくていいの？」

「サポーターとして」

「ああ、いいさ」

響鬼は二人に背を向けて店から出ようとしていたが「こつでだ。

二人の方を向きなおりだ。気さくな笑みで応えた。

「明日夢がいるからな」

「あっそうね、明日夢君がいるのならね」

「何の心配もいらないわね」

二人もだ。響鬼の言葉を受けてだ。

すぐに笑顔になってだ。こう応えたのだった。

「やっぱり響鬼さんには明日夢君よね」

「それならそれでいけるわね」

「ええと、できるかどうかわからないですけどね」

少し照れ臭い笑みになってだ。明日夢も応える。

そうしたやり取りからだ。二人はたちばなからだ。その橋の下に向かう。当然その途中で桐矢に連絡もしてだ。そのうえでそこに向かった。

小石が敷かれた場所が下に絨毯の様に広がる青い塗装の鉄とコンクリートの橋の下には小石と共に浅い川がある。そこに足首を浸かせてだ。

第五話 忠の世界その三

威吹鬼と轟鬼がだ。あの女と戦っていた。

二人でそれぞれ左右から攻撃を仕掛ける。しかしだ。

女は強くだ。全く相手にならなかった。

「くっ、やはり僕達だけでは」

「適わないというのか？」

一旦間合いを離して体勢を立て直しながらだ。二人は言う。

「乾さん達とは違い」

「それも二人だと」

「確かに貴方達は強いわ」

女はその手に持った刀を悠然と構え宙に浮かんだ状態でその二人に告げる。

「けれど」

「けれど？」

「何だっというんだ」

「私はもつと強いのよ」

そうだとだ。女は言うのである。

「あの三人、とりあけファイズとカイザだったかしら」

「既に覚えているというのか」

「一度の戦いで」

「記憶には自信があるわ」

それでだ。もう覚えたというのだ。

「あの二人の強さはかなりだったわね」

「だが僕達はというのか」

「乾さんよりも」

「同じ位かしら。けれど」

それでもまだというのだ。女は。

「二人では私の相手にはならないわ」

「くっ、やはりそうか」

「二人だけではか」

「そして」

「そして？」

「今度は何だつて言うんだ？」

「私の相手にならなければ」

それではだ。どうかともいうのだ。

「天草様の相手はできないわね」

「天草！？」

「というたまさか」

その名を聞いてだ。二人はすぐにだ。

ある者の名を思い出した。その者こそは。

「天草四郎のことか！？」

「島原の乱の」

「知っているのね。そうよ」

その通りだとだ。女も返す。

「この柳生義仙の主であるあの方の相手はできないわね」

「天草、あちらの世界の天草なのか」

「この女の世界の」

「その通り。この世界の天草様と私達の世界の天草様は違うわ」

実際にそうだとだ。女、義仙も答える。

「その天草様には遥かに及ばないわ」

「くっ、僕達ではか」

「二人だけでは」

「ええ。ただ二人ではなくなるわね」

ここでだ。義仙がこう言うのだ。

後ろからバイクが一台来た。そこからだ。

まずは明日夢と桐矢が降りて来てだ。二人に言ってきた。

「お待たせしました！」

「すいません、遅れました」

「ああ、あきらが呼んでくれたんだ」

威吹鬼は二人の姿を見てすぐに察した。

「有り難いね。それで響鬼さんも」

「よっ」

左手を敬礼の様にしてびしっと前にやってだ。響鬼はバイクから降りてから二人に挨拶をしてきた。

「頑張ってくれてるな」

「はい、何とか」

「生きてます」

「で、あきらは？」

響鬼は周囲を見回しながら彼女の姿を探した。

「何処にいるんだ？」

「あれっ、さっきまでいたんですけど」

「何処に行ったかな」

「すいません、大丈夫ですか？」

威吹鬼と轟鬼が言っただからだ。すぐにだった。

そのあきらが出て来てだ。頭を下げて来た。

「実はおトイレに行っていました」

「そうか。それなら仕方ないな」

威吹鬼はそれで納得した。

第五話 忠の世界その四

「まあとにかく。今は」

「はい、今はですね」

「響鬼さんが来てくれたから」

それでだというのだった。そうしてだ。

響鬼の変身も終わりだ。三人でだ。

義仙と対峙する。そのうえでだ。

響鬼はだ。明日夢に言った。

「じゃあ明日夢はな」

「はい、天美さんですね」

「ちよつと安全なところにおいてくれ」

戦えない彼はそうしろというのだ。

「危ないからな」

「わかりました。それじゃあ」

「じゃあ俺も」

桐矢もだ。変身してだった。

そのうえで義仙に対峙する。これで四人だった。

四人はもうそれぞれの楽器を手に行っている。武装しながらだ。

響鬼は義仙の正面にいながらだ。三人に告げた。

「じゃあ俺が正面から攻めるか」

「それではですね」

「俺達は」

「ああ、横から頼むな」

こう威吹鬼と轟鬼に言っただ。

そのうえでだ。桐矢にも言った。

「いいな」

「はい」

彼も響鬼の言葉に頷く。

「四人で仕掛けてですね」

「一気に決めるぞ」

「そうね。四人ならね」

どうかとだ。義仙も言ってくる。

「私の相手になるわね」

「こつちも一対一でいきたいんだがね」

それにはこだわりも見せる響鬼だった。

しかし彼も状況がわかっている。だからなのだ。

「まあ仕方ないな」

「好みは言っていられないということね」

「そういうことだ」

響鬼は口調はいつもの通り飄々とはしている。

しかしだ。それでもだ。

義仙を見据えたままだ。次第に間合いを詰め。

四人の鬼で一斉に攻撃を浴びせようとする。だが、

ここでだ。急にだった。

義仙はだ。構えを解いてこつ響鬼達に言ってきた。

「いいわ、それじゃあ」

「それじゃあ？」

「ここで決着をか」

「いえ、それはまだよ」

こつだ。余裕の笑みで告げたのである。

「ここでそれを決めるのは勿体無いわ」

「勿体無い」

「何が言いたい」

威吹鬼と轟鬼が義仙に問うた。

「まさかここではなく」

「別の世界でというのか」

「私達の世界で決着をつけましょう」

これが義仙の言いたいことだった。

それを告げてだった。彼女は。

宙に浮かんだままだ。足からだ。

姿を消していく。その中で響鬼達に告げた。

「門は既にあるわ」

「それは何処だ」

桐矢が鬼の姿で義仙人に問う。

「御前達の世界に行く門は」

「この橋の上よ」

そのだ。彼等が今いるそののだというのだ。

第五話 忠の世界その五

「そこにあるわ」

「何だ、近いな」

それを聞いてだ。響鬼が言った。

「そこからか」

「来るといいわ。そしてそこでね」

「天草、そしてだな」

「そうよ。スサノオというのね」

義仙も響鬼達の言葉に合わせて言う。

「あの方もおられるわ」

「さて、今度はどういった姿で出て来るのか」

響鬼はもうスサノオのことを考えていた。

「そしてあちらの世界でどういった戦いになるのか」

「楽しみにしているのかしら」

「楽しみはしないさ」

響鬼はそれは否定した。少なくとも彼は戦いに楽しみや喜びといったものを見出す者ではない。それで言うのであった。

「だがそれでも」

「戦いはするというのね」

「ああ、そういうことさ」

「わかったわ。それじゃあ来るといいわ」

既にだ。義仙の姿は完全に消えていた。声だけが残っている。

その声で告げてだった。気配も消えた。

後に残ったのは鬼達だった。その鬼達にだ。

明日夢とあきらが駆けて来てだ。こう話してきた。

「あの、橋の上に」

「怪しい門が出て来ました」

「成程、言った通りだな」

元の姿に戻りながらだ。響鬼は。

二人の言葉に頷きだ。それからこう彼等に告げた。

「さつき女から聞いたよ」

「あの隻眼のですか」

「おかしな女に」

「うん、そうなんだ」

「橋の上にあいつ等の世界に行く門があるってね」

威吹鬼と轟鬼も元の姿に戻っている。その姿で明日夢とあきらに返す。

「言った通りだね」

「少なくともあいつは嘘は吐いていないんだな」

「それなら」

桐矢はまさに単刀直入だった。勇んでだ。

響鬼にだ。右手を力瘤にして言った。

「今から行きましょう」

「そうだな。早く行って早く片付けよう」

響鬼はあえてリラックスした調子で言った。そうしてだ。

一行にだ。こうも言った。

「じゃあ今から橋の上に行こう」

「よし、それなら」

「橋の上の門に」

全員応えてだ。そうしてだった。

彼等はだ。橋の上に向かう。その彼等にだ。

一組の男女が来てだ。言ってきたのだった。

「おっと、四人だけじゃな」

「少し寂しいわね」

「えっ、斬鬼さん」

「それに朱鬼さんも」

轟鬼と威吹鬼はだ。彼等の姿を認めてだ。

目を丸くさせてだ。驚いた声で言った。

「死んだ筈なのに」

「まさか」

「そうだ、あの黒衣の青年にだ」

「甦らせてもらったわ」

彼の力によつてだ。そうなたというのだ。

「仮面ライダーはスサノオとの戦いが続く限り何度でも蘇り戦う」

「それが宿命だと言われてね」

「そうですか。だからこそ」

「生き返つて来られたんですね」

「そういうことになる。だからだ」

「私達も一緒に行くわ」

こう言つてだった。二人もだ。

第五話 忠の世界その六

響鬼達に合流してだ。あちらの世界に赴くというのだ。

彼等は今から門に向かおうとする。しかしここでまた、だった。

今度は威吹鬼の携帯に電話がかかあつてきた。それでだ。

出るとだ。電話をかけてきた主は。

「あれっ。香須美さん」

「戦いは終わりましたか？」

「終わることには終わりました。ですが」

「ですが？何かあつたんですか？」

「あの女に去られました」

「そのだ。義仙にというのだ。」

「あの女の世界に」

「そうなんですか。残念ですね」

「いえ、残念ではないです」

「すぐにだ。威吹鬼は香須美に言った。」

「門を見つけました」

「えっ、門を！？」

「はい、今からそちらに向かいますので」

「あの。門って何処ですか？」

「うわずつた声でだ。香須美は威吹鬼に問い返した。」

「そこは」

「橋の上です」

「彼等が戦っているそこだ。威吹鬼は話す。」

「そこにあります」

「ああ、あそこですね」

「それだけでだ。香須美もわかった。そうしてだ。」

「わかりました。それでは」

「それじゃあですね」

『今からそちらに向かいます』

その判断は早かった。

『これから。妹と一緒に』

「わかりました。では待っています」

こうしてだった、立花姉妹も来ることになってだ。

一行は橋の上に出た。そこにある門は。

如何にも和風の門だった。黒い瓦にだ。木の扉の重厚な門だ。

その門を見てだ。轟鬼が言う。

「何かお城の門みたいですね」

「そうだな」

斬鬼もその通りだとだ。弟子の言葉に頷く。

「あの女が行き来するのに使うのに相應しいか」

「それでなんですけれど」

「ここでだ。明日夢はだ。」

その門を見ながらだ。それで言うことは。

「この門の向こうはどんな世界なんでしょうか」

「それが問題だな。おそらくは」

その門を見ながらだ。桐矢も言う。

「この門は日本風だから向こうの世界も」

「和風でしょうか」

あきらも言う。

「やっぱり」

「だとすれば俺達に相應しいな」

響鬼はこう考えて述べた。

「じゃあ今から皆で行くか」

「そうですね。香須美さん達が来られたら」

また言う明日夢だった。そうしてだ。

そんな話をしているうちにだ。一台の車が来てだ。

そのだ。立花姉妹が来てだった。そのうえでだ。

響鬼達にだ。こう言ってきた。

「それならですね」

「私達も一緒に行かせて下さい」

「よし、助っ人も来てくれたしな」

響鬼もだ。車から出て来て言う姉妹を見てだ。その気さくな笑みでだ。

一行にだ。こう言ってだった。

門の前に向かう。彼がそうした。

その彼にだ。明日夢は心配する顔で言った。

「あの響鬼さん」

「何だ、明日夢」

「気をつけて下さいね」

それはだというのだ。

「何かあるかわからないですから」

「ははは、明日夢は心配性だな」

心から気遣う彼にだ。響鬼は笑ってだ。

そうしてだ。門の前まで来てだ。

右手をだ。その取っ手に置いてだ。ゆっくりと引いた。

第五話 忠の世界その七

するとだ。その門からだ。

白い光が出て来た。それが開かれた門の入り口から放たれる。それを見てだ。

一行はだ。口々に言うのだった。

「五代さん達から聞いたのと同じだな」

「そうですね、これは」

「じゃあこの光を潜り抜けたら」

「そこは」

「さて、どんな世界か」

笑いながらだ。響鬼が先頭に立ちだ。

光の中に入る。それに続いてだ。

明日夢達も続く。そうして中に入るとだ。

そこからだ。出て来た場所は。

その頃だ。黒く絹の様な極端に長い髪 of 凜とした顔の少女がだ。

小柄でこれまた黒く長い髪の少女とだ。何故か不機嫌な顔で言い合っていた。

見れば凜とした少女の顔には気品がありだ。着物を思わせる丈の長い、紫に豪華な柄の上着に黒いこちらは短い服にだ。極端に短い白のスカートである。そして足は黒いハイソックスの様なものを穿いている。

目は紫で顔立ちは整いだ。気品がある。そして。

それに対する小柄な少女は白いスクール水着に赤と黒の柄の上着、頭には扇の如き紅い帽子がある。六文銭が服のあちこちに飾られている。紅い目の顔はまだ幼いが気丈そうであり麗しい。その二人がだ。

それぞれ薙刀、そして金の六文銭が入った黒い巨大な扇を手にしてだ。対峙しているのだ。その中でだ。

小柄な少女がだ。相手に対して言った。

「よいか千姫」

「何かしら、幸村」

道場の中でだ。二人は言い合っている。

「わらわはまさに肥後のラーメンこそが最高だと言っておるな」

「ええ、確かにね」

「あの濃さ、豚の骨からダシを取ったのがじゃ」

「いいというのね」

「播磨なぞ何じゃ」

ムキになった調子でだ。その千姫に言う。

「大体御主は江戸生まれであろう。何故播磨なのじゃ」

「そういう貴女は確か信州だったわね」

「そうじゃ、真田は信濃じゃ」

まさにそこだというのだ。

「信濃はよいぞ。梨に林檎にそばじゃ」

「それを言うなら播磨もよ」

何故かだ。播磨にこだわる千姫だった。

そしてだ。目の前の少女真田幸村に言うことは。

「明石焼きにカチワリに筋肉のカレーに。中華街だってあるから」

「御主実に詳しいのう」

「それに野球は虎よ」

何故かだ。千姫は野球の話までしだした。

「虎ことが最強よ」

「ふん、鷹に二回も負けておるではないか」

幸村は虎と聞いてだ。眉を顰めさせてだ。

そしてだ。こう返したのだった。

「御堂筋決戦の時もこの前の星野の時も」

「あ、あれは」

それを言われるとだ。千姫は。

弱みを衝かれた顔になってだ。こう返した。

「スタンカなんて凄いのがいたし。星野様がたまたま運がなくて」
「そもそも星野はシリーズに勝っておるのか？」

「悲運の人なのよ。仕方ないでしょ」

「どうだか。鷹なんぞ毎年優勝してもクライマックスでは負けておるぞ」

「それ威張れるの？」

「上総だか下総の鷗のせいじゃ」

幸村の答弁は苦しい。それもかなり。

「蝦夷の熊も鬱陶しいがのう」

「敵だらけじゃない、鷹は」

「そういう虎は何じゃ。ここぞという時にいつも巨人に負けおって」
「……言っではならないことを言っただわね」

ここでだ。それまで極端に怒っていなかった千姫がだ。

全身に怒りのオーラを身にまといだ。幸村に言ってきた。

その手の薙刀を構え。そしてだつた。

「この小娘！今日こそは！」

「うむ、やるか！」

「巨人許すまじ！」

彼女が怒るのはここだつた。

「何があるうとも成敗してあげるわ！」

「望むところよ。わらわも大きな奴は好かぬが！」

何気に自分のことも入れる幸村だつた。

「売られた勝負は受けて立つ！」

「なら今日こそは！」

「決着をつけようぞ！」

こうしてだ。二人が決闘に入ろうとしている時にだ。

道場の扉が開いてそこからだ。

第五話 忠の世界その八

ぞろぞろとだ。彼等が入って来たのだった。

「あれっ、ここは」

「道場!？」

「そうですね。武道の鍛錬を積む道場ですね」

「これがこつちの世界かな」

「道場だけ見たら全然変わらないけれど」

そんなことを言いながらだ。彼等は。

道場の中を見回す。すると。

そこでだ。千姫と幸村に気付いた。それでだ。

威吹鬼がだ。彼女達に尋ねた。

「あの、ここは何処かな」

「何じゃ、御主達は」

「一体誰なの!？」

幸村も半蔵もだ。彼等の姿を認めてだ。

言い争いを止めてすぐにだ。彼等に問うた。

「見たところ異国の者の様じゃが」

「けれど顔は日本人ね」

「はい、日本人です」

明日夢が二人に答える。

「それでなんですけれど」

「待て、よく見ればじゃ」

「はい?」

「御主達土足ではないか」

「そういえば」

ここでだ。千姫もそのことに気付いた。見ればだ。

一行は全員土足である。それで道場にあがっていた。

それに気付いてだ。幸村は。

怒りを急激にみなぎらせてだ。彼等を一喝した。

「道場に土足であるとはどういう了見じゃ！」

「それは許せないわね」

千姫もだ。このことについては幸村と同じだった。それでだ。

その手にしている薙刀を手にしてだ。彼等に問う。

「すぐに過ちを認めて謝罪しなさい。さもなければ」

「容赦はせぬ！」

幸村も扇を構える。完全に本気である。

しかしだ。ここはだ。

響鬼がだ。すぐにだった。

自分の後ろの一行に顔を向けてだ。こう言ったのだった。

「まずは靴を脱ごう」

「そうですね。幾ら急に出て来たとはいえ道場ですから」

「土足はいけませんよね」

威吹鬼と轟鬼が応える。

「それじゃあまずは靴を脱いで」

「玄関に置きましょう」

「むっ、思ったより素直な者達だな」

彼等のそうしたやり取りを見てだ。幸村はその目を少し動かした。

それでだ。こうも言うのだった。

「ふむ。下駄箱はそちらじゃ」

「ここか」

斬鬼が道場の入り口のその下駄箱を見た。木製で上に何段も重なっている古風な下駄箱がそこにあった。それを見てだ。

一行は納得してだ。そこにそれぞれ靴を脱いだ。

それからだ。朱鬼が幸村と千姫に尋ねた。

「あと。掃除をしておきたいけれど」

「ほう、ちゃんとしてくれるか」

「それもなのね」

「汚したからね」

それはしておかなければならなあいというのだ。

「だからね」

「よい心掛けじゃ。雑巾と箒を持って来よう」

こうしてだった。掃除もしてからだ。あらためてだ。

響鬼一行はだ。幸村達にだ。道場においてだ。

向かい合いだ。そのうえでだ。

頭を下げた。それから話すのだった。

「いきなり出て来てそれで道場を汚してしまっただ」

「ふむ、まことにいきなりよの」

幸村が響鬼の言葉に応える。

「それで道場の土足のことじゃが」

「まことに申し訳ない」

「よい。過ちを認めただからにはのう」

それでいいというのだ。それはだ。

千姫も同じでだ。こう言うのだった。

「まあいいわ。掃除もしたし」

「そうか。許してくれるのか」

「だから過ちを認める者には何も言わぬ」

またこう言う幸村だった。そのうえでだ。

第五話 忠の世界その九

あらためてだ。こう響鬼達に尋ねた。

「御主達は一体何者じゃ」

「言葉は日本語ね」

「だから日本人なんだ」

「またこう話す響鬼だった。」

「ただ。世界は違うがな」

「違う世界から!？」

響鬼のその話を聞いてだ。千姫は。

すぐに怪訝な顔になってだ。こう言った。

「そんな。馬鹿な話が」

「待て、それは有り得る」

「しかしだ。幸村はだ。」

考える顔になりだ。こう言ってだ。

そのうえでだ。また響鬼達に尋ねた。

「様々な世界が並行して存在していることは聞いておる」

「そうですね。それでですね」

今度は明日夢が話す。

「僕達ここに柳生義仙という人と戦ってそれで来たんですけど」

「!？柳生じゃと」

「柳生義仙」

その名を聞いてだ。幸村も千姫も。

表情を一転させ強張らせてだ。一行に言うのだった。

「あの者は死んだ筈だぞ」

「しかも貴方達の世界に出て来たですって!？」

「はい、そうです」

「その通りです」

あきらもそうだと答える。

「それで僕達は門を通って」

「この世界に来たんですけれど」

「十兵衛と刺し違えたのではなかったのか」

「それがどうして」

二人はだ。響鬼達の話聞いてだ。

その表情を曇らせてだ。そうして言うのだった。

「御主等の世界に出て来たのじゃ」

「そして門とは一体」

「あの、それでなのですけれど」

「いいですか？」

立花姉妹が幸村と千姫に話してきた。

「私達もこちらの世界のことは全く知らないので」

「よかつたらどういった世界か教えてくださいますか？」

「そうじゃな。わらわ達ももっと聞きたいことがあるしのう」

「そちらの世界のことを」

「服だけを見れば私達の世界と全く違いますね」

「それもかなり」

立花姉妹は自分達の前で正座する二人の姿を見て言う。どう見てもだ。

姉妹の服とは全く違う。それを見てだ。

姉妹はだ。こう言うのだった。

「水着にミニスカートですか」

「それもかなり派手な」

「おかしいか？」

「これが私達の普段着よ」

「あの、それがかなり」

「驚いてまして」

二人が言うのだ。桐矢もだ。

少し戸惑いながらだ。二人に言った。

「とにかく。どういった世界なのかをな」

「わかった。それではじゃ」

「皆も呼んでお話してあげるわ」

「あれっ、二人だけじゃないんですか」

「そうじゃ。この屋敷にはわらわ達の他に何人か住んでおる」

「ここは幕府の武道指南役の屋敷なのよ」

「武道指南役というと」

あきららはそう言われて驚きながら述べた。

「それに幕府というと」

「うむ、徳川幕府じゃ」

「私の家でもあるわ」

千姫は自分の家の話もここでした。

「徳川將軍家よ」

「徳川幕府がまだ続いてるんですか」

そのことを知ってだ。あきらだけでなく響鬼達全員が驚きを隠せなかった。

「私達の世界と全く違いますね」

「ではお互いの世界の話をしようぞ」

こうしてだった。お互いに道場に集った。響鬼達は既に集っているが。

第五話 忠の世界その十

大柄で丈の長い黒服とズボンに身を包んだあどけなさが微かに残る柔らかい笑顔の灰色の髪少年だった。

「柳生宗朗です」

「服部半蔵です」

青い目に紫の長い髪のメイドである。ただカチューシャの後ろは紅い巻物をかんざしにしている。眼鏡をかけた楚々とした顔の少女だ。

「後藤又兵衛です」

白い禪である。上は短いセーラー服をビキニの様にしている。

青がかった灰色の髪を小柄をかんざしにして止めている。凜とした中にも何処か優しい雰囲気をした顔の瞳は少し垂れていて黒い。背が高い。

「直江兼続ですわ」

黒いベストとミニスカート、ハイソックスに白いブラウスと紅いネクタイ。栗色の瞳を持つ顔はまだ幼い。紫の髪をツインテールにして長く伸ばしている。頭には愛の字が書かれた髪留めがある。

この面々がだ。響鬼達と向かい合ってた。

正座をして一礼をする。響鬼達もそれに応える。それからだった。彼等はだ。お互いにだった。自分達の世界の話をした。

それが終わってからだ。宗朗が言った。

「にわかには信じられないのはお互いですね」

「そっだよな。こっちもな」

響鬼もだ。腕を組んだ言う。

「そっちの世界とこっちの世界がな」

「その門でつながっていてですね」

「しかもその義仙って女はそちらの世界でも暴れてたんだってな」

「はい、そうです」

その通りだとだ。義仙も話す。

「あの時は大変でした」

「しかし十兵衛がじゃ」

幸村はこのことを残念な顔で述べた。

「失ってからじゃからな」

「あの小娘がいなくなつて清々しますわ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

兼続がそんなことを言うた。千姫がだ。

無言で何時の間にか彼女の手元にあつた鈴付きの紐を引っ張ると。

それで。

兼続の頭の上に盥が落ちた。それから言うのだった。

「憎まれ口は黙っておきなさい」

「あいたたたたた・・・・・・・・酷いですわ」

「自業自得じゃ」

幸村も兼続には厳しい。

「とにかくじゃ。あの女が生きておつてじゃ」

「スサノオ、ですね」

半蔵が言うのはその存在についてであつた。

「貴方達の世界で絶えず仕掛けてきている神ですね」

「かなりおかしな神ではあるな」

斬鬼はスサノオをそう考えていたし実際にそうだと話した。

「仮面ライダーに常に仕掛けてきているんだからな」

「圧倒的な力があるというのにそれに徹している」

又兵衛も怪訝な顔で述べる。

「確かに妙な神ですね」

「楽しんでおるのじゃな」

幸村は話を聞いてすぐに察した。

そしてだ。こう言うのだった。

「仮面ライダー、ここでは人間じゃな」

「そうなんだよな、人間に仕掛けてそれで」

轟鬼もここで話す。

「人間を見ているんだよ」

「ふむ。そういえばじゃ」

幸村は彼等の話を聞いてまた察して言った。

「こちらの世界でもそうじゃな」

「確かに。柳生義仙の時といい」

「では天草という者の背後には」

千姫もだ。考えが至った。

「そのスサノオがいるのかしら」

「そう思っていると思います」

威吹鬼がこう千姫に返す。

「こちらの世界にもいるのは間違いないですから」

「あの女を操っているのは天草じゃ」

幸村はまた話す。

「そしてその天草の背後におけるか若しくは天草はスサノオの化身の

一つか」

「だとしたら厄介だね」

今度は宗朗が腕を組み考える顔で述べた。

「今度の戦いは」

「おそらくわらわ達だけでは歯が立たぬ」

幸村はここでもすぐに分析し終えて述べた。

第五話 忠の世界その十一

「申し訳ないが御主達にもじゃ」

「私達ね」

朱鬼が幸村のその言葉に応える。

「仮面ライダーにも」

「頼めるだろうか」

「勿論だよ」

微笑んでだ。響鬼が幸村のその申し出に応えた。

「だから来たんだ」

「そうですね。おそらく僕達も」

今度は宗朗が応える。

「貴方達と一緒にならそうしていたと思います」

「そういうことだな。それじゃあな」

「はい、一緒にですね」

「戦おうか」

「おそらくこの世界だけでは済みませんね」

半蔵が考える顔で述べる。

「スサノオとの戦いは」

「猫の吸血鬼の世界では戦いにはならなかったにしても」

又兵衛はにゃんぱいあの世界のことから述べる。

「それでも。あらゆる世界に干渉してきているとなると」

「うむ、間違いなく多くの世界を股にかけて戦になる」

幸村の洞察はここでも発揮される。

「これは長く激しい戦になるぞ」

「そうだね。それでは響鬼さん」

宗朗は幸村の言葉に応えたうえでだ。それからだ。

響鬼に顔を向けて。こう言うのだった。

「スサノオとの戦いが一応の終結を見るまでは」

「一緒に戦ってくれるか」

「そうさせて下さい」

これでだ。仮面ライダーとサムライ達の共闘が決まったのだった。それが決まってからだ。

ここでだ。兼続が言った。

「お話は決まりましたけれどお腹が空きましたわ」

「その辺りの雑草でも食っておけ」

幸村は相変わらず彼女には厳しい。

「少しは頭よくなる草でも食え」

「何ですの、その言い方は」

「御主が馬鹿だから言うのじゃ」

まことに容赦がない。

「それか葱でもたらふく食え」

「うう、何と口の減らない」

「まあとにかくな」

響鬼がそんな二人の間に入る形だ。笑って言った。

「腹が減っては戦ができぬってな」

「そうですね。では幸い今料理ができましたので」

宗朗が微笑みながら話す。

「では一緒に」

「あつ、御馳走してくれるのか？」

「鮎の塩焼きに若布の味噌汁にです」

宗朗はその献立を話していく。

「ほうれん草のおひたしに蛸と胡瓜の酢のもの、もやしとニラを茹でたものです」

「あと御飯だな」

「はい、白米です」

これは外せなかった。和食なら。

「勿論納豆もありますので」

「凄いな、やっぱり日本だな」

ここまで聞いてだ。響鬼は満面の笑顔になる。

「それで食後は」

「団子があります」

「見事、流石侍だ」

「では皆さん一緒に」

「何か悪いですね」

あきららは遠慮の言葉を述べた。

「そこまですてもらって」

「いや、よい」

「いいのですか？」

「わらわ達はもう仲間になったのじゃ」

幸村が言うのはこのことだった。

第五話 忠の世界その十二

「その中で遠慮はいらん」

「そうなのですか」

「わらわ達も御主達の世界に行くことがある」

幸村はこうも話した。

「そしてその時にはじゃ」

「そうだな。俺達が御馳走することになるな」

「そうした意味でお互い様じゃ」

幸村は響鬼にもこう述べた。

「だからいいのじゃ」

「そうだな。それじゃあな」

また響鬼が言う。

「御互いに美味しい飯を食うか」

「腹が減っては戦ができぬ」

幸村が満足した面持ちで応える。

「そして胸も大きくはならぬ」

「それは無理ね」

千姫は幸村の今の言葉にはこう突っ込みを入れた。

「間違ってもね」

「言うのう、御主は」

「だって貴女の場合は中もそうだから」

「中を言えば御主もそうであろうが」

「うっ、それは」

まさに藪蛇だった。千姫にとっては。

それでだ。しまった、という顔でだった。

「それを言つと」

「中身を言つときりがないんじゃないのか？」

桐矢もそのことは何故か無視できなかった。

それでだ。あきらを見て話すのだった。

「そうだよな、やっぱり」

「あれっ、桐矢君はそうしたことば」

「俺の場合はあれなんだよ。もやしがどうとかな」

「原作と比べて大き過ぎる、ですね」

「俺の背が高いのはあれだよ。仕方ないからな」

「そうですね。ただ見たところ」

あきらは先程打ちのめされて今も目をくらくらと回して倒れてい
る兼続を見て言った。

「直江さんは中は背が高い様に思えます」

「あと後藤さんかな」

明日夢は又兵衛を見て言う。

「後藤さん御自身も大きいですけどね」

「あと絵はどうでしょうか」

何故かだ。あきらはこんなことも話した。

「後藤さんの絵は」

「はい、絵は得意ですが」

又兵衛はあきらの問題にだ。納豆を椀の中に入れて掻き混ぜなが
ら話す。

「それが何か」

「いえ、全然違いますから」

「そうよ。間違っではいけないから」

ここぞだ。半蔵と千姫が必死の顔で又兵衛の言葉を訂正してきた。

「又兵衛さんに絵だけはです」

「いけないわよ。その話は」

「何か大変なことがあるみたいですね」

明日夢は二人の話からそのことを察した。そうしてだ。

いぶかしみながらだ。こんな言葉を出した。

「つまり。画伯でしょうか」

「画伯？」

「はい、何か独特な絵を描かれる人はそう言われるそうですね」

「とりあえず色々あるからな」

響鬼はまた話した。

「とりあえず今は親睦を深めていくか」

「はい、そうですね」

宗朗がだ。響鬼の言葉に頷いてだった。そんな話をしてだった。

彼等はその鮎や漬物、味噌汁を食べていく。そして団子に抹茶まで楽しんだ。それが終わってからだ。

立花姉妹がだ。宗朗達に尋ねた。

「この団子はどちらで？」

「どちらで買われたものですか？」

「私の実家から取り寄せたものよ」

千姫が答える。

「そこからよ」

「というと徳川將軍家から」

「わざわざですか」

「ええ。だから美味しいわね」

幾分自慢げにだ。千姫は笑って話す。

「お団子もお抹茶も」

「確かに。お茶もいいですね」

「最高です」

そうした話をしてからだ。ふとだ。

宗朗がだ。その千姫に話した。

第五話 忠の世界その十三

「このことですが」

「お兄様にも？」

「お話した方がいいのでは」

「いいの？それは」

「僕とあの人のことを言っていますから」

「お兄様はあれだけ宗朗とあつたから」

「それでも。今回は事情が事情です」

「それでだ。宗朗は言うのである。」

「あの方にもお話しておかなければ」

「だからお兄様は」

「ああ、それは気にせずともよい」

「しかしだ。ここ。幸村が言ってきた。」

「慶彦のことはじゃ」

「お兄様を呼び捨てにするとは」

「わらわはそもそも真田じゃ。真田は徳川の敵ぞ」

「いいえ、そういう訳にはいかないわ」

「ふん、何を言われても徳川にはつかぬわ」

「まあそれはいいとしてね」

二人の間には今回は威吹鬼が入ってだ。

それでだ。二人にこう尋ねたのだった。

「その慶彦さんって人は千姫さんのお兄さんだよね」

「ええ、そうよ」

その通りだ。千姫も答える。

「学園の生徒会長でもあるわ」

「生徒会長でもあり」

「あら、わかつたのね」

「うん、千姫さんが徳川家のお姫様だから」

そこからわかったとだ。千姫に対して答える威吹鬼だった。
「だからね」

「そうよ。お兄様は次期將軍なのよ」

「その人にもお話をするんだ」

「はい、そう考えています」

宗朗は威吹鬼達にも話す。

「それはどうでしょうか」

「いいんじゃないのか？」

最初に答えたのは斬鬼だった。

「それは」

「いいですか」

「その慶彦って人がどういう人かは知らないが」

それでもだとだ。斬鬼は言う。

「それでもな」

「それでもすね」

「話してみる価値はある」

こう話すのである。

「少なくともな」

「それにじゃ。慶彦はじゃ」

幸村は何を言われても呼び捨てを止めない。そこには彼女の意志もあるからだ。

「御主を嫌ってはおらぬ」

「僕を？」

「そうじゃ。御主自体は嫌ってはおらぬ」

そうだとだ。宗朗に話すのである。

「それに今回は事情が事情じゃ」

「うん、徳川やそれどころじゃないね」

「日本どころか世界全体の話じゃ」

「それも多くの世界の」

「だとすれば道は一つ」

幸村はまた言い切った。

「力を一つにすることじゃ」

「では早速慶彦様のところ」

「行こうぞ。よいな」

「うん、皆でね」

「僕達もですな」

明日夢がその宗朗の言葉に問うた。

「やっぱり」

「うん、君達からも慶彦様にお話して欲しいんだ」

「僕達の世界のことを」

「頼めるかな」

彼等を見てだ。宗明は問うた。

「それも含めてね」

「どうしますか、響鬼さん」

「俺の考えはもう決まってるからな」

響鬼の返答は気さくなものだった。

「行くか、次の将軍様のところ」

「わかりました。それでは」

宗朗は響鬼のその返事に笑顔で返す。こうしてだった。

彼等は徳川慶彦のところに向かう。そのうえで仮面ライダーの世界、そしてこの世界との関わりのことも話すことにしたのだった。

第五話 完

2011・9・7

第六話 信の誓いその一

第六話 信の誓い

響鬼達は宗朗達と共に徳川慶彦の下に向かう。彼の居場所はい
うと。

「学校なんですね」

「うん、そうなんだ」

宗朗は先頭をいつている。その中でだ。自分の後ろにいる明日夢
に話した。

「僕達も学生だからね」

「そうですね。実は」

「明日夢君もだね」

「はい、そうですね」

「僕も一応師範代だけれど学生でもあるから」
それでだというのだ。

「学園生活も楽しんでるよ」

「実は私と同じクラスです」

半蔵がここで衝撃の事実を語る。

「姫様も一緒ですよ」

「あまりいたくないクラスだな」

桐矢は千姫を見てすぐに言った。

「どうもな。何かと騒動を起こしそうだ」

「失礼な、私はそんな」

「自覚しておらぬところが厄介なのじゃ」

幸村は桐矢についた。それでだった。こう言ったのだった。

「全く。高飛車で金遣いは荒く」

「服部さんはそのクラスで何をしているんだ？」

「学級委員です」

半蔵はそつだと話す。

「それとこの武應学園塾の風紀委員長も務めています」

「風紀委員長としてもな」

桐矢は半蔵の話を聞いてまた述べる。

「今一つ頼りないか」

「うっ、何故そんなことを言うのですか？」

「思っただけだったがまさか」

「確かに私は幸村殿や千姫様程強くはないです」

彼女の話聞いて響鬼達はその二人が侍としてはかなりの戦闘力を持っていることを悟った。それは気配からもちろなりわかることだった。

そうした話をしてだ。さらにだった。

半蔵はだ。響鬼達にいささか必死の顔で話した。

「ですがそれでも」

「半蔵の悪口は許さないわよ」

千姫はこれまで以上に強い声で桐矢に話した。顔だけでなく身体も桐矢に向けてだ。そのうえで咎める顔になり顔を突き出して話したのだ。

「私への悪口も許さないけれど」

「半蔵が貴女の家臣だからか？」

「家臣でもあり友達よ」

そうしただ。かけがえのない存在だというのだ。

「その半蔵の悪口を言うことは絶対に許さないわ」

「姫様、そんな」

「この人達はいいい人達が多いみたいだけれど」

それでもだ。千姫は桐矢を見て話す。生徒会長室に向かって歩きながらそのうえでだ。千姫は後ろ向きになって歩きながら桐矢に話してきている。

「この桐矢だけは違うみたいだから」

「まあそんなことは言わないでくれよ」

響鬼が微笑んで両者の間に入って述べた。

「京介も付き合ってみればそんなに悪い奴じゃないからな」

「そうかしら」

「人間っていうのはあれだよ。少し付き合っただけじゃわからないものだからな」

「少しではなのね」

「場合によっては何年も付き合っても中々わからなかったりするんだ」

「そうだともだ。響鬼は微笑んで話す。

「そういうものだからな」

「随分と人生経験があるのね」

「千姫もそのことはわかった。響鬼について。

「やっぱり多くの戦いを経てきてなのかしら」

「戦いもそうだし後は」

「後は？」

「多くの人とも出会ってきたからな」

「出会いもなの」

「出会いもあれば別れもあった」

「それもあつたとだ。響鬼は今度は少し寂しげな顔になって述べた。

「そういうのを経てきてなんだ」

「響鬼さん、貴方はどうやら」

「どうやら？」

「最初に御会いした時はわからなかったけれど」

「響鬼の話だ。そのまま言った形になった。

「喜びも悲しみも経てきたのね」

「そうなるかな。生きてきたからな」

「鬼として」

「そう、生きてきたからこそ」

「そうだとだ。響鬼に話すのだった。

第六話 信の誓いその二

「そうして今の響鬼さんになられたのね」

「ははは、人間生きていればそれなりになっていくさ」

「正しい道を歩めば」

「正しいことかどうかわからないけれど」

「けれど？」

「鍛えてますから」

心もという意味だった。響鬼は悲しみはあえて見せずにだ。それだった。

笑顔でだ。こう言ったのだった。千姫もそれを聞いてだ。

響鬼の心に深い、人間としての成熟を感じたのだった。

そしてそのままだ。千姫は響鬼の話聞く。彼は生徒会長室への道中でさらに話すのだった。

「俺は実は機械が苦手なんだ」

「機械は」

「うん、だからバイクも免許は持っていたけれどね」

苦笑いになってだ。そのことを話すのだった。

「それでも。中々運転しなかったしな」

「あれっ、仮面ライダーなのにですか？」

兼続はかなり素朴に尋ねた。そのことに。

「オートバイに乗らないっていうのは」

「仮面ライダーとしては失格かな」

「仮面はともかくとして」

響鬼を見ながらだ。彼女は言う。

「オートバイに乗らない仮面ライダーはないと思いますけれど」

「実はそれでだ」

「何かと言われたりしたわ」

斬鬼と朱鬼はこんなことを兼続に話した。

「それでは音撃戦士でしかないとな」
「鬼と」

「というか鬼ではなくて？」

さらに言う兼続だった。

「それですと」

「まあな。否定できないな」

「仮面ライダーになってはいるけれど」

「一つ言わせて頂きますと」

あきらがここで話す。

「鬼は鬼ですか」

「それでもですね」

「はい、私達は人として戦う鬼です」

そうだとだ。又兵衛に話すのだった。

「そうした鬼ですから」

「鬼といっても色々なのですね」

「あれだな。人は時として鬼になる」

響鬼、その鬼の言葉だ。

「そういうことだな」

「成程のう。人の心を持って鬼となり戦いその魔化魅を倒すのじや
な」

「簡単に言えば妖怪退治さ」

「スサノオが出すそれを」

「その為に鍛えてもいるからな」

「ここでも鍛えていることを話す響鬼だった。

「そうして鬼になったんだ」

「思えば凄い話じゃ」

そのだ。生身の人間が鬼になれることについてだ。幸村は唸る様
にして述べた。

「修業はするものじゃな」

「まあ鬼になるにはコツもあってな」

「修業だけではなれぬか」

「身体を鍛えてそこからなんだ」

鬼になる、そのこととはどういうのだ。

「色々あってな」

「ふむ。中々興味深い話じゃ」

そんな話をしているうちにだった。一行は。

遂にその生徒会室の前に来た。すると。

その前にだ。思わぬ者がいた。

「待っていたにや」

「何ですの、この猫は」

兼続はにゃんぱいあを見てだ。すぐに首を傾げさせて言った。見事な扉の前にだ。にゃんぱいあが二本足で立っていたのである。

その彼を見てだ。兼続は言うのだった。

「黒猫とは不吉ですわ」

「それは九州の方のことでは？」

半蔵がその兼続に突っ込みを入れる。

「別にこの江戸では」

「ですが実際に」

「米沢では違う筈じゃが？」

幸村はここでも兼続に突っ込みを入れた。

「それはあくまで化け猫のみじゃ。普通の黒猫は違うぞ」

「けれどこの黒猫は」

兼続はにゃんぱいあを見ながらさらに言う。

第六話 信の誓いその三

「牙がありますし」

「猫なら絶対にあるものだろうに」

「それに蝙蝠の翼まで」

「むっ、確かに」

「ここだ。幸村はようやくにゃんぱいあをまともに見た。すると確かにだ。」

その背には蝙蝠の翼がある。それを見て幸村も言った。

「御主、何者じゃ」

「僕はにゃんぱいあにゃ」

「にゃんぱいあじゃと」

「そうにゃ。猫の吸血鬼にゃ」

「むう、猫の吸血鬼までおるのか」

「暇だったからこそこの世界に遊びに来たにゃ」

「そうだとだ。幸村に話すのである。」

「それでここには僕そつくりの気配を感じたので来たにゃ」

「にゃんぱいあちゃんにそつくりの気配？」

「そうにゃ。もう一人の僕みたいな気配にゃ」

それを聞いてだ。明日夢がだ。今度は彼が腕を組み首を捻りだ。

そのうえで言うのだった。

「何なのかな、それって」

「この扉の向こうから感じるにゃ」

「まさか会長さんが猫なんて筈がないし」

「それは絶対はないから」

千姫がこのことは保証した。確かに。

「それなら私も猫になるじゃない」

「そうですね。ですから」

「ああ。慶彦様は確かに人間ですから」

宗朗が明日夢達にこのことを確かだと話す。

「僕達は何度も御会いしていますし」

「そうですね。それじゃあ」

「この猫。にゃんぱいあだったかな」

「そうじゃ」

その通りだとだ。にゃんぱいあは笑って応える。

「それが僕の名前だにゃ」

「吸血鬼の猫というのは驚いたけれど」

「そんなに珍しいかにゃ？僕の世界では普通にゃ」

「いや、話は聞いてたよ」

それはだとだ。宗朗もにゃんぱいあに対して話す。

「響鬼さん達からね」

「それでも見たら驚いたにゃ？」

「うん、いや、本当にいるんだなって」

「そういうことにゃ。それでにゃ」

「それで？」

「だからこの扉の向こうにいるにゃ」

その自分の後ろの扉を指し示してだ。にゃんぱいあは宗朗に話す。

「僕と同じ気配の人がいるにゃ」

「慶彦様が猫を飼っておられるのかな」

「お兄様にそうした趣味があるとは」

妹の千姫もだ。このことにはだ。

首を捻っている。どうやら本当に知らないらしい。

しかし何はともあれだった。彼等は。

扉をノックした。するとだ。女の声で返事が入って来た。

「誰だ」

「柳生宗朗です」

扉をノックした宗朗自身が返事を返す。

「慶彦様はおられるでしょうか」

「おられる。それで何の様だ」

「お客様をお連れしました」

「客だと」

「そしてお話ししたいことがあります」
「それでだということだ。」

「中に入りたいのですが」

「少し待て」

女の声がかう応えてからだ。暫し沈黙となった。その中でだ。
にゃんぱいあがだ。一同に言うのだった。

「あの声にゃ」

「あの声がか」

「そうにゃ。僕と同じ気配がするにゃ」

「あの声の主は」

又兵衛がここで話す。

「シャルル＝ド＝ダルタニヤンですが」

「だるたにゃん？」

「そうです。仏蘭西から騎士ですが」

「その人から感じるにゃ」

また言うにゃんぱいあだった。

第六話 信の誓いその四

「僕と同じ気配をにや」

「成程な。事情はわかった」

「ここでのやんぱいあの言葉に頷いたのは斬鬼だった。桐矢も何処かそうなっている。」

「それでだ。その斬鬼が話す。」

「俺も同じだからな。一人狼男がいるがな」

「そういえばそうにや斬鬼さんとあの人はそっくりにやにやんぱいあも斬鬼のその言葉に頷く。」

「そういうことにや」

「うむ、わかった」

「そうね」

「まずはだ。幸村と千姫が頷けた。」

「わらわも心当たりが多そうな話じゃしな」

「私もかなり」

「はい、それは私も」

「私ものです」

「私ものですわ」

「そしてだ。それはだ。」

「又兵衛に半蔵、兼続まで同じだった。そして宗朗もだ。」

「だが宗朗はだ。こう言うのだった。」

「僕はちよつと」

「うむ、宗朗はのう」

「そうなんだよ。よく死ねって言われるから」

「彼だけは困った顔になって話す。」

「アニメだけでなく漫画やゲームの方も観て言って欲しいなあって」

「切実な願いじゃな」

「幸村もそういうの無い？」

「わらわはそういつた世界とは縁がないからのう」
「だからだ。知らないというのだ。」

「この中では御主だけではないのか？」

「相手が男つてのもあつたし」

「だから柳生宗朗は破廉恥なのですわ」

兼続はそれも根拠だと言つたのだ。

「まことにはしたない」

「そういう御主も他の世界では何じゃ」

幸村の突込みがまたしても兼続に炸裂する。

「妄想がどうか。他にも乳がどうかじゃ」

「うっ、それは」

「わらわなんぞ胸がある話は滅多にないぞ」

「というよりあつたの？」

千姫は幸村に言つた。

「そういう話は」

「残念じゃが記憶にない」

「そうよね。幸村といえばツインテールよね」

「まことに。中身のことを話すと思わぬ墓穴になってしまつたのう」

こんな話をしてだ。ようやくだった。

一行は扉を開ける。するとまずはだった。

長い金髪に吊り上がり気味の赤紫の目のだ。ヨーロッパ系の少女がいた。ドレスと鎧を組み合わせた様な服を着ている。武装している感じがした。

背は高く胸も目立つ。頭には羽帽子がある。

その彼女を見てだ。にゃんぱいあが言つたのだった。

「この人じゃ、間違いないにゃ」

「この猫は」

そしてだ。そのヨーロッパ系の少女もだ。

にゃんぱいあを見てだ。興味深そうに言つてきた。

「私に似ている。むしろ」

「そうにや。そつくりにや」

「確かに。見たこともない猫だというのに」

「こつという相手がいてくれると嬉しいにや」

実際にだ。とても嬉しそうなにゃんぱいあである。そうしてすぐに少女の足下に来てだ。その足下で少女に対して尋ねたのである。

「それで名前は何ていうにや？」

「ダルタニヤン」

少女は自分から名乗った。

「シャルルド＝ダルタニヤン」

「それが貴女ですね」

轟鬼がダルタニヤンに対して述べる。

「そうなんですか。貴女が」

「私は慶彦さまにお仕えする騎士だ」

ダルタニヤンはこつ轟鬼に返す。

「そしてこちらにおられるのが」

「まさか君達が来るとはね」

ここぞだ。青年の声がした。

第六話 信の誓いその五

そしてだ。見事な席に彼が座っていた。

座っていてもわかる程の長身に銀色の波打つ見事な髪、水色の傲慢さ、そして冷徹さをたたえた目は切れ長になっている。

顔は白くアジア系であるが何処かヨーロッパ系を思わせる。細長く鼻は高く彫もある。そうしたアジア系とは少し離れた顔である。服は黒だ。だが宗朗のそれとは微妙に違う。その青年がだ。

宗朗達を見てだ。言ったのだ。

「意外と言うべきかな」

「お兄様、実は」

「戦いに来たのではない」

彼は千姫に対して述べた。座ったままで。

「そうだね」

「はい、むしろです」

「君達だけでもない」

青年は今度は響鬼達を見た。そうしてだ。

彼等も見てだ。そして言うことは。

「見たことがないが君達は」

「まずは一つ申し上げたいことがあります」

宗朗がだ。彼に言う。

「いいでしょうか」

「何かな、一体」

「柳生義仙が甦りました」

「何っ!？」

それを聞いてだ。彼、徳川慶彦もだ。

宗朗の話聞いてだ。眉をぴくりと動かした。

そのうえでだ。あらためて宗朗に対して尋ねたのだ。

「まさか。そんなことが」

「はい、そのことですが」

「彼等が知っている」

慶彦は響鬼達をまた見て言った。

「そういうことだね」

「はい、そうです」

「君達も彼女と闘ったんだね」

「俺達が何人かかろうともな」

ここで言ったのは響鬼だった。

「かなりの相手だったさ」

「ふむ」

慶彦は響鬼の話聞いて頷く。

「そうか。では眼帯をしていたのかい？」

「ああ、知ってるさ」

「何処までも知っている様だね」

それを聞いてだ。慶彦は。

納得した顔でだ。こう言ったのだった。

「ではやはり君達は」

「俺達の話聞いてくれるか」

「是非聞かせてもらいたいね」

これが慶彦の返答だった。

「君達が何者かも」

「ああ、それじゃあな」

こうしてだった。響鬼達は自分達のことを慶彦に話した。話を聞き終えてだ。

慶彦はだ。まずはこう言った。

「荒唐無稽と言うべきかな」

「信じられないか？」

「それは否定しないね」

実際にそうだとだ。慶彦は響鬼に返す。

「仮面ライダー。他の世界から来た」

「それが俺達ということなんだけれどな」

「そしてスサノオ」

慶彦はこの神のことも聞いていた。それで言うのだった。

「君達の世界、そしてあらゆる世界に介入してくる謎の神」

「人間を見る為にな」

「そのスサノオが柳生義仙、そして天草四郎の後ろにいる」

「どうだい、この話は」

あらためてだ。響鬼は慶彦に尋ねた。

「荒唐無稽にしても」

「信じられない筈の話だよ」

慶彦の言葉がここでこうなった。

「けれどね」

「けれどなんだな」

「そう。君達の言葉は嘘だとは全く思えない」

慶彦から聞いてもそうだった。

そしてだ。宗朗も千姫も見て。あらためて言ったことは。

「宗朗も千姫も嘘を吐くことは絶対にしないからね」

「ではわかってくれたんだな」

「君達の話は嘘ではない」

そのことは間違いないというのだ。

第六話 信の誓いその六

「間違いなくね」

「それならです」

「ここです。宗朗がだ。」

「思い切つてだ。慶彦に対して言った。」

「我々はこの仮面ライダーの人たちと協力して」

「そのスサノオを討つ」

「そうするべきです」

「宗朗と千姫がそれぞれ言う。」

「この世界だけのことではありません」

「全ての世界がです」

「大きいな」

「慶彦は二人の話を聞いてだ。こう言った。」

「僕達の世界だけではないなんてね」

「勿論日本だけのこともないです」

「より大きな」

「だから大き過ぎるんだ」

「これが慶彦の最初の言葉だった。」

「わかるかい？大き過ぎるんだよ」

「といますと」

「あの、お兄様はどう考えておられるのでしょうか」

「僕は大きいものや大きいことは好きだ」

「大きいものが」

「ではお兄様は」

「この世界の危機は即ちこの国の危機」

「当然だ。そうなることだというのだ。」

「それなら次期將軍として放置はできない」

「だからですか」

「お兄様もまた」

「そう、ダルタニヤンを貸そう」

そのダルタニヤンを見て。そのうえでの言葉だ。

「思う存分戦うといい」

「有り難うございます。それでは」

「私達は」

「あとあくまで気が向けばだが」

こつ前置きしてだ。また言う慶彦だった。

「僕も行こつ」

「慶彦様もですか」

「そうして頂けるのですか」

「気が向けばだ」

あくまで口ではこう言うがだ。その目も口元も笑っている。

その笑みで言っただ。そうしてだった。

慶彦も協力することが決まった。かくしてダルタニヤンが彼等と行動を共にすることになった。そうしてであった。彼等は。

まずは生徒会長室を後にした。それからまずは道場に戻ることにした。

その途中にだ。威吹鬼がそのダルタニヤンに問うた。

「あの」

「何だ」

「フランスの方ですね」

「如何にも」

その通りだとだ。ダルタニヤンも答える。

「慶彦様がフランス御留学の折に出会いだ」

「その時にですか」

「そうだ。今に至る」

ダルタニヤンはこつ話す。

「かつてはこの者達とも刃を交えた」

「そうだったのですか」

それを聞いてだ。威吹鬼は頷く。それからだ。

彼は今度は幸村に尋ねた。彼等は今は混ざって共に校内の廊下を進んでいる。和風な独特の趣のある校舎だ。その中を進んでいるのだ。

「その時のお話がですね」

「そうじゃ。話したな」

「十兵衛さんが消えられた」

「うむ、残念なことじゃった」

幸村は実際に目を閉じこう言う。

「わらわ達はかけがえのない者を失った」

「全くです」

又兵衛が幸村のその言葉に頷く。

第六話 信の誓いその七

「あの戦いは我々が勝利を収めましたか」

「犠牲も大きかった」

「そうですね。まことに」

「あの戦でのことは忘れぬ」

ひいてはだ。十兵衛のこともだというのだ。

「しかしあの女は甦って来た」

「忌々しい話ですわ」

兼続もだ。このことは同意だった、何だかんだと言ってだ。

「あの義仙がまた出て来るなんて」

「問題は何時何処に出て来るかですね」

半蔵も言う。

「果たして」

「それは案外早いだろうな」

響鬼は時から話した。

「場所もここからあまり離れはしない」

「それはどうしてなんですか？」

宗朗がその響鬼に尋ねる。

「すぐにこの近くで会えるということと言えるのは」

「スサノオは人間を見る」

響鬼はこのことを指摘した。

「それなら。今戦っている俺達に仕掛けて来るからだよ」

「じゃあ本当にすぐなんですね」

それを聞いてだ。宗朗も言う。

「何時合ってもおかしくはない」

「そういうことだろうな。俺達が仕掛けるにしろ向こうから仕掛け

てくるにしろ」

どちらにしてもだというのだ。

「来るな」
「そうなりますか」
「俺の予想が正しければ」
「どうかとだ。響鬼はさらに話す。」
「あの女はすぐにこちらに攻めて来る」
「そしてですね」
「天草も来るだろうな」
「最初から決戦ね」
千姫はそれを聞いて言った。
「それなら」
「戦いは早く終わらせるに限るさ」
「こんなことも言う響鬼だった。」
「しないに越したことはないしな」
「さつきから思っていたけれど」
千姫はそんな響鬼の話聞いて言う。
「響鬼殿は」
「ああ、殿づけはいいさ」
「では響鬼さんは」
「それならいいさ。殿づけはどうも気恥ずかしいからな」
「だからだというのだ。」
「それでどうかしたのかい？」
「いえ、戦いは好まないのね」
「好きじゃないのは確かだな」
響鬼もこのことを否定しなかった。
「稽古や修業は好きだけれどな」
「つまり。響鬼さんの強さは」
「それが何なのか。宗朗は察して言う。」
「人を活かす強さですね」
「活人剣かな」
「はい、人を殺すものではなく」

「鬼は人と戦うんじゃなく人を害する魔化魅を倒すものだからな」
それがだ。鬼、即ち音撃戦士だというのだ。

「人を殺したりはしないさ。それに」

「それに？」

「魔化魅にしる命はあるんだ」

そのだ。彼等にしてもだというのだ。

「自然の化身のあの連中にもな」

「確か魔化魅は」

それは何かというのだ。それは。

「妖怪ですね」

「そうだな。簡単に言えばな」

まさにそれだった。魔化魅は妖怪なのだ。山にいるだ。

「それと戦っているからな」

「妖怪にも。そうですね」

「日本ではそう考えているよな。昔から」

「はい」

宗朗も日本人だ。それならよくわかることだった。

第六話 信の誓いその八

「だからな。やっぱりな」

「命を奪っているのは事実」

「自然にも害を与えているんだよ」

「そうだともいうのだ。鬼は。」

「もっともな。あの連中を倒さないとな」

「人間もですね」

「ああ、実際によく食い殺されてるしな」

「それはだ。響鬼もよく知っていた。」

「その辺りが難しいんだよ」

「ふむ。人の命を護る為に他の命を消す」

「幸村は腕を組んで言う。」

「そういうことじゃな」

「ああ、そうなるな」

「戦うとはそういうことじゃな」

「誰でもっていうんだな」

「侍とて同じ」

「ひいてはだ。彼女達もだった。」

「そういうことじゃな」

「じゃあ何時来てもいいように」

「宗朗は義仙について言う。」

「警戒は怠らない様にしよう」

「そんなの警戒する必要ありませんわ」

「兼続の意見は過激だった。何故過激かというと。」

「出て来たところを叩くだけですわ」

「やれやれですね」

「全くです」

そんな兼続の言葉を聞いてだ。半蔵と又兵衛は。

溜息をつきつつだ。こう言った。

「あの戦いで何も学んでいないのか」

「そもそも学んでわかる頭がないのか」

「どちらにしるこれは」

「お荷物にならないければいいのですが」

「お荷物！？わたくしがですか？」

「その通りじゃ」

幸村も言う。

「全く。そんな簡単な相手ではないぞ」

「やれやれです」

「本当に」

しかしだ。兼続はまだ言うのだった。

「何ですの！？結局はあの女を倒せばいいだけですわ」

「そんな簡単な話じゃないから」

宗朗もそれを言う。

「天草四郎だっているし」

「幕府に長きに渡って仇なすあの女」

千姫はその目を鋭くさせている。

「あの女もとなると」

「激しい戦いになるのは間違いないわ」

朱鬼は静かに言った。

「さて、まずは道場に帰りましょう」

「そうですね。それじゃあ」

明日夢も頷きだ。そうしてだった。

彼等はまずは道場に戻った。にゃんぱいあは陽気にダルタニヤンの傍にいる。ダルタニヤンもまんざらではない感じである。

そうして一行がまたこれからのことを話し合っていると。ここで外からだ。凄まじい音が聞こえてきた。それを聞いてすぐにだ。響鬼と宗朗がだ。同時に声をあげた。

「まさか」

「来た!？」

「それならだ」

「僕達も」

お互いに言い合いだ。そして。

全員道場から飛び出た。すると。

彼等の前にだ。宙に浮かぶあの女がいた。彼女を見てだ。

宗朗がだ。その義仙に対して言った。

「生きていた。いや」

「ええ、違うわ」

微笑みすら浮かべてだ。義仙は彼等を見下ろして言った。

「甦ったのよ」

「そうか、やはり」

「問題は誰が御主を甦らせたかじゃ」

幸村は前に出て義仙に問い返した。

「天草ではなかるう」

「既にそれもわかつているようね」

「スサノオじゃな」

幸村はさらに問うた。

「その見る神か」

「そうよ。天草様も私も」

二人共だった。それは。

第六話 信の誓いその九

「あの方に甦らせてもらったのよ」

「御主達を手駒にしてか」

「手駒ではないわ」

義仙がこのことを否定した。

「私も天草様もね」

「では御主達はスサノオの考えにあえて乗ってか」

「その通りよ。私達にとって悪い話ではないから」

「そして天草と共にか」

「この国を思う存分染め上げてもらうわ」

こうだ。言っただった。

「そうさせてもらうわ」

「そうはさせないわよ」

千姫は既にその手に薙刀を持っている。戦闘態勢だ。

その戦闘態勢でだ。彼女は義仙と対峙しようとする。そして。

響鬼もだ。仲間達に対して言う。

「じゃあ今から」

「はい、そうですね」

「鬼になって」

「戦うとしようか」

こう言っただった。彼等もまた。

鬼になる。それと共に。

侍達もそれぞれの得物を握る。そうして空中に浮かぶ義仙を取り

囲む。戦いがはじまるうとしていた。

それを見てだ。義仙は。

彼等に対してだ。悠然と笑って告げた。

「楽しみましょう」

「楽しむ、ね」

「戦いは楽しむものよ」

こうだ。響鬼に対しても言う。

しかしだ。響鬼もまた言うのだった。

「そこが違うな」

「違う?」

「俺は戦いを楽しむことはしないからな」

これが響鬼の言うことだった。既にその手には太鼓のバチがある。

他の鬼達も同じだ。そうしてだ。

彼等はだ。音楽を鳴らそうとする。その彼等に。

義仙は両手に剣を出した。動きはじめた。

「来た!?!」

「空から!」

それを見てだ。鬼達も侍達も。

身構える。だがその彼等に。

義仙は嵐の如く攻める。空から。

その剣撃を繰り出し衝撃波も繰り出す。剣を振り出して来てい

る。その義仙の圧倒的な攻撃を前にしてだ。宗朗が言った。

「皆、散開だ!」

「散つてどうしますの!?!」

「敵の攻撃を各自かわすんだ!」

そうするというのがだ。

「そして決して一人と当たらないことだ」

「そうですね。ここはですね」

「それが一番いいですね」

威吹鬼と轟鬼も宗朗のその言葉に応え。

最初に散開した。それを見て。

他の鬼達も侍達も続く。だが兼続は。

散開せずだ。空中から来る義仙に対して。

その鎚を思いきり振り下ろす。それで叩き潰そうとする。

「もらいましたわ!」

「あら、自分から来るのね」

「これならどうでして!？」

自信があつた。だからだ。

「わたくしのこの鎚、防げまして！」

「ええ」

悠然とした笑みでだ。義仙は応え。

そうしてだつた。彼女のその左の刀で。

兼続の鎚を受け止めてみせた。それを見て。

兼続も啞然となつた。言葉が自然に出た。

「そんな、鎚を刀で！」

「確かにいい一撃ね」

義仙は悠然とした笑みをそのままにして言う。

第六話 信の誓いその十

「しかし」

「しかし!？」

「それでは私は倒せないわ」

「こう言うのだ。」

「まだね」

「!?!かん!」

「ここでだ。幸村が叫んだ。その瞬間にだ。」

「義仙は右の刃をだ。兼続に向けてきた。それを見てだ。」

「兼続は何とかだ。鎚を蹴ってそれでだ。後ろに跳んだ。それで義

「仙の刃をかわした。そうしてそれからだった。」

「地面に降り立ちながら空中でだ。落ちてくる鎚を取り。」

「そうしてだ。上にいる義仙を見上げて言う。」

「何て奴ですよ」

「今のをかわしたのは見事よ」

「義仙は余裕のままその兼続に返した。」

「真つ二つにできたのに」

「生憎ですけれどそう簡単にはやられませんか」

「だからこそ侍ね」

「その通りですわ。今度こそは」

「止めた方がいいな」

「しかしだ。ここでだ。」

「斬鬼が来てだ。そのうえで兼続に述べた。」

「また仕掛けてもだ」

「同じといたしますの?」

「そうだ。あの女は一人で倒せるものじゃない」

「斬鬼は上にいる義仙を見ながら兼続に話す。」

「それこそ全員でぶつからないとな」

「倒せないですね」

宗朗も言う。

「とても」

「そうだな。じゃあ俺も」

響鬼はここでカードを切る決意をした。そうしてだ。そのうえでだ。彼はその切り札を出そうとした。

「じゃあここはな」

「あれですか」

「あの姿になってですね」

「それなら少しは違うだろう」

こう考えてのことだった。

「それじゃあなるか」

「そうですね。今はですね」

「それしかありませんね」

威吹鬼と轟鬼も応える。こうしてだ。

赤い鬼になろうとする。しかしここで。

不意打ちにだ。何かが出て来たのだった。

「！？あれは」

「何だ！？」

鬼達がだ。まずそれを見て言った。

それはいきなり空から来てだ。空中の義仙にだ。

一気にだ。斬りかかる。それを見てだ。

宗朗が言う。

「まさか。あれは」

「そんな筈がない！」

しかしだ。それはすぐにだ。

幸村がだ。こう言ったのである。

「あの娘は死んだ筈じゃ！」

「け、けれどあの剣撃は」

「それに姿は」

千姫は風の様に来たその姿を見て述べた。

「どう見ても」

「しかしじゃ。あの娘は」

「いや、待ってくれ」

宗朗は尚も否定しようとする幸村に言う。義仙と戦うその姿を見ながら。

「柳生義仙も甦ったんだ」

「そうですね。それではです」

「あの娘もまた」

半蔵と又兵衛も言う。

「甦ってもおかしくはないです」

「そうして再び」

「ううむ、これはまことなのか」

まだ釈然としないままでだ。幸村は述べた。

「十兵衛、まさか」

「十兵衛、あの人ですね」

明日夢はそれを聞いてすぐに言った。

「かつてあの眼帯の人と相打ちになって消えた」

「そうじゃ。しかしじゃ」

それでもだとだ。幸村はまだ言う。

第六話 信の誓いその十一

「相打ちになったのじゃ。それでは」

「普通に生きていられる筈がないんですね」

「では何故じゃ」

幸村はここでは自問自答する。そしてその自答の結果は。

「まさか。まことに誰かが甦らせたのか」

「久し振りに会ったな」

その女が言った。見れば。

紅の長い髪を白縄で無造作にまとめている。セーラー服を思わせる桃と赤の服を着ており太腿がほぼ剥き出しになっている。顔はまだ幼い感じだがその青い目からは非常に強いものが見える。その少女がだ。両手の剣を縦横に振るい義仙と闘っている。

その少女がだ。義仙に対して言っていた。

「しかしそれでも」

「それでもだというのね」

「強さは変わってはいないな」

こう言うのである。

「私と闘うだけの強さはあるな」

「そうね。そしてそれは」

「私もか」

「ええ、そうよ」

義仙もだ。その剣を練り出しながらだ。

少女に対してだ。こう言うのだった。

「生憎だけれど力は落ちていないわ」

「その様だな。それでこそ」

どうかとだ。女はまた言う。

「この柳生十兵衛の相手に相応しい」

「そうね。どうやらこの戦い思った以上に楽しめそうね」

「私が戻ったからにはだ」

十兵衛は名乗ってからまた言ってみせた。

「御主等の好きにはさせん」

「言っわね。それじゃあ」

「どうするつもりだ」

「今はこれで帰らせてもらっわ」

楽しげに笑ってだ。義仙は十兵衛に答えた。そのうえで。

一旦間合いを離してだ。再び十兵衛に述べる。その述べる言葉は。

「悪いけれどね」

「後日再戦か」

「そうなるわ。折角貴女も帰ってきたのだから」

そのだ。十兵衛を見ての言葉だった。

「そうさせてもらっわ」

「ふん。ならば去るがいい」

十兵衛はそれをよしとした。そのうえでだ。

義仙が去るのを見届けようとする。その彼女にだ。義仙はまた言
つた。

「私は一度死んだけれど」

「何だ？」

「貴女はそうではないわね」

「私は生きていた」

「そうね。けれどこれまで受けた傷が深くて」

そのせいでだ。義仙は十兵衛を見ながら話す。

「大人しくしていたのよ」

「そしてその傷を回復させ」

下からだ。宗朗が言ってきた。

「天草の封印を解いたのも」

「そうよ。スサノオよ」

他ならぬだ。彼がしたというのだ。

「それはわかるわね」

「確かに。それなら」

「私達のこの騒乱を終わらせたいのなら」

それならばどうするべきか。義仙は十兵衛達に話す。

「あの方を倒すことね」

「言われずともそうする」

十兵衛が強い言葉で答える。

「御主は倒す。天草もな」

「ではそれを誓いにして」

「今は去るがいい」

「見逃してくれるのかしら」

「戦意を消した相手と刃を交える趣味はない」

それでだとだ。義仙に告げた。

「ではまたな」

「ええ、またね」

二人は微笑みさえ浮かべ合ってた。そのうえでだった。

義仙が姿を消した。これが戦いの終わりだった。それが終わりだ。

一行は。

響鬼がだ。宗朗に言ってきた。

「とりあえずな」

「あつ、はい」

はたと気付いた顔でだ。宗朗は響鬼に伝える。

「あの娘のことですよね」

「話してくれたあの娘だよな、あの娘が」

「そうです。柳生十兵衛です」

まさにだ。彼女こそがだというのだ。

「あの娘がそのです」

「そうだな。じゃああの娘を交えてな」

「あらためてこれからのこともですね」

「ああ、話そうか」

「わかりました。それでは」

こう話してだった。一行は。

まずは十兵衛が降り立つのを待った。その彼女は。戦いが終わり暫くは不服そうだった。しかし何時までも宙にいても仕方ないと判断したのか。

地に降り立った。それから周りに話した。

「ええと。まさか生きているなんて」

「あれっ、口調が」

「はい、感じも何か」

そんな十兵衛の話と表情を見てだ。明日夢とあきららが言う。

「変わったけれど」

「穏やかというか幼い感じに」

「普段はこんな感じなんだ」

宗朗がその二人に話す。

「十兵衛はね」

「そのことは実際に御聞きしましたけれど」

「本当だったんですね」

「普段は特に攻撃的でもないから」

宗朗はこのことを保証した。

「だから。ここはね」

「そうだな。道場に戻ってな」

「そのうえで」

斬鬼と朱鬼が話してだった。そのうえで。

彼等はだ。道場に戻りだ。十兵衛にだ。ことの顛末を話すのだった。その戻って来た侍に。

第七話 義の戦その一

第七話 義の戦

またしてもだ。飯だった。

鬼達と侍達は向かい合って正座し膳の上のの飯を食べている。その中でだ。

十兵衛は井飯を次々に掻き込みながらだ。こう響鬼達に言った。

「つまりあれ？」

「あれ？」

「うん、響鬼さんだよな」

「ああ、そうだ」

気さくな笑みでだ。響鬼は十兵衛に応えた。

そうしてだ。こう言ったのである。

「俺達は鬼だ」

「鬼って人を食べたりしないんだ」

「俺達はそういう鬼だ」

こうだ。響鬼はその笑みのままで十兵衛に答える。

「さつきも言ったが」

「魔化魅よね」

十兵衛はおかずの焼き肉を箸で取りながら答えた。

「それと戦ってるんだ」

「あちらの世界ではな」

「それで他にもだよな」

箸を動かし食べながら十兵衛は質問していく。

「響鬼さん達が戦ってる相手って」

「そう。スサノオが仕掛けてくる奴等とな」

「スサノオねえ。凄いんだ」

少しきよとんとした目になって言う十兵衛だった。

「響鬼さん達と何度も戦ってるのって」

「確かに凄いな」

響鬼もだ。そのことを否定しない。

それでだ。こうも言うのだった。

「何しろ神様だからな」

「神様なんだ」

「要するにな。スサノオは神様だからな」

「その神様っていったらね」

今度は十兵衛から話す。その話すこととは。

「十兵衛もなの」

「十兵衛も！？」

「というと！？」

今の彼女の言葉にだ。すぐにだ。

宗朗と幸村がだ。彼女の左右からそれぞれ問うた。

そしてだ。こう言ったのである。二人共。

「まさか十兵衛を甦らせたのは」

「神の一柱だというのか」

「何かね。黒い服の凄く綺麗な人」

十兵衛は豆腐の味噌汁を飲みながらその二人に話した。

「その人に。こつちの世界に連れて来てもらって」

「あの人か」

「そうだったのね」

ここで納得した様に言ったのは斬鬼と朱鬼だった。

「俺達と同じく」

「この娘も」

「黒衣の青年でしたね」

半蔵がその二人の言葉に応えて言った。

「貴方達の側にいる神は」

「ああ、そうだ」

「このことはもう話したわね」

「はい」

半蔵は二人の言葉にこくりと頷いてそれを返事にした。

そのうえでだ。彼女の口からその青年のことを話した。

「貴方達の世界の人間の造物主でありかつてアギトを消そうとした神ですね」

「あの神様は人間を見ている神様なんだ」

響鬼がこのことを話した。

「とにかく。自分達の子供である人間を愛してくれているんだ」

「そう考えるといい神ですね」

宗朗もだ。彼等の話から言った。

「そうなりますね」

「そうさ。まあアギトのこともわかってくれたしな」

響鬼はかつての戦いのことからも黒衣の青年について話した。

「俺達のことをずっと助けてくれてるんだ」

「何かあれば助けてくれる神様じゃな」

幸村もこう認識していた。

「有り難い神じゃがそれでも」

「ああ。その辺りは本当に複雑なんだ」

響鬼はこのことも話した。

第七話 義の戦その二

「スサノオは人間を試す神で」

「黒衣の青年は人間を助ける神ですね」

「で、そこにバトルファイトの話も入って」

あの戦いのことも話されていく。

「ヒューマンアンドットやスマートレディやら」

「ええ、その話は聞かせてもらったけれど」

今度は千姫が言う。

「凄い神様ね」

「しかもその神を一時は敵に回しておったとは」

幸村はかつてのアギトの戦いのことに言及した。

「御主等凄いというものではないぞ」

「貴方達はそうした戦いを経てこられたんですね」

宗朗もだ。感心する様にして述べる。

「だからこそそそまでの強さなんですか」

「神さえも凌駕する」

「そこまでの力じゃな」

「力の問題じゃないんだよ、これがな」

しかしだ。響鬼は笑ってそのことは否定した。

「あれだよ。要はな」

「大事なものは？」

「というと」

「心なんだよ」

それがだ。大事だというのだ。

「人間っていうのはな」

「そうそう、心なのよ」

十兵衛が響鬼のその言葉に応える。そうして。

ここぞだ。こう言ったのだった。

「お代わり」
「まだ食べるんですか」
「うん、だってまだ五杯目だよ」
「驚く又兵衛ににこりと笑って話す。」
「十杯は食べないと」
「ううん、何か大食の方は」
戸惑いを見せながら。又兵衛は十兵衛の茶碗を受け取りお櫃から御飯を入れながら言う。
「前よりも凄くなっているかも」
「いや、五杯は普通じゃろ」
幸村もここでお代わりだった。
「わらわもそれ位食べるぞ」
「確かに。幸村様も」
「腹が減っては戦ができぬ」
非常によく言われる言葉がここでも言われた。
「そういうことじゃ」
「はい、では」
「うむ。それでじゃ」
ここまで話してだ。そうしてだ。
幸村は響鬼に顔を戻し。問うたのだった。
「心じゃが」
「確かに力も必要だよ」
鬼としてだ。それはどうしてもだとだ。響鬼は言う。
「しかしだ。それと共にだった。」
「けれどそれ以上にな」
「心があつてこそか」
「何かが出来て果たせるんだ」
「これが響鬼の言葉だった。」
「そうなんだよ」
「ううむ。義じゃな」

「義？」

「うむ、義じゃ」

それだというのだ。

「わらわ達のそれは義になるな」

「その義があるからアギトは神に勝てたっていうんだな」

「そうなるな」

こう響鬼に話す幸村だった。

「ひいては」

「それがわらわ達にとっては義になるのじゃ」

「義、忠義か」

「忠義とは限らん」

義とはだ。それだけではないというのだ。

そしてだ。幸村はその義について具体的に話しはじめた。

「仁義に信義、孝義とじゃ」

「つまりあらゆることか」

「左様、義とは即ち心」

幸村の心が澄んできた。尚更。

第七話 義の戦その三

「それがあるからこそじゃ」

「人間だっというんだな」

「そうした意味でも鬼、仮面ライダーと侍は同じ」

幸村はここで一つの結論を出した。そうしてだった。

宗朗に顔を向けてだ。そして言ったのだった。

「ではそのことを忘れずにじゃ」

「戦っていくんだね」

「最後の最後までな」

「それでね」

十兵衛がほうれん草のひたしを食しながら言ってきた。

「その黒い神様だけれどね」

「黒衣の青年が？」

「うん、何か色々やることあるんだって」

こう一同に話すのである。

「それで今はね」

「今は？」

「ここに来ることはできないけれど」

それでもだというのだ。

「十兵衛に鬼さん達に伝えて欲しいって」

「何ですか、それは」

「一体」

威吹鬼だけでなく轟鬼も十兵衛に問うた。思わず身を少し乗り出している。

「黒衣の青年が僕達に伝えたいこと」

「それって何なんだ!？」

「この世界のスサノオは天草四郎との戦いの後で出て来るんだって」
これがだ。黒衣の青年からの伝言だというのだ。

「だから。天草に勝つてもね」

「油断してはいけない」

「そういうことか」

「そのことを伝えて欲しいって」

十兵衛はあくまで天真爛漫な調子で話す。戦いの時とは全く違う。

「そう言われたから」

「やっぱりそうなんだね」

宗朗は十兵衛の言葉を聞いて。納得した様に頷いた。

そうしてだ。また言う彼だった。

「スサノオは僕達を見て試し続けているんだ」

「本当に趣味の悪い奴ね」

千姫は宗朗の言葉を受けて慥然とした顔になる。

そのうえでこう言っただ。スサノオへの嫌悪を見せたのである。

「最後の最後まで出て来ないなんて」

「まああれだ。大物は最後に出て来るものだからな」

響鬼がその千姫にこう話す。

「特に気にすることでもないさ」

「まずは戦いましょう」

半蔵が述べる。

「柳生義仙、そして天草四郎と」

「そうだな」

半蔵の今の言葉に頷いて応えたのはダルトニヤンである。見れば器用に箸を使い続けている。

「それでは今からだ」

「また向こうから来るな」

桐矢は己の読みを述べた。

「さて、その時に」

「もう一度迎え撃ちましょう」

あきらが応えて。そうしてだった。

彼等はそのまま食事を摂る。そうして今は十兵衛の帰還を喜ぶこ

とにした。その食事の後で。

十兵衛はにゃんぱいあ達とだ。庭で遊んだ。そのにゃんぱいあ達にだ。

十兵衛はその彼等にこう尋ねた。

「君達つてさ」

「何にゃ？」

「何かあるのかよ、俺達に」

にゃんぱいあとまさむにゃがその十兵衛に問い返す。

「他の世界から来たんだよね」

「そうですよ」

にゃてんしがその問いに答えた。彼も来ているのだ。

「僕達は元々は天界にいまして」

「天界？」

「神様がおられる世界です」

そこから来たというのだ。

「ですからとても偉いんですよ」

「ふうん、君達つて偉い猫なんだ」

「はい、そうなんです」

にゃてんしは平然と嘘を吐いた。

「だから崇め奉らないといけないんですよ」

「そうだよ。偉いんだからね」

そしてだ。十兵衛はにゃてんしの嘘をそのまま信じた。

第七話 義の戦その四

そのうえでだ。こう言うのだった。

「神様みたいなものだよね」

「いえいえ、僕は天使ですよ」

このことだけは正しかった。

「天界にいまして」

「天界って？」

「その神様がいる世界で」

「あつ、何か基督教の？伴天連の人達が言う」

「そうなんですよ。そこにいまして」

「じゃあ本当に天使なんだ」

「はいそうです、ですから」

ここからがだ。にゃんぱいあの本題だった。

その顔に黒いものを帯びさせてだ。彼は言った。

「僕にですね。お魚なり鶏肉なりを何時でもたっぷりと」

「っていい加減にしておけよ」

しかしだ。そのにゃてんしをまさむにゃが注意してきた。

「御前いつもそう言うって誰かに悪さしてるだろ」

「はて、そうでしょうか」

「そうだよ。全く仕方のない奴だな」

「何しろ僕は天使ですから皆崇めなくてはいけないのですよ」

「けれどその行いのせいで」

茶々丸はにゃてんしに対しても鋭く容赦がない。

「天界にいられなくなっただんですよね」

「全く。天界も心が狭いですね」

「御前は幾ら何でも日頃の行いが悪過ぎるんだよ」

まさむにゃはにゃてんしに対して一番容赦がない。見ればカツオはそのまさむにゃの後ろに隠れてがたがた震えている。そんな状況

だ。

そんな中でだ。毛利君と小森君が十兵衛に尋ねた。

「それでいいかな」

「僕達周りを見てきたけれど」

「何かわかったの？」

「うん、周りは平和だったよ」

「特に怪しいところばなかったよ」

「そうなの」

二匹から話を聞いてだ。十兵衛は。

目を何度かしばたかせてからだ。こう言った。

「じゃああの娘何処に隠れてるのかな」

「多分ですけど」

茶々丸がその十兵衛に話してきた。

「その人達こちらの世界にはいませんよ」

「じゃあ茶々丸ちゃん達の世界にいるの？」

「いえ、そこでもありません」

彼等の世界でもないのだ。茶々丸は話す。

「そこにいれば大騒ぎになりますから」

「あんな人が出て来たら」

「そうです。それこそ大変なことになります」

それだけの騒ぎになってしまうというのだ。

「とはいっても響鬼さん達の世界でもなく」

「それじゃあ何処なの？」

「あの人達の世界ですね」

茶々丸は自分に顔を下ろしてきている十兵衛の顔を見上げて話す。

「スサノオさん達の」

「そこにいるの」

「はい、そこから僕達を見ているんです」

そうだというのだ。

「そうして何を仕掛けようかと考えているんです」

「僕みたいにな」

にゃんぱいあは自分のことから述べた。

「人が何をするのかを見ているにゃ」

「そうですね。兄上の仰る通りです」

「やったにゃ、僕の予想が当たったにゃ」

「いえ、もうこれは仮面ライダーの皆さんに御聞きしてますから」

兄に対してもだ。茶々丸は容赦がない。

「十兵衛さん達も見ていますよ」

「十兵衛そんなにじろじろ見られるの好きじゃないけれど」

「そうした意味ではなくてですね」

「違うの？」

「そうです。スサノオは人間自体を見えていますから」

ひいてはだ。それは。

第七話 義の戦その五

「人の心を持つている相手を」

「じゃあそれだと」

茶々丸の言葉からだ。十兵衛は一つの答えを出した。その答えは。「にゃんぱいあちゃんや茶々丸さんだつてそうなるわよ」

「そうですね。僕達に人間の心があるかどうかはわかりませんが」

「猫だから？」

「蝙蝠だから？」

「それで？」

十兵衛に続いて毛利君と小森君もここで言う。

「それでなの？」

「まあ確かに僕達蝙蝠だけれど」

「それでもなんだ」

「いえ、もっと根本的な問題です」

かつより大きなことだとだ。茶々丸は話す。

「僕達の心が人間のものかという」と

「完全に猫だからな、俺達」

「その通りだにゃ」

まさむにゃとにゃんぱいあもこのことには頷く。

「猫として生きて好き勝手やって」

「それで人間というのにもにゃ」

また違うのではないのか、二匹もこのことに気付いた。

そしてだ。彼等はこう言うのだった。

「それじゃあ猫としてか」

「考えてもいいにゃ？」

「兄上は吸血猫ですが猫は猫です」

自分の兄はそうだというのだ。

「そのことは変わりありません」

「ただ血や毒が好きなだけにや」
「やんぱいあも言う。」

「それだけにや」

「はい、その通りです」

「まあ猫だから人間だからじゃなくてな」
「まさむにやは茶々丸に続く形で言った。」

「俺達は俺達でいいか」

「そうだにや。少なくとも僕は不自由していないにや」

「そうです。ただあのスサノオに見られているという点で」
「それならばだというのだ。」

「僕はもう人間とも考えられます」

「僕達が人間？」

「スサノオは人を見る神ですから」

「そのだ。彼に見られているということから出る答えだった。」

「ですからそれも」

「ううん、何か難しいにや」

「特に難しく考える必要はありません」

「それはないとだ。茶々丸は兄に話した。」

「そのまま考えればいいんですよ」

「そうにや？」

「そうです。十兵衛さんもです」

「十兵衛もなの」

「そうです。あくまでありのままです」

「茶々丸はまた十兵衛に話す。」

「考えられていいですから」

「ううん、それじゃあ？」

「それじゃあ？」

「今度は何なんだ？」

「十兵衛お腹空いた」

十兵衛が今思ったことはこのことだった。このことを言ってだ。

早速だ。にゃんぱいあ達に提案した。

「だから皆で何か食べる？」

「そうですね。ここはですね。」

にゃてんしは宙に浮かび寝転がり煙草を吸いながら述べる。

「デザートにしますか」

「デザートかよ」

「はい。お菓子でも食べますか」

「お菓子よりもさくらんぼがいいにゃ」

にゃんぱいあはそれがいいと主張してきた。

「紅いものがいいにゃ」

「紅ですか。いいですね」

「それがいいにゃ」

「ではそうしましょう」

気紛れな感じでだ。にゃんぱいあは言葉に頷いてだ。

第七話 義の戦その六

にやてんしもいいと答えた。ここでだ。

彼等のところにだ。宗朗と明日夢が来て声をかけてきた。

「ああ、君達ここだったんだ」

「十兵衛さんもおられますね」

「うん、何？」

十兵衛は二人に顔を向けて応える。

「何かあったの？」

「いや、丁度おやつの間だから」

「それで探してたんですよ」

「おやつ？何でしょうか」

「さくらんぼだよ」

「どうですか？」

宗朗も明日夢もにやてんしにも答えた。

「皆もう集まってるから」

「それで皆で一緒に」

「丁度食べたかったところにや」

にやんぱいあは満面の笑みで応える。

「それじゃあそれを食べるにや」

「俺もにやんぱいあが一緒ならな」

「僕も別に」

まさむにやと茶々丸も言う。

「それでいいぜ」

「そうさせてもらいます」

「僕達も実はね」

「雑食だし」

毛利君と小森君も問題なしだった。

「それじゃあお言葉に甘えて」

「今から」

「はい、では君も」

にやてんしはカツオの前に立ち彼を問い詰める様にして賛成を促す。カツオはその彼に見られてやはり震えている。震えずにはいられない。

「いいですね」

「えっ、僕は」

「さくらんぼ好きですね」

「ええと、その」

「ここで好きと言えば天国に行けるのですね」
いつもの滅茶苦茶な暴論だった。

「さあ、言うのです」

「そのさくらんぼ僕食べられるのかな」

「えっ、それは当然じゃないか」

「カツオ君の分もあるよ」

そのことはにやてんしではなく宗朗と明日夢が保証する。

「だから皆集まってるね」

「それで食べようよ」

「はい、それじゃあ」

「そしてここで、です」

まだだった。にやてんしはカツオの前に立ったままだ。こう言うのだった。

「僕にそのさくらんぼをくれれば」

「えっ、僕のさくらんぼを」

「そうです。そうすればです」

また言うのであった。

「貴方は天国に行けるのですよ」

「おい、いい加減にしろよ」

まさむにやがここでにやてんしに言う。

「全く。カツオはちゃんとカツオの分食べていいからな」

「いいの？」

「ああ、気にするな」

こうカツオに言うまさむにゃだった。

「本当にな」

「うん、それじゃあ」

こうしてだった。彼が食べることはまさむにゃも保証した。こうしてだった。

人間も猫も一緒にさくらんぼを楽しむ。そのさくらんぼを食べて千姫が言う。

「このさくらんぼは」

「山形のさくらんぼです」

「そうね。絶品ね」

微笑んで食べながらだ。千姫は満足して言う。

「やっぱりさくらんぼは山形よ」

「そうですよね。本当に」

「あと牛は」

それはどうかというと。

「兵庫ね。あの神戸の牛がいいわ」

「姫様は神戸を鼻屑にされてるんですよ」

半蔵が自分達の向かい側に座る響鬼達ににこりと笑って話す。

第七話 義の戦その七

「御幼少の頃から神戸がお好きで」

「相性か？」

桐矢がそれを聞いて言う。

「その関係か」

「相性というよりは」

どうかとだ。その千姫が話す。

「中から来るものなのよ」

「だから神戸が好きなのか」

「昔からね。それで野球は虎よ」

それはそちらだというのだ。

「縦縞でないと納得しないわ」

「鬼の球団はこっちの世界にはあるか？」

響鬼は少し笑って千姫達に尋ねた。

「あれは少し嬉しいだけねどな」

「あつ、そういう球団はないです」

宗朗がその問いに真面目に答える。

「十二球団ありますけれど」

「それでもか」

「鬼はないですね」

こつ話すのである。

「あとこの世界ではです」

「この世界ではか」

「野球よりもやっぱり」

「武道だな」

「侍ですから」

それが理由でだというのだ。

「武道が一番盛んですね」

「じゃあ体育の時間も」
「それとは別に武道の時間があります」
「そうだというのだ。」
「僕はその師範なんです」
「じゃあ宗朗少年はあれか」
「学生ですが師範でもあります」
「そうだ。響鬼に話すのである。」
「それで結構忙しいんです」
「成程。そしてその忙しい中でだな」
「充実してます」
「それはだと。微笑んで言うのである。」
「毎日が」
「そうだな。忙しいと余計にな」
「充実しますね」
「そう、それがいいんだ」
「響鬼は大人のそのよさを見せて応える。」
「忙しい中で何をするか」
「それですね」
「何を果たすか」
「ひいてはそういうことだった。」
「それが大事なんだ」
「では僕は」
「果たすんだな」
「スサノオとのことを終わらせませす」
「具体的にはそういうことだった。」
「ここで」
「それがいいな。ただしな」
「スサノオはですね」
「強いからな」
「このことも言うのだった。」

「何しろ神だからな」

「神の力は絶大ですね」

「そうさ。けれどな」

それでもだとだ。響鬼は微笑んで言うのだった。

第七話 義の戦その八

「勝てない相手じゃない」

「大切なのは心ですわね」

「それがどうかで戦えるからな」

「神に勝つ戦いですか」

「それができるんだ。何度も言うが心なんだ」

それがあればだ。響鬼は話していく。

そのうえでだ。宗朗にまた言った。

「勝てないと思っただら勝てる戦いも勝てないよな」

「はい、それは確かに」

「武道だつてそうだよな」

「気持ちが悪ければどうしようもないですね」

彼もだ。これまでの多くの勝負でそれがわかってきた。彼も伊達に武道指南役ではない。尋常ではない武芸、それを培ってきた勝負も知っているのだ。

だからだ。響鬼の言葉に頷き答えたのだった。

「確かに」

「そう。じゃあ最初から勝つて思ってたな」

「戦いに赴きますか」

「そうしよう。それとだけねどな」

「それと？」

「あの十兵衛ちゃんは面白いな」

彼女のこと話す響鬼だった。

「純粹でそれでいてな」

「そうです。あの娘は純粹で」

そうしてだとだ。宗朗も彼女について話した。

「そうしていざという時には」

「ああなるんだな」

「ああなつた時の十兵衛は本当に強いです」

「あの娘がいるのも運命だな」

「十兵衛もですか」

「そうだろうな。運命だろうな」

「こう言う響鬼だった。」

「俺達全員が運命の中にいるんだ」

「じゃあ次の戦いでは」

「運命を切り開くか」

響鬼はここでも微笑んでみせた。

「俺達自身でな」

「運命は自分の手で切り開くものでしたね」

「それが人間だからな」

こんな話もしたのだった。その二人に十兵衛、それに明日夢がだ。今度はだ。慶彦から直接呼ばれた。その慶彦はだ。

生徒会室でダルタニヤンを横に置きだ。会長の机から問うたのだ。つた。

「一つ決めた」

「決められたとは」

「僕も戦おう」

「こうだ。宗朗に言ったのである。」

「君達と共にな」

「おや、考えを変えたんだな」

「少し考えたのだが」

そのうえでだ。宗朗は自分の前に立つ響鬼に話した。

「スサノオだったね」

「はい、その荒らぶる神です」

「かなりの力を持っているのは間違いない」

「そうだとだ。彼は宗朗達に対して話す。」

「そして若し彼等が勝利を収めれば」

「この国大変なことになっちゃうよね」

十兵衛は彼女が考えていることをそのまま言葉に出した。

「もう滅茶苦茶にされて」

「そうだ」

まさにそうだ。慶彦は十兵衛にも答えた。

「徳川家、日の本の政を司る我が家としてもだ」

「捨ててはおけないんですね」

「最初はダルタニヤンだけでいいと思った」

慶彦は明日夢に応えながら自分の右隣に立つダルタニヤンを見た。

そのうえでだ。響鬼達に語ったのだ。

「しかし相手はそれどころではないな」

「何しろあらゆる世界に干渉してきている相手ですから」

「それだけの相手ならばだ。僕も戦わなくてはならない」

慶彦は確かな顔と声で言い切った。

第七話 義の戦その九

「君達と共に戦おう」

「有り難うございます、それでは」

「慶彦さんも十兵衛達の仲間なんだね」

「仲間か。仮面ライダーではそう言うのか」

「ああ、言う奴もいれば言わない奴もいるな」

そこは色々だとだ。響鬼は話した。

「けれどまあ。一緒に戦うんならな」

「仲間になるか」

「そう思ってくれていいさ。さて、そろそろかな」

慶彦の微笑んでの言葉に伝えてだ。すぐにだ。

響鬼はだ。その表情を少し察するものにして目をやや上にさせてだ。

こう言ってみせたのだった。思わせぶりな雰囲気だ。

「また出て来るかな」

「柳生義仙が」

「あと天草四郎か」

彼女もだというのだ。

「それとその後ろにいるな」

「スサノオもですね」

「出て来るだろうな」

「わかりました。じゃあ」

「戦いの準備だね」

宗朗と十兵衛が応えてだった。そうして。

慶彦を迎えた彼等はだ。一旦また道場に入った。そこでだ。

またしても飯を食う。今度は。

「この鍋は」

「何かしら」

慶彦と千姫の兄妹が皆で鍋を食う中でだ。眉を顰めさせていた。鍋の中には豆腐に白菜、葱、エノキ、それに白身の魚がある。その魚を食べてだ。

「美味だが」

「食べたことはないわ」

「あつ、この魚はですね」

宗朗がだ。その二人に説明した。

「河豚です」

「河豚!？」

「河豚というと」

「はい、毒がありますがとても美味しいですよ」

「その毒はじゃ」

幸村もその河豚を食いながら二人に話す。

「ちゃんと宗朗が取り除いておいた」

「河豚の毒は皮や内臓にあります」

「それを取り除いてか」

「そうして調理したものの」

「はい、だから大丈夫です」

食べてもだ。いいというのだ。

「安心して召し上がって下さい」

「それならいいが」

「河豚を食べるのは正直」

二人はやや戸惑いながらだ。こう言うのだった。

「僕は河豚を食べるのははじめてだ」

「私も。この魚は」

「天皇家と将軍家の方々はです」

半蔵がだ。ここで事情を話した。

「河豚は食べられないんですよ」

「毒があるからだよな」

「はい、だからです」

それでだ。半蔵は響鬼にも話す。

「若しものことがあってはいけませんから」

「それなら出さない方がよかったですか？」

あきらも食べながら言う。その顔が曇っている。

「私が決めたんですが」

「いや、それはいいよ」

宗朗がそのあきらに言った。

「僕もいって言ったし」

「だからですか」

「うん、いいよ」

こう言うのである。

「御叱りは僕が受けるから」

「言ったわね」

宗朗がこう言った瞬間にだ。千姫がだ。

その目をきらりと光らせてだ。こう言ったのである。

「ではいいわね」

「何がですか？」

「責任を取ってもらおうわ」

その目での言葉だった。

第七話 義の戦その十

「このことのね」

「むっ、御主何を言っておる」

「だから責任を取ってもらおうのよ」

千姫は宗朗にも臆面もなく言い返した。

「この河豚のことをね」

「待て、この場合の責任とは何じゃ」

「言うまでもないわ。柳生家は代々幕府の武芸指南役で家柄も充分
ね」

「だからそれがどうしたというのじゃ」

「徳川家とも幕府開闢以来懇意だし」

千姫の話が続く。

「以前にもこうしたことはあつたし」

「あの、姫様それでは」

「半蔵、高校を卒業したら」

このだ。学園をだどだ。千姫は半蔵にも言った。

「いいわね、結婚よ」

「ほ、本気ですか!？」

「嘘でこんなこと言わないわよ」

千姫の目はその輝きをさらに強くさせていた。

「いいわね。この責任は必ず」

「よいのか、これで」

千姫にはもう言っても無駄だと判断してだ。幸村は兄の慶彦に問
うた。

「とんでもない話が勝手に進んでおるぞ」

「河豚のことは僕も知っていた」

慶彦は幸村のその言葉にここから話した。

「その毒は一匹で何十人も殺せる」

「それがどうかしたのじゃ」
「次期將軍である僕を毒殺しようとしたこと」
「だからそれは違うと言っておるうが」
「このことは万死に値する」
幸村の話聞いていない様に思えた。しかしだった。
慶彦はだ。ここでこう言ったのだった。
「責任を取ってもらわないといけない」
「ではお兄様」
「可愛い妹を奪われることは残念だ」
「完全な棒読みだった。見事なまでの。」
「しかしこの罪を咎めないではいられない」
「それではですね」
「千、認める」
「ここだ。慶彦はにたりと笑ってみせた。」
「これで僕は妹婿を手に入れ徳川家もまたよき侍を取り戻せた」
「あの、御言葉ですが」
「しかしだ。慶彦がここまで言ったところだ。」
「あきらがだ。こう言ってきた。」
「この河豚ですけれど」
「河豚が？」
「どうかしたの？」
「サバフグですけれど」
「その河豚だというのだ。」
「毒のない」
「何っ、毒のない河豚もいるのか」
「そうだったの」
「はい、最初はトラフグだと思ったんですけれど」
「それがだ。実はだというのだ。」
「サバフグでした。毒のない」
「この河豚は安心して食べられますから」

明日夢もここで慶彦達に話す。

「美味しいですし」

「ううむ、では宗朗の責任のことは」

「これでは」

「ないのう」

幸村がすかさず打ち消してきた。

「全く。河豚位ちゃんとかわかっておれ」

「いやいや、河豚はやっぱり毒があるものだからな」

響鬼はその幸村に笑って話す。

「ある脚本家の人なんかは河豚を食おうと思って皆に止められたこともあるからな」

「毒があると皆思っておるからか」

「そうだよ。だからそれは仕方ないさ」

「しかし責任のことはどうなる」

幸村は不安げに宗朗と千姫を交互にせわしく見ながら響鬼に問うた。

第七話 義の戦その十一

「全く恐ろしいことを言いおる」

「まあ毒はないからね」

「責任は起こらん」

「そうなるかな、この場合は」

「ではじゃ。この話はなしじゃ」

幸村は強引にそういうことにしてしまった。

「よかったのう宗朗、御主は助かったぞ」

「助かったってどうか僕は何も言っていないけれど」

周りの騒ぎにきよとんとしていただけだった。

「何ていうか」

「全く。あと一歩だったのに」

むしろだ。千姫が忌々しげに齒噛みしている。

「余計なことを」

「危ういところだったわ。油断も隙もないわ」

「けれどまたの機会に」

これで諦める千姫ではなかった。それでだ。

まだ宗朗を見てだ。今度はこんなことを言うのだった。

「私はそれこそ宗朗をいつも」

「どうしていたのじゃ」

「馬にしていたのよ」

幼子の頃のことを言うのだった。

「私が人になって宗朗をいつも操っていたのよ」

「完全にかかあ天下ではないか」

「悪くて？私はそもそも」

「わかっておるわ。庭球でも部長だったな」

「知ってるのね、そのこと」

「ふん、知らぬと思うかこの幸村が」

話がここでもよくわからない方に飛んできていた。

「西洋の軽音楽もやっておるし魔乳がどうとかもじゃな」

「あっ、それわたくしもですわ」

兼続もここで言う。

「これでも最初は胸が大きくてたゆんたゆんでしたわ」

「何か話が凄くなつてませんか？」

威吹鬼は鍋の中の野菜と豆腐を取りながら言った。

「まあ何はともあれ今はサバフグを食べてですね」

「はい、英気を養いましょう」

又兵衛が彼のその言葉に頷く。

「それでは」

「河豚も野菜もまだまだありますから」

轟鬼はこんなことを言いながら実際に鍋に野菜や豆腐を入れてい

く。無論河豚もだ。

「それで最後はですね」

「雑炊だな」

「最後の最後はそれね」

斬鬼と朱鬼が応える。

「鍋の最後はやはりあれだ」

「雑炊がなくては話にならないわ」

「卵も用意してますから」

轟鬼は実に用意がよかった。

「最後の最後まで食べましょう」

「そうして決戦に赴くとするか」

慶彦がまた言った、

「この世界での決戦に」

「はい、先は長いですし」

宗朗はこの世界でのことだけではないと。もう強く意識していた。

「食べてそうしてです」

「わかっているさ。そうして」

「戦いましょう」

こうした話をしながらだ。彼等はその河豚鍋を食べていく。その後でだ。

風呂だった。女組が風呂に入っている。その中において。

幸村がだ。いささか嫉妬する目だ。あきらの胸を見てこう言った。

「大きいのう」

「そうですか？」

「全く。若いというのにその大きさが」

こう言うのである。羨望の目で。

第七話 義の戦その十二

「わらわはずっとこうだというのに」

「そればかりは仕方ないわよね」

「胸はね」

立花姉妹もいる。彼女達はこう言ってだ。

幸村にだ。こんなことも言った。

「けれどそれはね」

「気にすることはないから」

「慰めはいらんぞ」

「だから。慰めじゃなくて」

「胸が小さいのがいい人もいるのよ」

二人が話すのはこのことだった。

「世の中そういう人も多いから」

「特に気にすることはないわ」

「それでしたら私も」

兼続が二人の話に乗ってきた。

「夢がありますわね」

「夢というのかしら」

千姫は身体を洗いながら彼女に対して言う。大事な部分は泡で隠れている。

「それは」

「私これでもギターもやってまして」

「ギターも。ああ、そういえば」

「あの時もね」

姉妹はそのことにふと気付いた様になって述べた。

「妹さんの方がね」

「そうなってるわよね」

「うう、だから余計にですの」

兼続もムキになっている。無意識のうちにそうになっている。

「何時か討ち乳になれる位の胸が欲しいですわ」

「討ち乳ね」

また千姫が反応を見せる。

「あれじゃやられたらもう痛いわよ」

「千姫様はそちらの世界でも巨大じゃないですか」

兼続は千姫のその大事なところが隠されている胸を見て言った。

「正直羨ましいです」

「そうじゃ。胸が大きいのはそれだけで凄いことなのじゃ」

幸村もそれを主張する。

「わらわもじゃ。何時かはたゆんたゆんになってじゃ」

「幸せになりますわ」

「幸せなんですか？」

あきらは二人の話を聞いてもそれには首を傾げさせる。

「胸が大きいとそれだけで」

「持っている者にはわからんわ」

「持たざる者の苦しみは」

「うっん、そうなんですか」

「だから。何度も言うけれど」

「大きいのも小さいのもそれぞれよ」

姉妹は落ち着いてこう彼女達に話し続ける。

「何も大きいだけじゃないから」

「形だつてあるし」

そうした話をしながらだった。風呂に入っていた。

既に男達は風呂から出ている。それから浴衣に着替えて縁側で西瓜を食べながらだ。響鬼はだ。慶彦にこう尋ねた。同じく西瓜を食べている彼に。

「あの時の話だけれどな」

「千姫の戯れのことかな」

「あれは戯れじゃないよな」

笑つてだ。慶彦に尋ねる響鬼だった。

「そして君もな」

「さて、それはどうかな」

このことはだ。何かを隠す笑みを浮かべてだ。

そのうえでだ。彼はこう響鬼に返した。

「僕は特にな」

「特にかい」

「千姫の幸せを願っているだけさ」

「妹さんのか」

「そう。兄としてあの娘には幸せになつて欲しいだけさ」

その微笑みで西瓜を食べて言う慶彦だった。

「もつとも僕は宗朗も」

「彼もか」

「嫌いじゃない」

妹のことを話しながらだ。同時に彼のこととも言つのがだった。

「昔からね。ああいう人間は嫌いじゃない」

「むしろ好きというのかな」

「そうだね。好きだね」

隠さなかった。それも全く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7982w/>

仮面ライダー エターナル＝インフィニティ

2011年11月6日02時10分発行